
転生人生 【極悪の葱】

シュマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生人生 【極悪の葱】

【Nコード】

N2055P

【作者名】

シュマ

【あらすじ】

転生人生、第二段！前作を見ていなくても大体大丈夫！

主人公はネギに憑依しています。主人公がかなりイベントをスルーするかも……。まあ、バトル薄めのほのぼの系だと思われます。

キャラ設定やら世界観【随時更新・ネタバレを含む】（前書き）

これは作者の脳内設定の一部なのでコレを元に他の作品などを批判したりしないで下さい。この設定はあくまでこの小説を楽しむためのスパイスなのであしからず。

とりあえずネギとウェールズの人達を追加。

マホラ教員とエヴァを追加。

ウェールズとマホラ追加

2 - Aを追加、8番、13番

キャラ設定やら世界観【随時更新・ネタばれを含む】

初めに

この物語は稀有な能力を持ち、奇妙な人生を送る、凡人が主人公です。

++++

ネギ・スプリングフィールド

この物語の主人公であり、主人公に最も相応しくない人物。自らの持つ、能力により輪廻転生を繰り返す。

性格、元々備わっていたネギ少年の善良さと転生者が持っている自分本位な悪性により、ネギは良心的な小悪党みたいな感じに、例えるなら綺麗なジャギ様。

彼（転生者）の能力、【先天的遡性性質】 彼の魂の影響を持つ因子（つまり前世の彼）の人生を追体験し、記憶や経験を得ることができ、現在は17人の彼の生を覚えている。

ネギの能力、郭海皇（超が付くほどの武術家、中国拳法そのもの）技術、と魔法。

ネギの得意な魔法属性は風と水、攻撃魔法より補助魔法を重点的に覚えている。

得意技は音速で振るう【羅刹拳】

本来のネギ少年はうっかりが多く、ファザコンで誘導されやすい男の子です。主人公ってよりトラブルメーカーなヒロインみたいですよね。

++++

アンナ・ユーリエウナ・ココロウア通称アーニャ

この物語のヒロイン、面倒見がよく、お節介でもある。とても明るい性格をしており、ときより熱血になる。おしゃま、でも今は色気より食い気でハイティーとお菓子が大好き。

ネギに対しては自分のほうが年上だと思っているが、ネギのほうが優秀だと確信しているため、割と素直、ネギのことを頼れる友人と見ていて、淡い恋心が芽生えている。

火の魔法属性に天性の才能を持っており、得意技は全身から業炎を放つ【アーニャ・ビッケバン】

アーニャはツンデレ幼馴染、作者的にGJです。

++++

ウェールズ ネギの故郷、イギリスのど田舎、でもこの近くに魔法世界へのゲートがあるため、魔法使いが多く隠れている。研究者や隠遁生活の魔法使いの楽園？ここにあるメルディアナ魔法学校はアリアドネー、マホラなど各地の教育、研究機関と提携している。

スタン爺さん、村の長的人物。ネギやアーニャを可愛がっており、ネギを置いていったナギに強い不満を持っている。適正魔法属性は風と土。

ノーギル・スプリングフィールド、メルディアナ魔法学校の校長でネギの祖父。ネギやアーニャを猫可愛がりをしており、二人に対

してホイホイ魔法（古代語魔法や殲滅魔法）を見せびらかすように教えた。アーニヤが此処まで強くなったのはこいつのせい。適正魔法属性は炎と風。爺馬鹿。

クリス・ココロウア、アーニヤの祖父。日々、暮らしを楽しむ魔法を研究している人。三日天才（三日間、頭が良くなるがその後一ヶ月幼児退行する。）やお掃除、洗濯、畑仕事、紙飛行機をどこまでも飛ばす魔法等を開発した知る人ぞ知る新魔法研究の第一人者村でも有名な変人。マッドサイエンティスト。

ドネット・マクギネス、ノーギルの秘書。ネギ様ファンクラブの会長、彼女のベットの枕元にはネギ（馬鹿ネギ時のあどけない笑顔）の写真が飾られており、ネギがまほらにいつてからさらにネギへの情愛が燃え上がっている。危ないお姉さん。

ネカネ・スプリングフィールド、ネギの従姉妹。ネギ様ファンクラブ親衛隊隊長、ドネットとは違い、萌えネギよりも普段のネギを好んでいる。魔法学校を卒業して、ネギと一緒に暮らすように、学校で働きながら生活を送っている。姉馬鹿。

ココロウア夫妻、夫リック、妻ローズ。心優しい人達で果樹園を営んでいる。リックは娘婿でクリスにボロボロにされながらも何とか和解し結婚した。二人はよくピンク色の空間を作り出すのでアーニヤはよくネギのところに。万年新婚夫婦。

+++++

マホラ学園都市 1890年ごろに建てられた魔法学校としては歴史が新しい学校。本来は西洋魔法使いがアジアの術者に対する拠点だった。しかしマホラ内部にMMの介入や日本の術者の工作によ

り危機感を募らせ、学園都市を築き、一般人を置くことによって表向きに活動できなくした。

図書館島、戦中の戦火に巻き込まれないよう世界中の貴重な書物を集めたらしい・・・が完全に魔法使い達の趣味である。現在も表、裏問わず集められた書物は増加の一途を進んでおり、それに伴い図書館島の増築が進んでいる。増築をしているものについての噂はあまりない。

このえ・このえもん
近衛近右衛門

マホラ学園都市、学園長。かつては世界でも五本の指に入るほどの古豪、その力はいまだ衰えずさらに老獪さを増している。あの長い頭は彼の豊富な知識が詰まっているらしい。陰陽道と西洋魔法を組み合わせた全く新しい術を使うらしい。愉快犯。

エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエル 吸血鬼の真祖にして最狂の魔法使い、600年の叡智と戦闘経験はまさに怪物的、彼女自身は才能はたいしてなかった筈（後天的な真祖だから）最強の凡人、合気柔術の達人で人形遣い。適正魔法属性は氷と闇。ナギに惚れていて罫に掛けられた可哀相な人。ナマハゲ。

高畑・T・タカミチ マホラ女子中等部の英語教師で美術部顧問、GHQで活動しており出張を頻繁にしており、新田先生からはあまり良いイメージをもたれていない。苦勞人、作者は忙しすぎて白髪になったと思つてた。学園最強の魔法先生と呼ばれている、彼の真骨頂は居合い拳でもカン卦法でもなく、エヴァとの戦闘訓練や実践で培った洞察眼である。デスメガネ。

新田先生、女子中等部で3年の学年主任、進路指導部長をしている生徒想いな先生。規律に厳しく、学校内で怒鳴る姿はもはやマホラ名物、しかし決して理不尽に起こるようなことはせず、物分りが

良い。ホワイトデビル。

源しずな先生、女子中等部で英語科の教師をしており、ネギの副担任兼指導教員である。1974年6月28日生まれ、寅年、蟹座のAB型。趣味はドライブ、好きなものはざるそばと日本酒、嫌いなものはタバコの煙。シヨタ疑惑有り、酒豪でカラミ酒。バスト9の乳神様。

++++

2 - Aの生徒。

神楽坂アスナ、出席番号8番。強気、バカ力、お人よし、熱血と主人公属性を持ち、魔法無効化能力を持ち血筋もラスボス？である最初の魔法使いの末裔っぽい。目はオッドアイで武器も精神の高ぶりで強くなると完全に主人公である。ネギま！では重要な位置におり、物語の鍵になる人物。好きな人は高畑先生。美術部所属。バカレッド。幼女時代はポスト綾波。

近衛このか、出席番号13番。マホラ学園の学園長の孫にして、関西呪術教会の長の一人娘、極東最大の魔力量を持ちその価値は計り知れない。親の意向で魔法については聞かされておらず、とても危険な立場に置かれている。ネギと同じく影響力の強い親を持ち、その身内故に命を狙われている。たぶん大人になっても不自由な生活を送りそうなキャラNO-1。

趣味は料理、占いとかオカルト。お嬢様だけど家事が得意。京都弁はカワイイ。

ネギです。毎日、朝3時半から釣りをしてます。改定

皆さん、おはこんばんちわです。このたびはこの転生人生をお選
びありがとうございます。この作品には多量の原作ブレイク、超展
開、キャラ崩壊が含まれますのでお気をつけ下さい。お口に合いま
せんでしたら、プラウザバックをするのが宜しいかと、ではお楽し
み下さい。

えっ？ハンターの方ですか？・・・ネタ切れです。

[illegible]

イギリスはウェールズの森の中、静かな湖からこんにちはネギィスプリングフィールドです。いまボクは朝釣りの真つ最中です。なんでそんなことしているかって？ボク両親が蒸発したんです。ボクの面倒はアーニヤの親御さんのココロウア夫妻が見てくれて、でも作ってくれる料理には野菜が多いので、タンパク質が取りたいのと修行を兼ねています。

なんで修行するかって？ 実はボクが4歳になったら悪魔に村が襲われるみたいです。なんで知っているのかって？ ボクが転生者だからです。

修行しても無駄じゃないかって？ボクには昔から不思議な能力があつてその名も『先天的遡性性質』です。説明すると前世とか前世より前の記憶やら経験を得ることができる。いわゆる強くて？ニユゲームです。

ボクの前世には郭海皇というすごい武術家がいて、その人の業を再現できれば、何とかなると思います。あの人、153歳まで生きましたからね、その分経験値がすごいです。

「ネ〜〜ギ〜〜!!」

「あつ、アーニヤだ。」

朝から元気ですね、やっぱり子供は風の子ですね。ちょっと頭に寝癖がありますよ、ボクはこういうだらしないのがすごく気になるんですよ。

「おはよ!まったく、ネギは朝早すぎよ!家のおじいちゃんだつてまだ起きてないわ!」

「おはよう、アーニヤ。ほら、後ろを向いて髪を直すから。」
手櫛で直そうとするボクに櫛を渡してくるアーニヤ、ボクが直すこと前提で来ましたね?そうそう、アーニヤのおじいさんはクリスさんっていうんですよ。それにしてもませてますね、やっぱり女の子は成長が早いですね。

「それで今日は釣れたの?」

「ええ、6匹も釣れましたよ」

一時間程で釣れましたから、大量といっていいですね。

「そう、はい!朝ごはん!持ってきたから。」

「いつもありがとうございます。ローズさんには頭が上がらない・
・いつもと作り方が違いますね。もしかしてアーニヤが作ったのかな?」

「そうよ！悪い！」

「いえいえ、美味しいですよ。いやー、アーニヤをお嫁さんに貰う人は幸せだなあ（味が薄くて中のレタスとかがはみ出てます、でも4歳でここまで出来たら将来は有望そうですね。）」

不味いとはいませんが、美味しくはありません。でもアーニヤが此方の一挙一動を注視してくるので、ちょっと意地悪したくなりますね。

「あ、ありがと、私も食べようかな・・・ってもう無いじゃないの！」

「さあ、帰って二度寝に入ろうつと。」今日はクリスマスさんのところでも行こうかな？

「ちよつと！ネギ！全部食べること無いでしょ！」

「ああ、アーニヤも一緒に寝ます？」

「うえっ！ネ、ネギがどうしてもって言うなら寝てあげないこともないわ・・・。」

「そうですか・・・。」そんな、ネギⅡスプリングフィールド、3歳の秋のことでした。

「ち、ちよつと！待ちなさいよ！ネギ！置いてかないでよ！まともに入らないで！」

ネギです。毎日、朝3時半から釣りをしてます。改定（後書き）

うへへ、性懲りも無く書くものを増やす、駄目作者、シユマです。
今回は短めです、次回は、悪魔襲来を予定してます。

改定事項はネギの会話文に「」をつけたこと表現の訂正です。

クルミパンの味って
お日様みたいだっ
て、どんな味でしょうね
改定

陣九郎さん、マジカッコいい！あのエンディングはやっぱり雪之丞に乗り移ったんですね？私としては元の陣九郎の方がいいですけど。

どうでもいいことですが、レディス4のクリスマスツリーの達人のセンスは無いですが、この作品は、フィクションであり実際の団体、個人とは関係ありません。

この作品は基本的にネギ君の一人称でお送りしますですよ。

[illegible]

今日から悪魔襲来とかマホラとかのために魔法を習おうと思います。

「スタンお爺さん！」

まずは、スタン爺さんから教わるとしましょう。とりあえず共通の話題でスタン爺さんに話しかけますか。

「おお、ネギじゃないか、どうしたんだ？」

「ボクのお父さんって、どんな人だったんですか？」

「ナギのことか……アイツは昔からやんちゃだな。……」

++++

「まったく！あの悪がきときたら、うちのオレンジを盗みおったんじゃないけしからん！」

「へー、そうなんですか（よくいる悪ガキだったのか、でも魔法の才能はずば抜けていたと）。．．．そういえばスタンお爺さんって昔、何をしてたんですか？」

「というか数え年で10歳くらいには家出して、日本に辿り着くとか恐ろしい限りです。」

「ワシか？．．．何ていったらいいんじゃないやろうな、若い時は用心棒の真似事をしていて、その時はあさんとあつたんじゃないが．．．．．」

++++

「それでメガロメセンブリアでドラゴンの討伐の功績で賞金をもらって、それを結婚資金にしてここに家を建てたんじゃ！」

「わー、すごいです！ドラゴンはどうやって倒したんですか？」

「それはな、ワシのオリジナル魔法の土柱結界で動きを抑制して、石柱呪縛方陣を使って動けなくしたところを、風神石槍でドンじゃ！」

「すごいです！他にはどんな魔法が使えるんですか？」

「この人、かなりすごいんだな。タイマンでドラゴンを撃墜か、ホントに後衛の魔法使いだったのか？」

++++

「そんなに使えるんですか！・・・いーなー、今のボクに使えるの何か無いですかね？」

見事なまでに攻撃一色、補助魔法とか無いんですかね？

「うーん、何かあったかのう？そうじゃ、こんなのはどうかのう。」

┐

++++

「今日はありがとうね！スタンお爺さん！」

「はっはっは、なんのなんの、また教えてやろう、ネギは物覚えが速いから教えがいがあるわい。」

「うん！分かったよ！（うーん、まだまだボクの技量が足りないなあ。）」

教えてもらったのは魔法学校を卒業してから学ぶ高度なものばかりだった。

「ノーギルお爺さん！ボクの・・・以下略。」

「クリスお爺さん！ボクの・・・以下略。」

++++

・・・いろいろ、覚えましたが。これくらいあれば、何とかかなりそうです。えーっと、この魔方阵を刻んだ、石を村を中心にして、どれくらいがいいかな？

半径5キロメートルの円状に置いていこう、石の感覚は100mぐらいでいいか・・・あつ、石が全然足りないな。拾ってこよう。

「ネーギー！もう夕方なのに、何処にいくの？」

「おや、ご近所のコロウアさんちのアンナ・ユーリエウナ・コロウア、いつも元気で明るくて活発、そして今年から魔法学校に入学する。おしゃまな熱血バーニング少女じゃありませんか。」
凄い勢いで笑顔のアーニヤがやってきたのでつい説明口調に・・・。

「・・・なんでそんな、説明口調なの。というか私って熱血なの？」

「だって気合とか根性とかよく言うじゃないか。ボクは好きですよ？こう、レッド！みたいな、熱い雰囲気。」

絶対戦隊ヒーロー物ならレッドになる素質を持つてると思う

「そ、そう！（好き！？今、私のこと好きって言った！？）」

「それで、アーニヤは何しに来たんですか？」

「おーおー、顔を赤らめて初初しいことで、どうかこのまま大きくなってくれないかな？」

「ほら！これこれ、すごいでしょ！」

「ああ、杖じゃないですか。ということは遂に魔法が解禁か、おめでとうアーニヤ！」

「いい笑顔だ、でもボクももう杖持つてるんだよね。何故か家に落ちてたから、多分ボクの祖父辺りだと思うけどね。」

「うふ、うふふふ、ふふん！プラクテ・ビギナル・アールデスカット！（で、出来た！良かったあー、調子に乗って試したけど、まだ10回に1回くらいしか出来ないのよね。」

「わー！杖の先に火が出た！すごいぞ、アーニヤ！」

とりあえず、アーニヤの頭を撫でる。最近、なにか発見したり気づいたことがあったら、アーニヤを褒めることにしてる。

えーっと、昨日は杖貰ってなかったから、今日でつけたのか、あれ？ボクは4日くらい掛かったんだけどな、アーニヤって実はすごいのかな？

「えへへ、あとね。ママが今日は入学のお祝いをしてくれるらしいから、ネギも呼んできてだって！今日はなんと！七面鳥があるのよ。」

「なん・・・だと・・・！？」

七面鳥ですと・・・あのよく海外のパーティーに出る、あの鳥なのか！これはお呼ばれされなければなりません！いきますよ！アーニヤ！

「こらー！主役を置いてくんじゃなーい！」

++++

アーニヤが杖を貰ってそれなりの時間が経ちました。

アーニヤが魔法学校にいつて早1年、アーニヤがくつついてこない生活にも、もう慣れてスタンお爺さんから教わった、土柱結界（超劣化版ですけど）を何とか敷くことが出来ました。お爺さんは数

時間で出来るそうです（ボクは数ヶ月掛かりました。）

これで何処から攻めてこられても即座に気づくことが出来ます。気づくだけです、それで十分です。ボクは瞬動ができます（なぜならボクの前世の一人が郭海皇だから身体を動かすことに關しては超一流です）よって、かなりの速さで駆けつけることが出来ます。

えーとここで、ちょっとボクが使える魔法や特技を確認しますね
スタンお爺さんからは補助系魔法を教えてくださいました

土柱結界（未完成）、魔法の射手・土の一矢、風の一矢（物理系なので強力！）、魔法の罠・土縄捕縛（コレも物体があるから有効）、魔法の射手・戒めの風矢（直線的なので避けられそう）、風花・武装解除（撃つを裸になる夢の魔法！）、夢読み（寝てる人の記憶をみますよ）、風精召喚（分身の術）、吹け一陣の風（かなりの突風）、戦いの歌（身体強化ですね）、眠りの霧（睡眠薬・・・）、封魔の術（魔封波ですね）、風花風障壁、風楯シルドです。

僕自身はこんなことが出来ます。

消力（シャオリー、完全に脱力することでダンプに撥ねられても無傷です。）

攻めのシャオリー（シャオリーを攻撃に廻すことで、すごい攻撃力に。）

瞬動（よくある移動能力、足から気を出すことで一瞬で動くことが出来る。空中でもできますよ？）

こんなところですかね？じゃあ後は、悪魔襲来まで待つとしましょうか

ネカネ・スプリングフィールド、従姉妹で魔法学校に通っていて月に一度帰ってきます）が帰ってくる昼になろうかという時間帯、

少し遠目の山（村の様子が見える距離）に6人の魔法使いがやってきました。どうやら其処から動かないみたいです。行ってみますか。

．．．．．五人でした。どうやら一人大きな荷物と間違えたみたいですね。此方には気づいていません、どうやら完全な後衛の人みたいです。動きはテキパキしていますが、戦闘者ではないです。にしてもいい表情ですね、憎しみと怨念を含んだ顔してたり、無表情だったり、笑ってたりしてますね。

当身！×5、ふう、裸に剥いてやりましょう！．．．これは．．．ほほう．．．でかつ！．．．へー．．．なかなか．．．さて、魔法媒体とか魔道具やら奪ったところで庫のこの人達の記憶を読ませてもらいますか。

夢読み！

うーん、唯の傭兵か．．．こっちは？．．．お父さんに恨みがある人か．．．こっちも、恨まれてますねえお父さんは．．．この人はと．．．ん？殺すことが生きがいですか．．．おお、最後の人はメガロメセンブリアの工作員ですか。

なるほど目的は、ナギー派の掃討、人質の確保、ネギ少年の精神誘導その1か、エグイですね。ん、どうしましょうか？殺したら、後が面倒ですし、かといって相談する人も．．．．．この大きな魔力は！

「おゝゝい！ここで何か無かったか？（このガキは誰だ？）」

おおっほう！ナギー！スプリングフィールドですよ！

「ちょっとお父さん！助けて！」

「・・・ネギか？大きくなったな！（やべー、気づかなかったぜ。）」

「この怪しい人達どうしましょう？」

・・・汗を掻いてる、もしかして分からなかったのかな？なんだか、頼りないなあ。

「なに！もしかしてこいつらが・・・げふんげふん、じゃあこいつらは俺が持つてくから・・・紐かなんかないか？（・・・口元がアリカに似てるな。）」

「魔法の罫・土縄捕縛×5！こんなんでもうでしよう？あつ、強化しておきますね。ピピピッと、あとなんか皆に言っておくことはありますか？」

ボクが魔法を使つてすごく驚いている様子、スタン爺さんの話では全然魔法を覚えなかったらしいから、自分の子供の頃と比べてるのかな？

「・・・なんかいう事か？うゝん（魔法使ってるし！俺が使えない魔法、使ってるし！アリカ・・・俺たちの子は立派に育ってるぞ！性格はどっちにも似てないがな！）」

「あつ、去年はご近所のアーニヤが魔法学校に入学したし、来年はネカネ姉さんが卒業しますよ。ノーギルお爺さんの柿も今年になったし、スタンお爺さんも魔法論文で賞を貰いました！」

クリス爺さんも論文出せばいいのに・・・でも暮らしを助ける魔法が研究したいただけだからいいのかな？

「へえ、あの嬢ちゃんかな・・・ネギはもう入学してんのか？（しつかりしてるなあ。）」

「してませんよ？魔法は村のお爺さんやお婆さんに教わってます。学校は来年ですね。」

補助魔法を重点的に教えてもらってますね。でもやっぱりクリスマス爺さんの変てこな魔法が一番習うのが好きですね。あー、ネギ君じゃなかったら、クリスマス爺さんの魔法だけでよかったのに。

「未だなのか、あれ？学校？なにか・・・思い出せそうだが・・・（学校、金髪、ガキ、子供、ストーカー、幼女！）ああ！思い出した！やっちゃった・・・どうしようか・・・（俺は表に出れないし・・・仲間も簡単には動けない・・・かといってその辺の奴じゃ・・・そうだ！）なあ、ネギ頼みたいことがあるんだがいいか？」

「はい？何ですか。」

やっと思い出しましたか・・・そうボクが学校やら子供の話をしたのは全てエヴァンジェリンの呪いについて思い出してもらうためです。

「日本に行くようなことがあったら・・・この・・・どこいったかな・・・ん・・・おお、これこれ！コレを麻帆良学園にいるエヴァンジェリン？って奴にやってくれ。これの使い方は、この杖にこの呪文を書いた紙をつけて、相手の身体に杖で触れる、そして《彼のものの罪を赦さん今地獄から解放放たれよ》って唱えるんだ、じやあ俺はいくから、後この杖はやる！じゃーなー！ー！！！」

なにやら急いで帰っていましたが、これでエヴァ解放フラグです。すね。

それにしても呪いを解く方法が手に入るとは、まあいいか。これ

で彼女に対する手札が手に入ったということです。

もうこんな時間か、帰ろうっと。

クルミパンの味ってお日様みたいだって、どんな味でしょうね 改定（後書き

2話更新！次回予告！

魔法先生ネギま！ 魔法学校入学！

アーニヤの初恋！

馬鹿ネギ参上！の三本です。

改定しました。

今回は私のターンよ！ 改定

12月1日はモンハン3rdの発売日ですね。でも私のPSPはRAN機能が壊れていてソロプレイしか出来ないんです。だから新しい子を買うまでお預けですね・・・そういえばクツク先生がでないのか、寂しいですね。さて3rdのゆつくり実況プレイが早くupされるのを待ちながら、私はキーボード打ちますか。

[illegible]

メルディアナ魔法学校、講堂。構内はシンツとしている。聞こえるのはメルディアナの校長、ノーギルの挨拶が朗々と響いている。

「（校長ったら、話が長いのよねえ、ネギはつと。）」

アーニヤが見回すと新入生の座っている所、その最前列に座っていた。

「（・・・目をつぶって、もしかして寝てる？）」

ネギの頭がカクンっとなって、今起きたようだ。その姿に多くの女性がキュンッとなっていた。勿論、アーニヤも例に洩れず、ときめいていた。

「（うう・・・あの慌てて涎を拭う感じ、なぜかしら胸が熱くなるわ。）」

そしてまた校長の話が続くとまたネギの目がとろんつとしてきていた。

「（・・・なにか様子が変ね・・・なにかあったのかしら？）」

まだまだ、校長の話は続く、ネギのうとうとがアーニヤに移ったかのように、アーニヤも眠りについてしまった。

++++

アーニヤ2歳、今日は両親に連れられて村の祭りに参加した。この村には、子供が少なく、アーニヤと同年代の子はネギしかいなかった。

「スタンさん、どーもいつもお世話になってます。」

「おお、ココロウアさんじゃないか、おっ！そっちのお嬢さんは娘さんか？」

「ええ、アンナといいまして、ほらアーニヤ！ご挨拶なさい。」

「こんにちは！あーにやっていいます！」

「元気でいい子じゃな・・・おい、ネギもこっちに来なさい！」

村の顔役であるスタンが近くで本を読んでいた、小さな男の子に呼びかける。ネギと呼ばれた子はよたよたと覚束ない歩き方で此方にやってきた。

「何ですか？スタンお爺さん。（はあ、マジでネギ少年かあ）。
どうしようかな、原作に係わりたくないな。でも行かなきゃ駄目
なんだろうな・・・はあ。」

「やれやれ、この子はナギ達の子供でネギというんじゃ、ネギも
挨拶せい。」

「えーっと、ネギ＝スプリングフィールドです。どうも宜しくお
願います。（誰？）」

「宜しくね、ネギ君。いやー利発そうな子ですね。」

「そうじゃろ！ナギと違っていい子でな。ネギはアーニヤちゃん
と遊んでなさい。」

「わかったよ。」

ネギはスタンが座っている椅子の隣に本を置いて、近くに置いて
あった、食事が乗った皿を持ってアーニヤの元へ近づいていった。

「ボクはネギっていうんだ、確かアーニヤちゃんだったよね？（
うわー、かわいいなあ。）」

「ネギ？変な名前ね！アーニヤでいいわ！」

「ははは、よく言われるよ。アーニヤは元気だね。（テンション
高いな、でも子供らしくて・・・癒される）」

二人でいろいろなテーブルをわたって、食事を取りながら祭りの
様子を見て周っていった。

「それだね！その料理が臭いのよ。」

「へー、そうなんだ。・・・アーニヤ、後ろ向いて歩いたら危ないよ。（クリスって人、日本通だな。フナ寿司作るとは）」

「平気平気！まだ一回も転んだこと無いんだから、あ！」

後ろ向きで上を向いたアーニヤが木の根っこに足を取られて、バランスを崩してしまう。

「危ない！（フナ寿司か・・・この身体であの臭い受け付けられるかな？というか納豆すらあやしいな。）」

「キャ！」

倒れそうになったアーニヤを助けようとネギが自分に引き寄せるも支え切れず倒れてしまう。ネギの上にアーニヤが倒れこみ、ネギの肺から空気が洩れる。

「うぎー！」

「ちょっと、ネギ大丈夫！？」

「あいてて、大丈夫だよ。ふう、ほら上を見てよ。（痛かった・・・そんなにこっち見ないでくれよ。とりあえずイイ話だなーふうにしてみるか）」

「・・・一番星。」

そうだねつといった、ネギの笑顔は柔らかく、その目は何処までも澄んでいた。

+ + + + +

「ふあ（いけないいけない、ちよつと寝ていたわ。懐かしい夢を見たわね、ネギと初めて逢った夜かあ）」

アーニヤが夢の余韻に浸っているとどうやら校長の話も終わり、新入生代表のネギが挨拶をしているところだった。その柔らかな笑みを携え、軽快な調子で言葉を発するネギは輝いて見えた。

+ + + + +

入学式が終わって、二日ほど経ちようやく、ネギの荷解きが終わったようだ。ここメルディアナ魔法学校では、親元を離れ寮生活をするのが一般的で、学校自体が余り大きくなく生徒数も少ない、その代わりかなりの実力者の先生が教えている。

「ネギー！入るわよー。（昨日は荷解きを手伝った後、直ぐネギは勉強し始めたのよね。三日で学校の範囲を終わらせるっていつてたけど、魔法歴史学、魔法倫理学、錬金術、薬草学、基礎魔法学、数学に国語、社会に理科、家庭科とかもあるのに、たった三日で覚えきれのかしら？）」

部屋に入るとネギが机で突っ伏していた。机には各種教科書、紙束が散乱していた。どうやら勉強したまま寝てしまった。

「全くだらしないわねえ、ほらネギ！起きなさい！（寝顔も可愛

いじゃない・・・」

アーニヤは机で寝ていたネギを揺すり、その後床にまで落ちていた教科書やらノート、プリントを拾い、部屋を片付けていった。

「うにゅ・・・。」

「・・・（なにこの生物！可愛いつてモンじゃないわよ！卑怯だわ！）」

「あーにゃ？わーい！あーにゃだ。」

起きてアーニヤの存在を確認したネギはいきなり抱きついた。

「な、な、なあ！いきなり、何すんのよ！ちょっと離しなさい！」

「はーい！」

「（なんかネギが馬鹿っぽいわね）なんでそんなことになってんの？」

「なにが？」

「何がって・・・。」

アーニヤが幾ら質問してもちゃんとした答えが返ってこない、まるで年下の子供の相手をいている気がした。なんとか話を聞きだしたことをまとめると。

「つまりネギは三日間頭が良くなるけどその後一ヶ月悪くなる魔

法を使つたのね？」

「うん、そーだよ？ねえねえ、だっこして？」

「べ、別に構わないわよ。」

「わーい！あーにやだいすきー！」

「うう、鼻が、（入学式に居眠りしてたのは寝不足だったからなのね・・・でもあのネギがこんな事するなんて以外ね・・・あつネギの匂いが。」

その後一ヶ月、アーニヤの顔から笑みが消えることは無かった。

今回は私のターンよ！ 改定（後書き）

うーん、ラブコメ特有の甘酸っぱさが出せたかどうか・・・まあ、二度と萌えネギは無いと思います。

改定完了！いい話をぶち壊すネギの心のうちを追加

魔法先生は見た！学園長の企み

友達がモンハン3rdを買いました、そのプレイを横目で見たんですけど、すごくやりたくなりました。どうしようか、私のPSPは壊れてるんで新調しないと・・・でもそうしたらエルシャダイが買えないし、デイスガイア4もやりたい！くそー、困りました。というか、3rdG・・・ホントに出ないんでしょうか？

[illegible]

メルディアナ魔法学校、講堂にて。

「（現在、ボク、ネギ・スプリングフィールドは卒業式を迎えています。何故、こんなことを説明するのかというと、校長の話が長いんですよ。だから軽く今までのことを回想しておこうかなつと。）

静かな講堂では、校長ノーギルの話と父兄の泣き声やら、ネギに對しての行かないで、という声がヒソカに聞こえている。

「（ボクが馬鹿というか幼くなった後、いろいろありましたがまとめると。）」

「（いろんな先生やら大人の人に魔法について詳しく聞いたり、勉強については習熟済みなのですつ飛ばして、生活やら戦闘の補助に役立つ物を中心に覚えてきました。）」

「（ずっと前にお父さん 蒸発していたナギ・スプリングワールドから貰った、杖と札、実は物凄い物だったらしく、ドネット・マクネギさんと調べたところ、この杖は世界樹の枝から作られたものでかなりの魔力を保有していて魔法媒体としてはかなり優秀らしいです。札の方は、回復やら補助に長けているクリスさんに聞いたんですけど、かなり複雑な回路をしており、殆どの呪いを解くことが出来ると熱く語っていました。どうやら物凄い術者が作ったよううで、あのお父さんには作れないと満場一致で断言されました。」

講壇の隅からマクネギス女史が熱い目でネギを見つめている。彼女はあの馬鹿ネギ（ファンクラブの人には、萌えネギの目覚めといわれている。）騒動でいたくネギを気に入る、そのままファンクラブを結成、会長としてネギを視かん・・・見守っている。

「（次に淫獣ことオコジョ妖精、アルベール・カモミール君と出会ったんですが、彼は犯罪者なんですよ。なのでちゃんと罪を償ってから頑張ってもらおうと思って、身柄を引き渡しました。でも彼とは使い魔契約をしたので1日少んですけど、念話でお話することが出来ます。真動物？になって帰ってきてくれたら、アーニヤに頼んで下着を融通してあげようと思います。盗みはいけませんよね？）」

校長のノーギルが熱く、生徒の今後の展望について語っている時、アーニヤはネギの試験について考えていた。なぜなら、ネギはとくに飛び級をしまくってもう卒業している筈だからである。アーニヤはロンドンで占い師をすることで去年終わったが、ネギは日本で先生をする筈なのだが、先方の都合で延期されていた。そして今年準備が終わったよううで今日が卒業式という運びになったのだ。

「（タカミチ、高畑「Ｔ」タカミチとは拳で殴りあった友達で、最初はボクがフルボっこにしてたんだけど、段々と強くなって中々いい勝負できるようになった。やっぱり居合い拳に工夫とかしてあげたのが効いたのかな？）」

「（最後にアーニヤのことだけど、いやーすごいね。あの子はスポンジみたいに教えたら、すぐ吸収するから七年の教育課程を４年で終わらせて、広範囲梵焼殲滅魔法である燃える天空を不完全でも使えるんだから、魔力さえ増えれば今でも使いこなせるみたいです。彼女は火の属性に対して天性の才能があるみたいでオリジナルの魔法も多数持っています。魔法のコントロールもうピカイチですしね。）」

++++

はい！麻帆良学院です。えっ？卒業式ですか、あ後は校長室で卒業試験の説明をされて、そのまま此処に来ました。準備は２年前には終わってるので、本来の来日より前、学校が冬休みで休みの時に来ました。どうしてかって？教師をやるんですよ？授業の引継ぎをしないといけないので速めに来ようかと思ひましてね。

「ネギ！早く行くわよ！」

冬休みであるため、学生の乗車率が低い電車から降り、アーニヤがネギをせかす。

多分、ウェールズという田舎にいたから目に映るものが珍しいのだろう。初めて切符を買ったアーニヤがそれを失くさないように握りしめたり、改札でうまく券が入らず、ガシャンとなった時のアーニヤの慌てようときたら・・・癒される。

英雄の子供とかメガロメセンブリアの老害達とか完全なる世界とか、いつそのこと全てを捨てて日本でアーニヤと暮らしたい。そんなことを顔に出さずに応える。

「はいはい、分かりましたよ。」

そうそう、アーニヤですが、付いてきちゃいました。ま、いいんですけど、たぶんボクの代わりに原作ポジション（図書館島とか）に着くんじゃないかと、ボクですか？平和主義者なんです。

あつ！あそこにいるのはタカミチですね。ちょうどいいので、学園長のところに案内してもらいましょうか。

「・・・おや？ネギじゃないか、予定より来るのが早いね？」

「こんにちは、タカミチさん！」

「いつも、元気だね。アーニヤちゃんは。」

「タカミチ、学園長のところに連れて行ってよ。」

タカミチ・・・しばらく見ないうちに老けたな・・・。

++++

麻帆良学園都市、ここは世界でも有数の教育機関でありながら、その実態が外部に殆ど知られていない不思議な場所。此処は国家権力の力の及ばない、治外法権地である。

世界樹を中心とした都市設計、住民の多くが学生であり、各種学

校、研究機関が多数存在し、最先端の技術がそこら中に使われている。

図書館島を代表とする、情報の宝庫、コレを狙って忍び込む物も多い。本来、世界樹の調査・研究のために西洋魔法使いが所有した土地で、（勿論、世界樹の重要性は日本の術者も知っていたが）その後、麻帆良は西洋魔法がアジアに対する重要な拠点として、要塞化された。

その女子中等学校、学園長室。ここに最高の魔法使いと最狂の吸血鬼が会していた。

魔法使いの名は近衛このえ近右衛門このえもん裏でも有名な魔法の担い手でその独自の魔法概念と卓越した技術は他の追隨を許さない、世界でも五本の指に入るであろう魔法使いである。

吸血鬼の名はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル、600年の歳月を生きる歴戦の魔法使いであり、幼女。真祖の吸血鬼で元600万ドルの懸賞金を掛けられた極悪人であり、幼女。地方ではなまはげのように呼ばわりされており、幼女である。

「なんだジジイ、なんか用なのか。（もしかして吸血活動しているのがばれたか？それとも私のなみのりピカチュウが目的か？）」

「エヴァンジェリンには、少し頼まれことをしてもらおうと思つての。」

そういつて、窓の外を見る学園長。エヴァは不機嫌そうにソファに座っている。そこでドアがノックされる。

ガチャ

「学園長、お話したいことが……。」

おー、此処が学園長室か……。え、なにアーニヤ？……。あの化け物？あれはね、ぬらりひょんといって日本の固有の生き物なんだよ。

「高畑君かね、少し待ってくれるかの。エヴァに話しがあるんじゃない。」

あつちで、ソファアーにどっかりと座ってるのもしかして……。エヴァンジェリン？すごい可愛いな……。いてて、靴ふむの止めてよアーニヤ。

「ジジイ、詰まらん事なら帰るぞ。（なんだ？ポケモンの交換か？）」

「待て待て、そう急ぐではない……。のう、エヴァ。最近、なにやら忙しそうじゃないかの？」

「何のことだ？私は貴様の話を聞いてやるほど暇だぞ。（ぬ、ばれているのか……。私がモンハンに嵌って授業をサボタージユしてるのが……。）」

「ふむ……。二週間後、ネギ・スプリングフィールドが来る。」

学園長室が沈黙に包まれる。喉が詰まりそうな重い空気の中、学園長は続ける。

「エヴァには彼と手合わせしてもらいたい、どうじゃろうか？受

けてくれるかの。」

「……。」

「あのですね、学園長……」だまつとれ、今ワシはエヴァと話しておる。」……。」

完全にぼくらに気がついてないね。こんなシーン原作にあったかな？学園長とエヴァンジェリンの密談……あってもおかしくはないか。

「どういうつもりだ、試練だというのか。（ホントになにを考えているんだか）」

「然り、彼の先行きの為の糧になつてほしい。」

「……私にメリットが無いな、断らせて貰う。」

「受けてもらえれば、試練の内容はエヴァに任せよう、勿論邪魔はしないが、絶対に殺してはならぬ。」

「……潰れてもいいのか？まだ、ガキなんだろう。」

「それまでの器だった、それだけじゃろう。」

「いいだろう！受けてやる、口を出すなよ！勿論、魔法先生の横槍も無しだ！」

エヴァがニヤついた笑みを浮かべ、立ち上がり、学園長が後ろを振り返る。

「ほっほっほ、頼んじゃ・・・っほ？」

「あのですね、学園長。実はもう此処にネギはついていて、此処まで一緒に来たと伝えに来たんですが・・・。」

「宜しく願います。ネギ・スプリングフィールドです。なんだか良く分からないですけど、戦うみたいなんでお手柔らかにお願いしたいです。」

「うわー、お人形さんみたいです。絶対、ツンデレキャラですね。友達になれるかな？」

「ふん！貴様がナギの息子か・・・手加減はせんぞ（顔はナギに似ているが性格は全然違うな）」

「あのサインもらえますか」

伝説の真祖のサイン、希少性抜群ですね！・・・アーニャーそろそろ戻ってこーい

「な、なぜだ！（サインだと！？クソ！・・・初めてのサインか。練習しておけば良かった、うう緊張して手が震える。筆記体でいいかな？）」

「あ、此処にネギ君へって書いてください！」

「う、うむ。・・・こうか？（ふう、何とかなった、家に帰ったら練習しておこう。）」

学園長の目の前では、完全にネギのペースにはまり顔が上気しているエヴァと目を輝かせて喜んでいるネギ、その後ろで茫然自失し

ているアーニヤがいた。

「彼がネギ君なのかね？というか何処から聞いて・・・。」

「エヴァへの依頼なら最初から・・・。」

「な、なんてこつたい。」

学園長は頭を抱え、これからどうしようか考えていた。

魔法先生は見た！学園長の企み（後書き）

まさかのタイミングで来日、学園長は驚きますよね。次回も学園長室からお送りします。

改定したぞえ

先に生きると書いて先生、ボクは転生者だからセーフだね

ぬる p . . . いや、なんでもない。

いやー、遂にテストが終わって執筆再開ですよ！？そしてさらにやっとなのネギ像が定まってきました。なので改定改定・・・今回のテスト、高校生活で最悪の出来でした。初めて赤点をとるかもしれません。みなさんもしっかり備えましょうね。

ぬるぽ

[illegible]

ガッ

現在、ボクはエヴァンジェリンの機嫌を取りつつ、彼女の性格、性癖、頭の回転などを見ている。先に断っておこう、ビビッて
いるわけではないと

「マクダウェルさんってすごい肌が綺麗なんですね。」「髪もキラキラと輝いて、黄金のようですね。」「その目、まるで南国の海のように碧く透き通ってますね。」

「貴様、私をたばかっているのか！」

「そ、そうか！」

「ふふふ、ナギの息子が私を……。」

といった感じで段々と態度が軟化していった。最初のサインで混

「（（；。 ））ガクガクブルブル」

「アーニヤ、よしよし大丈夫だよ。怖い人はいなくなったからね・・・ボクは学園長と話があるから、タカミチと気分転換に遊びにいきなよ。」

まるで子猫のように怯えるアーニヤ、落ち着くまで抱きついていたいけど、先にこっちを済ませないかね。

「ネ、ネギ。僕は仕事があるから・・・。」

「タカミチ・・・久しぶりに遊ぼうか？」

「アーニヤ君、行こうか。」

「（（（；。 ））ガクガクブルブル」

++++

ボクは近距離が最も得意とする、魔法戦士タイプだ。学園長はどんなに優れていようと中距離で力を発揮する魔法使い、つまり彼が何かをする前に首を飛ばすことができる。

「学園長、無闇に動くとは死にますよ。」

魔力を乗せた衝撃波で学園長の顎鬚を刈る、勿論彼に当てず喉元で風を感じさせて霧散させる。

「むう、そんな怖い顔せんでも・・・。（いやはや、高畑先生からも聞いておったが・・・ここまでの使い手か・・・ノーギルがニヤニヤしていた筈よ。）」

そのあと、極めて平和的に会話し、交渉した。ボクって平和主義者だからね。

「ボクは学園内のアパートで一人暮らし、アーニヤは女子寮で寮生活。ボクは高畑先生の代わりにマホラ女子中学校で二年A組の臨時担任、担当教科は英語でA、B、C組を担当する。アーニヤはボクと一緒に生徒として2年A組に飛び級留学生として編入する。給料は一般職員の70パーセント、但し手当てを十分につける、夜の警備にはボクもアーニヤも参加しない、これで宜しいですね、学園長。」

学園長と向かい合ってこれまでの交渉で決まったことを確認する。

「ほっほっほ、いいじゃろう。問題は無い、それでネギ君に相談があるのじゃが……。」

「なんですか？」

「どうじゃろう？ワシの孫のこのかの婿に「それでは、失礼します。」つれないのう。」

ネギが出て行った学園長室、学園長は一人考える。

「（ネギ・スプリングフィールド・・・交渉中に一度も隙を見せなかったの、彼は自分という物をしっかりと持っており。MMの元老院らが何をしようとも揺るぎはせんじゃろう、となると彼の周りに注意すれば・・・恩も売れて此方に有益かの。）」

+++++

ファミレスで喋っていた二人と合流して、今タカミチがどのへんを教えるのとか、ボクが担当する生徒について話し合う。

「タカミチはこの神楽坂アスナって子のことをどう思ってるんだ？」

「アスナ君かい？そうだな、守るべき人、妹みたいなものかな。あつエヴァのことだけど、きっと授業サボると思うけど、彼女にも事情があるから、一度話しておいたほうがいいよ。」

「ナギ関連だろ？」

エヴァの問題については先にかけて本人から頼まれているので知っている。

「知ってるのかい？」

「まあね、アーニヤはさつきから生徒名簿を食い入るように見るけど、気になる子でもいるのか？」

「この子・・・ネギに似てるような、そうでないような・・・。」

アーニヤが見つめていたのは、チャオ・リンシェン超鈴音

「そうなのかい？（性格的には似てる部分もあるかな？二人共優秀だしね。）」

原作でネギ少年の子孫と自称していた女の子だな。・・・口調？ああ、ここはウェールズじゃないから、言葉づかいで注意してくれる人がいないからね。ローズさんはそこんとこ厳しかったから。

あと少ししたらボクも教師か・・・ほどほどに頑張ろうと

先に生きると書いて先生、ボクは転生者だからセーフだね（後書き）

私は今日も元気アマリスです。よつばと新刊が出ましたね・・・
とーちゃん×風香・・・どっちもいいキャラしてるんで構いません
が、あの作者さんでは明確にくつつくという表現をなさそうですね。

次回、魔法先生ネギま！主人公は動かない！

教師初日、カカルーの導き

今回の作者の弦きはお休みです。

[illegible]

学園長とエヴァに会ってから、数週間後、ボクは女子中等部の先生達に挨拶したり、タカミチから授業の引継ぎをしたり、ボクが臨時教師（表向きは教育実習生）としてマホラに来るのを反対していた新田先生を説得（何故か学園長ではなくボクが・・・）し、学園長等、魔法先生たちの取り成しもあり、なんとかしたりした。

ボクの歓迎会では、いろんな先生達（大学部の教授や高等部のバツ一古典教師、黒人数学教師、ダンディ世界史教師など）と話したり、彼らの人となりを観さそ．．．したり、酒に酔った人たちを見て楽しみました。

ちなみに休み中に来たせいで、かなりボクの噂が広まっているらしく街中で「もしかして・・・。」や「うちのクラスに来ないかな」などが聞こえてきます。

「ちよつと！ちよつとでいいから！」

「すみませんが、事務所を通してから来て下さい！」

++++

始業式がつつがなく終わり、ボクが教育実習生として2・Aを受け持つということが分かった時はすごいことになったらしいが、それは別の話し。

ボクは今、アーニヤと源しずな先生（ボクの指導教員兼副担任ですよ）と一緒に2・Aの教室にきています。そして僕らの視線の先には、教室の引き戸に挟まれた黒板消しに、隙間から見える連鎖トランプの紐がある。

「どうしようか？」

「どうなさるんですか、ネギ先生？」

そんな目で見られても引つかかりませんよ。しずな先生・・・いや、あらあらじゃなくて。

「引つかかってきたら皆喜ぶんじゃないの？」

んゝ、わかってて引つかかるのも嫌なんですよね。

よし決めた！

++++

くぶぶ、はっやつくこないかなー！あの子供先生がひっかかって

慌てるのがはやくみないんだよ！

あつ！自己紹介が遅れたけど、ボクは鳴滝風香だよ。^{ナルタキ・フウカ}あの黒板消しや他のトラップを仕掛けたのはボクと妹の史伽なのさ！^{フミカ}

仕掛けている途中でいいんちょ（雪広あやか、シヨタコン）に止められそうになったけど、アスナ（^{カケラザカ}神楽坂アスナ、オジコン）とカズミ（朝倉和美、パパラッチ）がなんとか説得して、いいんちょはくねくねしていた。

来た来た！廊下から話し声が聞こえてきたよ！早く開けろー「ダ
イナミックエントリーー！！」っへ？

「あつーー！！せつかくのトラップがー！」

「お、お姉ちゃん、大きい声で言うとはれちゃうよ・・・。」

し、しまった！子供先生がこっち見てるよ、手招きしてくる。お、起こられちゃうのかな！？

++++

決めた！作戦は特攻だ！

まず、ドアを開けて黒板けしが落ちきるまでに素早く中に侵入！

ドアに設置してある足を引っ掛ける紐をジャンプで飛び越え！

上から落ちてくるバケツをスライディングでかわす！

そして最後に後ろから飛んできた吸盤付きの矢を避け、教壇に飛び乗る。

「あっー！！せっかくのトラップがー！」

「お、お姉ちゃん、大きい声で言うとはれちゃうよ・・・。」

おっと、犯人らしき声が聞こえたぞ。下手人は鳴滝姉妹か・・・原作もこの二人だったかな？家に帰ったら、おさらいしとこうかな。

教壇から降りつつ、恐る恐るびくびくと小動物チックに近づいてきた二人を視界に収める。

「犯人は貴方達ですね？」

うなづく二人、その二人にそつとあるものを装着させる。

「うえ？」

風香には犬耳ダックスフンド

「あう？」

史伽には鼠耳シマリスを付けてあげました。

恐らくボクに起こられると思った二人は、突然の事に混乱している様子です。

「貴方達には授業中、コレをつけて貰います。次、何かやったら尻尾をつけますよ。いいですね。」

ボクが席に帰るように手を振るとすぐこと戻っていく二人、さあやっとホームルームです。まあ、一時間目は英語に変えて頂いたので時間は気にしなくても大丈夫ですが。

「皆さん、おはようございます。今日から皆さん、2・Aの担任を臨時で受け持つことになりました。ネギ・スプリングフィールド

です。若輩の身ですが、どうぞ宜しくお願いします。」

どうやら、さっきまでのやり取りを緊張感を持って見ていた為、反応が遅れているみたいです。

『可愛いーーーー！！！！！！』

うわっ！耳が、一気に皆が近づいてきました。ちなみに鳴滝姉妹や魔法生徒、超一味、エヴァとかの半分ぐらいの生徒はこちらをじっと観察してきます。

「皆さーん！静かにしてくださいね。ほら、席に戻って！・・・こほん、ええ実は留学生が来ています。じゃあ、アーニヤさんはいって来て下さい。」

教室のドアを開けてアーニヤが入ってくる、その顔はちよつと緊張していて・・・かわいい、しずね先生はトラップを片付けてくれている。ホントにすみません。

「あ、アンナ・ユーリエウナ・ココロウアです！アーニヤって呼んで下さい！よ、ヨロシクお願いします！」

癒されるう・・・さて、また騒がしくなってきたので静かにしないといけませんね。

教師初日、カカルーの導き（後書き）

アーニャをアンナに変更しました。誤字修正（＾p＾）オイシイです。

教師初日、カオスディメンション

作者はパワーを溜めている。

[illegible]

ホームルームでボクとアーニヤが適当に受け答えした後、チャイムが鳴り、そのまま一時間目に移った。

「それでは皆さん、お待ちかねの………実力テストです!!」

『いえーい！ツて、ええー！！！』

皆さん、良いリアクションしますね。先生は嬉しいです。

「制限時間は35分、配り終わったら始めてください……行き渡ったようなので、スタートです!」

くふふ、このテストは新田先生の監修の下で作られた一品、これで英語に關しての能力は駄々洩れですよ。まず初級者レベルが3割、中級者レベルが4割、上級者レベルが2割に残りが上級者レベルの英語標記の数学です。最後のはチャオさん用のお遊び要素みたいなモンです。

「分からないのがあったら、どんどん飛ばしてくださいね。最後の問題は、ホントに難しいですよー。」

ニコニコ、満面の笑みを浮かべて、皆がどれほど進んでいるか見て周る。バカレンジャーとポストバカレンジャーは難しい顔をして

問題に取り掛かっている。

しかし、エヴァはやらずに机に突っ伏しているので、発破を掛ける意味合いをこめて、爆弾を落とす。

「ちなみに20位から最下位の人には、バツゲームとしてさっきの耳をつけて貰います。」

瞬時に起きて答案に取り掛かるエヴァ、その目には焦りが浮かんでいるのが見える。流石に闇の福音と在ろうものがあれを装着するのはプライドが許さないらしい、他のメンバーも心なしかスピードが増したように見える。

でも折角だからエヴァには猫耳（黒猫）を是非装着してもらいたいなあ

++++

「そこまでー！はい、皆さんお疲れ様でした。チャイムまで休んでいいですよ。でも立って歩くぶんは構いませんが静かにお願いしますよ。」

一気にだらける人やテストについて話している人、こちらを睨む人や楽しそうに見てくる人など様々だ。

「「ネギセンサー。」」

「おや、風香さんに史伽さんですかどうしたんですか？」
ケモノ耳が似合ってとてもキュートです。

「いやね。この耳いつまでつけてたらいいいのかなって。」

「これはうつかりしてました。この授業が終わったなら教壇の中の紙袋に入れて置いて下さい。ああでも気に入ったのなら、差し上げますよ？かわいくて似合っていましたから。」

「（か、かわいいって！？）・・・遠慮しておきます。」

「（ほ、褒められちゃいました！）・・・やめて置きますう。」

「そうですか？残念ですね。」

ふむ、少し頬が紅潮してますね。さっきので嫌われてはいないようで安心しました。

++++

その後、他のクラスの授業や授業の準備予習、昼休みは会議に当てられ空き時間に昼食をとる。時々やってくる生徒達の相手をしてながら授業のプリントの案を考える。帰りのホームルームで掃除当番を確認し、教室の清掃を手伝う。

あつという間に放課後になってしまった。今日は初めてにしては良かったな、後は明日の準備かな？とかなり充実した一日を思い返しながら先のことを考えているとボクの元に2・Aの生徒がやってきた。

「おっ！ネギ先生みつけ！後で2・Aのクラスにおいでよ、ネギ先生の歓迎会するからさ！」

「ええ、分かりました。ちょっと待ってください、春日さん一緒に行きましょうか。」

一見、笑っているがこっちに対して一定の距離を置いて観察して

きている。桜咲さんやクーフェイさん、長瀬さん、龍宮さんはこちらを推し量ろうと少しだけ気配が洩れていたが、彼女らとは違いとてもそういう気配を隠すのが上手い、まあ力自体が弱いのもあるが、工員としては一定の実力を示すことができる様になる・・・のかな？

なにか忘れてる気がするけど・・・なんだったかな？

++++

美空と同じようにネギを探して歓迎会に誘う任務を受けた人物が校外を探していた。オレンジの髪を鈴の付いたヘアバンドでツイントールにした気の強そうな女の子が機嫌悪そうに歩いていた。

まったく、あのネギってガキどこなのよ！・・・高畑先生、ホントに担任じゃなくなっちゃった。確かに月に何回か出張してたし、最近は特に忙しそうだったけど・・・それでも会えなくなっちゃうのは・・・。

それもコレもネギってガキのせいね！私の恋路のお邪魔虫！あゝ、ホントにみつかないわね。他の皆は見つけたのかな？

・・・あそこで大量の本を持つてるのは本屋ちゃん？なんであんな階段の端っこを降りてるのかな？危ないじゃない、手伝わないと！

「本屋ちゃん！ちよつと待って！」

本屋ちゃんがこつちを振り向こうとして・・・。

「ふえ？」

バランスを崩した！

《神楽坂アスナ》は咄嗟に助けようと今まさに落ちていく《宮崎のどか》の腕を掴み、のどかを庇うように抱き、階段から落ちていった。

+ + + + +

アスナは身体に響く痛みと自分の名前を呼ぶ、悲壮な声で意識を覚醒させた。

「（あれ？私、どうしたんだろ・・・）っう？！」

「！？神楽坂さん！大丈夫ですか！？動かないで下さい、頭を打ってるかも知れませんか！」

先に目が覚めたのどかは、自分の下敷きになっているアスナを見て顔を青褪めさせて、必死に彼女の名前を呼んだ、混乱しているのにもかかわらず揺するなどの行動をしなかったのは日頃の読書の賜物だろう。

ネギは急いでいた。本当にさっきまで、のどかが階段から落ちるという、生命の危機をすっかり忘れていたからだ。

なんとか自身の能力を頼りに現場を特定して急行したもののネギの目に入ったのは、ひたすら謝り、アスナに大丈夫かと聞いているのどかとそれを気にしないで相手の心配をするアスナであった。

「（・・・セーフ！どうやら無事みたいです。念のために神楽坂さんの体調を見ると見せかけて治しておきましょうか）【シユブニ・グラ・シユマ・ゴラス 治癒^{クイラ}】」

ネギはアスナに近寄るを目を開けさせ、手を差し出し指が何本に見えるかとか体調についてそれっぽく聞きつつ、治癒を行った。

ネギ自身は事故の瞬間を見ていないが、周りの状況を見てある程度の推測を立てた。

「（散乱している本、神楽坂さんの下にもあるようですから、多分神楽坂さんが掴んだことによつて一瞬だけ落ちるのが遅れ先に落ちた本によつて衝撃を吸収されたのかな？でもこんなに軽傷なのは、神楽坂さんが単に頑丈だったからでしょうね。）」

正解だった。その後、歓迎会にて楽しい時間を過ごし、生徒からさん付けは堅ぐるしいと注意され直したが丁寧な言葉遣いだけはネギの趣味半分肉体からの癖のようなもので直さなかった。

+ + + + +

春日美空は部屋で今日のことを思い出していた。まず新しい先生と留学生のこと、二人共自分より魔力量が多く感じ才能があると感じたこと。

ネギは茶目っ気があり気が合いそうだと思い、アーニヤは真面目そうでからかったら楽しそうという印象を持った。

ネギの授業への姿勢は子供のものではなく、大人みたいにテキパ

キとしていたこと。そして彼の身体能力はかなり高いことに気がついた。アスナを治療する時の魔法の隠蔽の技術、殆ど分からなかったが、彼が触れていくうちにアスナの顔色が良くなっていたからきつと魔法を使ったことに気がつけた。

このことからネギの実力は高く、付き合いやすい性格をしているが英雄の息子なのは明白なので、なるべく自分が関係者とばれないように気をつけようと誓った。

「それにしてもアスナを見る本屋ちゃんの目は恋する乙女って感じだったな。」

明日から楽しみなことが増えてw k t kが止まらない美空だった。

教師初日、カオスディメンション（後書き）

なんとどのかのフラグを建てたのはアスナでした！ネギのどの人は残念、アスのどですよ。作者がネギま！で好きなのはチャオとか美空とかチャチャゼロです。いいたいことは分かりますね？多分この3人は優先的に出番が貰えます。

どうでもいいことですが、水嶋ヒロ著のKAGEROUのアマゾンでのレビューが面白すぎます。作者的にはヴェルターズオリジナルの下りが凄いツボでした。

的に三人、前回テスト中にいったのは冗談です。それでは一位から発表します。取りに来て下さい。」

ネギの発した3人という言葉に多くの人が安堵し、バカレンジャ―である五人、クーフエイ、長瀬、綾瀬、佐々木、神楽坂はもしかしてという希望が湧いてきた。

「チャオさん！凄いですね、満点ですよ。」

皆がやっぱりと思った。

「あはは、ナカナカ面白い問題だったヨ。ネギ先生。」

「次も楽しみにしてて下さいね、チャオさん、では2位の人です。」

ネギの発言を聞き、このバツゲーム付きのテストが今回限りではないことを悟った2・Aメンバーであった。

++++

テストの発表もいよいよ大詰め、途中普段は下の方にいた人物が浮上していたり、記号問題で大量得点を貰った人物も居た。

「さて残りは27位から31位ですね。では発表します、27位はユエさん！28位はアスナさん！29位はまき絵さん！30位はクーさん！31位が楓さんです。いやー、アスナさんは記号問題で得点を稼ぎましたね。まき絵さんと3点差ですよ。」

佐々木、クーフエイ、長瀬はテスト用紙と共にケモノ耳を渡された。

「えへへ、馬鹿でごめんね、ネギ先生。」

佐々木には白くてふわふわに垂れた耳のスタンダードプードルの耳。

「アイヤー、アスナに負けてしまったアルカー。」
クーフエイには黒くて丸っこいパンダ耳。

「日本語が出来れば十分でござるよ。」
長瀬には茶色くて先の丸まったタヌキ耳が渡され、その後も普通に授業が行われた。

・・・少しは恥ずかしがって貰わないと面白く有りませんねと思うネギだった。

++++

ホレ薬騒動？大浴場で巨乳比べ騒動？そんなのアパートで暮らしているボクにはかんけいありませんよ。そうそう、この前のテストでアーニヤは4位でした。流石にチャオさん、ハカセさん、アヤカさんを超えるのは難しかったようですね。

ボクが着任して8日ほど確かそろそろウルスラのドッジ部が喧嘩を売ってくるはずなんですが・・・なんで正確に分かるかって？ほらボクの存在感が薄い能力で前世を振り返りましたから、のどかさんみたいに忘れてると大変なことになるかもしれないですね。

「ネギせんせえ、ここが分かんないよ。」

「ああ、分かりました。今行きますよ、まき絵さん・・・これは

be 動詞 + 過去分詞なので受動態です。くされるという訳をするので、この場合は私は彼に驚かされたという訳になります。」

今ボクは補習の人と勉強会をしています。やっているところは女子寮のロビーに机を置かせてもらっています。あ、許可は貰ってますよ（学園長に。） 皆さん部活もありますし、夜道を歩かせるわけには行きませんかね。

「ネギ先生、ここがよく分からないでござるよ。」

「はいはい、楓さん……ってコレは数学じゃないですか！英語やってくださいよ。コレはですね、ここに補助線を入れると分かりやすいですよ。」

楓さんが持っていたのは数学の教科書、どうやら明日当てられるらしい、でもだからといって答えをそのままいつでも身に付かないのでヒントを与えている。

「ネギ……先生、ここが分からないのよ！悪い！」

「ちよつと待ってくださいね。これは……order + 人の動詞の原型なので、人にくするのを命じるとなります。あとは自分で考えて下さい。」

「た、高畑先生が私に……。」

おお悶えてる悶えてる、やっぱりこう反応がいい人ですよ。2
- Aの人は結構動じない人が多いんでからかいが無いんですよ。ちなみに愛すべきバカレンジャーの皆さんに補習の勉強に使うプリントは個々に興味をそそるような感じにしています。

例えば、アスナさんにはタカミチを使った文にしたり、ユエさん

には哲学的にしたり、クーさん、楓さんには過去の武術家の話にしています。まき絵さんにはボクについて書いています。なんでまき絵さんはこんなにボクに好意的なんでしょうか？

あとは皆さんに単語の宿題を出してつと・・・それと授業ではこんな宿題を出しています。自分の日記を英語で簡単にいいから最低2行書かせています。それで日記にコメントを返してあげるんですが・・・英語は三単位、週三回でも31人分ですから、かなり大変です。それにアヤカさんはすごい張り切るんで2〜3ページで書いてくるんで返すのが難しいですよ。

「それでは皆さん、今日もお疲れ様でした。また英語の授業があった日に集まりましょうね。」

『バイバイ！ネギ先生！』

それから補習ですが、英語の小テスト（前の授業にやったことを3〜4問くらい）毎回やってるんで、基本的にバカレンジャーだけが対象なのですが皆います。ええ、さすがにエヴァさんや長谷川さん、チャオさん、ハカセさんはいませんが、マナさんやさよさんまです。全員で28人（アーニヤを足している。）・・・多いですか？

案外真面目に勤めてます。（後書き）

次回は多分他視点です。誰にしようかな？選り取りみどりですかね。

カメラさん、どこ行くんですかー

サムソンの利益2011年度の予想決算<特許侵害による賠償金額

[illegible]

昼休み、ネギが職員室で授業の準備をしているとそこへ、佐々木まき絵と和泉亜子が飛び込んできた。

「うわあゝんせんせえゝゝ！！」

「ネギ先生~~~~っ！」

「どうしたんですか？」

「どうやらドッジイベントは今日みたいだ。でも高校生との揉め事はちょっと前からあったみたいですね。」

「こ、校内で暴力が……。」

「見てくださいこのキズっ！助けてネギ先生っ！」

どうやら擦り傷や肌が赤くなった程度なので、二人に保健室に行くよう指示し、校庭に向かうことにする。

++++

「それっ！女子高生アタック！」

「あっ！」

うっ、痛いよ。なんでこの人達はこんなに突っかかってくるんだろっ？

「ふふふ、わかった？あんた達中等部なんて私達高等部に比べたら、おこちゃまなのよお子ちゃま！」

・・・むむ、す、スタイルなら負けてないよ。多分・・・。

「Stop a quarrel right now! 《今すぐに喧嘩を止めなさい!》」

うわっ！びつくりした。ネギ先生だ、あんな大声出せたんだ・・・なんていったんだろ？ちよつと怖かったな。相手も驚いてる、特にネギ先生の迫力で三つあみの人は涙目だよ。

「その制服はウルスラの生徒ですね？このことはシャークテイー先生に連絡させてもらいます。」

ネギ先生の脅しが効いたのか、リーダーっぽい人が顔を青褪めさせて帰っていきました。というかネギ先生、制服だけでこの生徒か判別できるの？

「アキラさん、大丈夫ですか？お怪我はありませんか？」

「大丈夫だよ、ネギ先生。」

一連の騒動で立ちすくんでた、私の心配をしてきた。・・・さっきまで頼りないかと思って、ちょっと気まずいかも・・・。

「そうですか？具合が悪くなったらスグに保健室に行ってくださいね。それでは失礼します。」

「ああ、うん分かったよ。」

今度なにかあつたら相談しに行こうかな？

++++

職員室、もう昼休みが終わろうとしていた。受話器を片手に書類をみているネギ、その後ろから半透明な少女が覗き込んでいた。

「ええ、そうなんですよ。やっぱりこの辺でけりをつけた方がいいと思いますよ？・・・はい、ありがとうございます。それでは後ほど。」

ネギが良い笑顔で話しているのは横目で見ながら、半透明な少女、自縛霊である《相坂さよ》が数日前のことを思い出していた。

++++

それはいつもの様に放課後、教室でペン回しをしていた時のこと

だ。確かに最近の子供先生が赴任してきたりしてクラスに変化があったが結局は自分に何も影響をもたらさなかった。

半ば期待したのだが、その分落胆が大きかった。生前の記憶も無く、自分が何をしたいのか誰なのかが今もつとも知りたいことの一つであった。まあ、自分の名前はずいぶん前に知ることが出来たのだが。

『（・・・暇ですねー、誰か話し相手が居ればいいんですけど・・・たまに見えても逃げられたり、追いかけられたりしますからなんですしょう？）』

さよが教室でボーっとペンを縦横無尽に廻していると廊下から歩き音が聞こえてきた。軽い足取りで近づいてくる靴のカツカツという音がなぜか無性にさよを焦らせた。

『（はわわわ、だ、誰でしょうか？だ、大丈夫何も私は怒られるようなことはしてないし、第一誰にも見えません。）』

さよは自分で思ったことに軽くショックを受けた。そして遂に教室の戸が開いた。

入ってきたのは最近話題の子供先生、ネギ・スプリングフィールドであった。

「・・・あついた。」

それだけいうとネギが真っ直ぐさよの所にやってきた。

『（あれ？なんで目があってるんだろ。）』

「てい。」

ネギがさよの額に手をやってペチンという音がした。

『（なんで私にさわれ．．．あ、あ、私の記憶が甦ってくる。私は相坂小夜、肺を患ってて人生の殆どを病院で過ごして、最後には病室でひっそりと．．．最後に考えたことはナンだったかな、両親への感謝？違う．．．周りに対しての恨み？違うそんなんじゃない．．．私が欲しかったのは．．．。）』

「さあ、相坂さん。記憶が戻って混乱してるのも分かるんですけど、質問していいですか。」

『何ですか？（私が欲しかったのは何？）』

「なぜ成仏できないんですか？」

ネギの冷徹な目がさよを冷静にさせた。彼の優しさの欠片のない、その目が彼女の過去を思い出させた。昔、私の容態を見ていた医者、の冷たい目、話すことが少なかったけど、他の人、看護師たちの同情交じりの目に比べたら、ずっと良かった。

私が終わる前日、少しだけその医者と話すことができた。私が俯いて泣いていると医者が、悲しいかと聞いてきた。私は、もっと皆と話しがしたかった、友達が欲しかったと医者にいった。医者は、話しが長そうだから後でそっちに行くといって看護師に呼ばれていた。

『．．．ネギ先生、私の話し相手になってくれますか？』

「話しが長そうだから、仕事を手伝って下さい。」

ネギ先生が医者顔の顔に余りにもそっくりであの時、思わず笑ってしまった。

++++

前を見るとそこにネギ先生の顔がありました。いつもの人を安心させる笑顔、でも私はこの笑顔の裏に潜む悪い顔を知っています。だってあの後、何で記憶を元に戻したか聞いたら、死人に能力が効くか試ただけで成仏したら後が楽し、しなくてもたいして問題無いって切り捨てられましたよ。

「さよさん、次の体育の時間は面白くなりそうですよ。」

残酷で優しい嘔吐きな先生、私の欲しいものは貰いました。毎日、忙しそうな先生。深夜、遅くまで何かを研究している先生。朝、早くから不思議な運動をしている先生。貴方の欲しいものは一体何なんでしょうか？ネギ先生。

++++

屋上に行くと昼休みに揉めていたという高校生が居た。アスナとアヤ力が食って掛かっていった。私は隣にいる見習い魔法使いの美空を見ると目を逸らされた。

「（なんで目を逸らすのよ！）」

「（だって絶対面倒事じゃん！私、そついうのいらなから！）」

私から離れようとする美空の腕を掴み一言言う。

「（私にバレルってことはとくにネギにはばれてるのよ。）」

「（・・・マジ？）」

美空がコワレタ人形のようにギギギツと振り向いた。そして嘘だと言つて欲しい目をしてきたが、首を振る、だってネギだもん。天才中の天才と呼ばれてるのよ？私が校長に習つて必死に練習したのを見ただけで覚えちゃうのよ？やつてらんないわよ、まあ攻撃魔法はなぜか覚えなくて魔法の理論や構成をひたすらやってたけどね。

「（噂をすればネギと・・・誰？）」

「（し、シスターシャークティ！？）」

ネギと屋上にやってきた浅黒い肌のシスターを見て美空の頬が引きつった。どうやら知り合いらしく、彼女から隠れるように私の後ろへ周った。

しかしそんな抵抗も虚しく美空は発見されて連行されていった。しょうがないからそそくさと壁際に寄っていく《長谷川千雨》からどうなってるかを聞くことにした。

「（千雨、どうなってるのコレ？）」

「（こつちくんじゃねえよ!）」

千雨は手でシッシツと振るうが私が離れる様子を少しも見せない
ので諦めたようだ。私が2-Aで一番中がいいのは多分千雨だろう、
だって千雨が秘密にしているネットアイドルという秘密を知ってし
まったからだ。別に私は悪くない部屋の壁が薄いのが悪いのだ、大
体隣から、ちうですうキラツとか聞こえてくるのが問題なのだ。
あんなのが聞こえたらそりゃ見に行ってしまうだろう。にんげんだ
もの、しょうがないよね？

「（ちつ、なんだかネギ先生が仕組んでたらしくてよ。高校生が
こつちに来るみたいだから高校の方に連絡をとって、2-A丁度良
く屋上でやるらしい情報流して誘導、で高校と中学の交流・レクリ
エーションだってよ。）」

「（人数は同じ11人か・・・。）」

「（あーあ、ネギ先生露骨に勝ちにきたな。どうやったか知らな
いがクーフェイと長瀬、桜咲までがいやがる。）」

「（そんなに?）」

「（ああ、クーフェイは中国武術研究会の部長だし、長瀬は忍者
以外の何者でもない、桜咲に至っては常に帯刀してるんだぞ?恐ろ
しいまでに武闘派じゃねえか。）」

あ、チャイナダブルアタック?で一人ぶっ飛ばした。でもネギが
見に行ったから大丈夫よね?・・・ドッジ部（笑）とか言われてる
けど、身体強化した私でも出来ないわよ。本当に一般人なのかしら?

ホントに非常識な学校ね。でも悪くないわよ、毎日が刺激的だし、ネギもいる。・・・千雨諦めなさい、貴方もかなり非常識よ？中学生ハッカードって大概な存在よね。

カメラさん、どこ行くんですかー（後書き）

ちよっぴり垣間見えたネギのワルっぱさ、ネギは自己中心的な子です。でも自分を大事にしません、どうせ転生するので……。三点リーダーって文字数も稼げて素敵ですよね。

これってPCで打っても携帯で見れるから携帯小説に分類されるんでしょうか？いつかオリジナル小説が書けるようにここで腕を磨きます。

に学園長といえど国家権力には逆らえないでござろう。」

「義務教育ってなにあるかー？」

くーふえは後で教えたるから、今はだまつといてな？ 楓あまいで、ウチらのクラスにはネギ先生っていう明らかに不法就労者があるんやで？

「。。。。」

一気に現実味を帯びた問題に一同の顔が青褪めた。重い雰囲気振り切るように、沈黙を破ったのは綾瀬だった。

「。。。ここはやはり。。。あれを探すしかないかもです。。。。」

+++++

綾瀬が提案したのは、図書館島・深部に存在するという、読めば頭の良くなる「魔法の本」を探し出すというものであった。余りにも怪しい話だったが、もはや他に手段が想いつかない一同は藁をも掴む思いで食いついたのであった。

「水、冷た！」

「この裏手に私たち図書館探検部しか知らない秘密の裏口があるです。」

図書館島の裏側、湿地になっている遺跡部分を抜け、わりと大き

な門の前についた。

《2 - A 図書館島探検隊バカレンジャー》

「これが図書館島・・・初めて来たアル！」

「古、静かにするでござるよ。拙者たちは内密にいたんでござるう？」

「でも大丈夫かな、下の階は中学生部員立ち入り禁止で危険なトラップがあるらしいけど・・・。」

「私たちはそれでも止まっちゃいけないのよ。」

アスナがカッコよく言うところけど、理由は情けないことやで？あー、ウチも緊張してきたわ。

見るからに重厚なドアが物々しい音を立てて開いていった。その音にビクツとしてしまった。

「この図書館島は明治の中頃、学園創立と共に建設された 世界でも最大規模の巨大図書館です。」

「ここには二度の大戦中戦火を避けるべく世界各地から様々な貴重書が集められました。」

「蔵書の増加に伴い地下に向かって増改築が繰り返され 現在ではその全貌を知るものはいなくなってしまうと云われています。」

「しかし近頃の噂のマホラ七不思議に追加された、図書館島の謎の司書や図書館深部・楽園の噂、最深部に棲む龍の噂、今回の魔法書など情報が散乱し始めています。」

「限りなく怪しい話しや真実味の有るものまで、ここ数十年ほど

で何十倍にも膨れ上がっています。」

「昔、マホラには世界中から武術家が集まる大会がありました。そして規模が縮小される前年、ナギ・スプリングフィールドなる人物が優勝しています。」

「繋がる時代とスプリングフィールド、まるでネギ先生を試すかのように時期を合わせて流れた今回の噂 図書館島・・・ここに何かあるのでしょうか？」

図書館を進んでいる間、ゆえが語りだす、歴史に始まり、噂そしてネギ先生絡みの話。ゆえは何かを感じ取っているみたいだ。

「ゆえちゃん、何でそんなことまで知ってるの？（噂話が多いから朝倉みたい・・・）」

「ネギ先生です。ネギ先生の完成した精神構造に疑問に思ったからです。10歳、しかし数え年なので9歳です。世に天才、奇才かずあれど、それは頭が優れているだけです。いうなれば 超人、そうネギ先生は超人です・・・さてそろそろ見えてきましたよ。地下三階、私たちが中学生が入っているのは、ここまでです。」

天井から地下深くまで埋め尽くされた膨大な量の本は数えるのを一瞬で諦めてしまうほどである。

「うあ~~~~~ちょっと信じられない量ね。」

「ゲームのダンジョン見たいアルね。」

「あいあい、ミノタウルスとかが居そうでごさる。」

「そうやねー、普通だったら学校の図書室だけで十分やもん。」

「ふふふ、血が滾ってくるデス。」

全員がうるちよろする中、余りの光景に放心していたまき絵がなんとなく近場の本に手に取った。カチヨつと何かが作動する音と。

「あ、まき絵さん、貴重書狙いの盗掘者を避けるために罠が沢山仕掛けてありますので気をつけて下さい。」

遅すぎる綾瀬の警告をまき絵は聞いた。

++++

ユ工殿の話を聞いて考えさせられたでござる。確かにネギ先生があそこまでスムーズに授業を行っていたり、人に接する時の態度は子供とは思えないでござる。

まき絵殿の無用心な行動、ユ工殿の遅い警告、トラップの作動音、考え事をしていた拙者は一瞬反応が遅れてしまった。

不味いと思ったとき、後ろから風が吹いて矢が逸れ、本棚に刺さった。カッカツと最近聴き慣れた軽快な足音、コレはネギ先生でござる。先生が迫ってくる、ゆっくりとした足取りで近づいてくる。周りに混じるかのような特殊な気配、忍びである拙者が接近に気づかなかったことに冷や汗が出る。

「おや、皆さんこんな夜更けにどうしたんですか？・・・もう9時34分、とつくに寮の帰宅時間を過ぎていますよ。」

「ネギ君！怖かったよ〜！」

「まき絵さん、ちゃんと先生を付けて下さい。」

「ネギ先生・・・どうしてココにいるんですか。」

「それは此方が聞きたいんですが・・・丁度いいので手伝って下さい。」

どうやらネギ先生がここにいたのは、偶々だそうでござる。ネギ先生はいつもココでテストやプリントの資料を集めたり、過去のテストやプリント、生徒のノートまであるらしく、授業が終わって暇があつたらここで探してるみたいでござる。

その後、一時間ほど資料集めを手伝わされたでござる。この中で運動が苦手な人がいなくてよかったでござる。常に走り回って資料を探してるので、普段運動しているまき絵殿やココがホームグラウンドとっていいユエ殿とこのか殿もばてているでござる。

それにしても、拙者たちのためにこんなに頑張っているのに、拙者たちときたら・・・皆も申し訳ない顔をしているでござる。

「なるほど読むだけで頭が良くなる魔法の本ですか・・・持ってますよ。」

「ホント！？流石ネギ先生！」

「はい、コレですよ。」

そういつて皆に手渡されたのは教科書と参考書でござった。みんなのキラキラした目が一気に、ああやっぱりって目に変わったでござるう。

「それから、あとコレが寮を抜け出してきたバツのプリントです。期末までにやって置かないとケモノ耳＋尻尾＋ケモノビキニの刑ですから頑張つて下さい。」

ネギ先生が告げた無情な言葉に焦った我々、プリントに必死に取り組み放課後の補習もしっかり受けたでござる。テストの結果でござるか？とりあえず全員赤点が無かったのは初めてで殆どが60点ぐらい、英語は80点台と異様な点数が取れ、本当に自分達か疑ってしまったでござる。

・・・流石に3徹は限界で・・・ござ。

こうすると凄く感じるネギ先生（後書き）

毎年の異常気象に政治不安、これからの日本はどうなるのでしょうか？

でもそんなことより小説読もうぜ！

こうやって他視点で書くとネギが凄いことに、そして噂を流した学園長の思惑に乗らないネギ、凄く真実に近づくユエ、おばかなまき絵とクーフエイ、あと今後楓視点は無くなると思われます。なぜなら面倒だから、そして書いてて楽しかったこのかは出番増えるかな？

次回からエヴァ篇、目指せ全キャラ視点！

で焦る私の心を押し殺し待った。そして生徒の相談と称して、彼に問うことにした。

+ + + + +

小会議室。

「それでどうしたんですか？休み中に聞きたいことがあるだなんて。」

装飾の少ない、簡素な個室で私とネギ先生は向かい合っていた。人の良い笑顔を貼り付けて、その仮面の裏で私を観察している。こうして近くで見なければ分からなかった、最初から疑って掛からないと気にも出来なかった。

「率直に聞きます。貴方はお嬢様、近衛このか様の敵ですか。」

「・・・何が言いたいのか図りかねますね。」

ネギ先生の目は冷たく、先ほどから毛ほども変わらない表情が私の意図を正確に把握しているのがわかる。ならば正面から行こう、余計な小細工は無用だ。相手が格上であろうとこのちゃんのためなら・・・。

「答えて貰いましょう、貴方が敵で無い証拠を。」

「みよんなことを言う、斬ればわかと。」

ネギ先生の声色は、瞬時に首筋に当てた夕風を刃を恐れず変わら

ない。

「いいでしょう。ボクに勝てたらボクが知る限り、全てのことを話しましょう、その代わり。」

「その代わりに私が負けたとき、私を好きにして構いません。それで宜しいですか。」

「降りかかる火の粉は払わないといけないね。悪い子にはお仕置きだよ、【シュブニ・グラ シュマ・ゴラス 土柱結界・無限封鎖陣】」

ネギ先生が呟くと景観が変わる、白い空間がどこまでも続く世界に。先生は私から離れたところに立つており、歴然とした差を感じた。何度か西洋魔法使いと退治してきたが、先生と比べると素人も良い所、先生は無詠唱で指導キ―と呪文すら聞き取れないほどの速さで高度な術を展開したのだから。

「ここは元の場所の位相空間、だから幾ら暴れても大丈夫だし、この結界は認識障害が組み込まれてる隠蔽もしっかりしてるから邪魔も入らない、さあ教育してあげましょう。」

「行きます！」

身体と夕風に闘気を漲らせて、正面から切り込む！と見せかけて瞬動（足から気を放出することで一時的に加速する）で背後から斬りかかる。

「まずは指一本！」

視界が回転する、胴体に衝撃が走り、ぶっ飛ばされる。空中でなんとか体勢を立て直し、着地する。

痛い、太刀を持つ右中指が反り返り折れている。折れた指を無理やり直すとネギ先生を見る。さっきのは、知っている、合気だ。

「次は足を貰うぞ。」

私が攻めあぐねているとネギ先生が驚異的な速さで接近してきた。

「斬空旋！」

私の苦し紛れの牽制、見えないはずの飛ぶ斬撃が避けられる。

「百烈桜華斬！」

「【シュブニ・グラ シュマ・ゴラス 風塵の鎧】」

近づいてきた先生に自分の周りを円状に無数の斬撃を飛ばすも先生の周りの空気の層に阻まれる。

完全に隙の出来た私の腕を先生は掴み、私の右足の膝に足の裏を押し付け躊躇無く破壊する。そのまま、後ろに投げられそうになり、虚空瞬動で叩きつけられそうになるのを避けつつ、距離を取る。

もはや移動もままならない、私は賭けに出ることにした。気を極限まで高め、

夕風に気を溜めることで帯電させる。

「いいでしょう、受けて立ちましょう。最後にその心を折ります。」

先生の威圧感が増し、見る間に魔力が腕に集められてるのが確認できる。畏怖と同時に感謝した。今の私なら先ほどのように不意を突かれれば、敵わないだろうしかし先生は私の土俵で真っ向から打ち破るつもりなのだ。

先生が動き出す、先ほどより遅く滑らかな体重移動、全てを拳に全てをのせるかのようなようだ。先生が私の間合いに入る。

「神鳴流決戦奥義！真・雷光剣！！」

「羅刹拳」

私の全力の一撃が打ち破られた。視界を覆っていた紫電の閃きは先生の一撃で霧散し、衝撃波でぶっ飛ばされ、ひしゃげた腕を視界に納めると私の意識はそこで途切れた。

++++

「んあ……。」

私が起きた時、私は保健室で寝かされ、隣りに先生が夕日の光で赤く染まっていた。

「ああ、起きたみたいですね。はい、これ宿題です。春休み中に全部やること、いいですね。ボクに負けたんだから次のテスト期待していいですね？じゃあボクは夕飯の買い物があるので帰りますね。」

先生はそういうと大量のプリントを渡して足早に部屋から出て行った。プリントを捲ってみると全ての教科の1〜2年のまとめプリントでとても春休み中で終わる量ではなかった。

「・・・困ったな。」

プリントの表紙には『バカレンジャー + ポストバカレンジャー用』と書かれていました。

春休み中、必死にプリントに取り組む私がいました。

実は大してなネギ先生

中二成分注入！くっ左手が．．皆！画面から離れてみてくれっ！クソ！力がっ！勝手に！

[illegible]

ボクがネギ少年になって9年、ボクはいつものように瞑想に耽る。

ボク有能力【凡百の遺志】は偶然発現したものだ。前世を追体験し過去・前世の己の経験と記憶を得る、もしくは他人の前世の記憶を溯らせる。大して凄い能力ではない、ただボクの記憶と経験が次のボクに受け継がれるだけだ。

ボクは才能があるわけではない、今だつてネギ少年の才をフルに使うことが出来ない、ただの凡人でしかない。

ぼくたちの人生は天才との戦いだつた。武道でも、学問でも、政治でもだ。僕たちは敗れてきた、ただ一つも勝利は無い。なぜなら僕たちに負けたものは真の天才ではないからだ。そしてボクはまだ出会えていない真の天才に……自分の届かない領域の存在に出会えていない。

ボク有能力【凡百の遺志】が発現したのは必然だ。ボクより前のボクが望んだこと・・・僕達の執念の賜物だからだ。これは天才を打ち破る為の呪い、だから探さなければならない、真の天才を。

あるときのボクは中国で生まれた。鋼の身体を持ち、幾多の戦争を駆け抜けていった。自らの持つ剛の力では、真なる理合いに勝つことが出来なかった。齢100を越えて理を手に入れた。そして真なる剛に出会い敗れ、たかだか20ほどの子供が自らの持つ技術に追いつき越した。ボクはあらゆる武を蒐集し、完全なる武への道半ば死に臥した。

そのときのボクにも肉親、家庭、守るべきものがあつた。だがボクは力の信望者で全てを切り捨てて力を欲した。力は偽者だった、理を得るため力を捨てた。日に日に力を失って往くのを感じ涙した。

真なる剛は暴力の申し子だった。遠い昔、自分が切り捨てた肉体よりも強靱な肉体を持ち、自分が悠久の時を経て得た理も持ち合わせていた。羨望と憎しみが渦巻き、それすらも真なる剛には無力だった。

何時のボクも破れてきた、そして勝つ日を夢見てきた。弱者が勝つ日を。

ボクにとって武術や魔法、知識は勝つための技術・道具でしかない、一生を費やしたものといっても拘ることはない。

死は恐ろしくない、それよりもこの怨念が無くなってしまうほうが恐ろしい。

「ボクは」「私は」「俺は」「ワシは」「あたしは」「己は」「我は」

この身は非才のものなれど、ぼくたちは諦めない、幾多の己の屍を踏み締めて。

『勝つまで諦めない。』

+++++

アヤカさんちに家庭訪問とか散歩部に案内されるイベントをカット、大して変わらなかったからね。このかさんのお見合いは彼女を連れて行って学園長に直談判したけど、まあ別に気にすることはない。

「これでどうですか？」

「45点、何が言いたいか全然分かんないから。」

『それでネギ先生は何がしたいんですか？』

アーニヤとさよにボクの秘密、転生者であることをばらした。なんでかって？さよとアーニヤが実は裏で繋がってたんだよ。まったく、さよ アーニヤから学園長からの手紙はバレルは、噂を煽ってバカレンジャーの危機感を煽ろうとしてたり、ボクの寝顔まで撮られてたなんて・・・どうでもいいか。

「うーん、多分宿敵とはその内遭えると思うから、それまでゲームとか仕事とか魔法の研究かな？」

「まさかこんなに年上とはね・・・ネギって結婚したりしてたの？」

「ボクはまだしてないけど、前世だとしてたねえ。」

これは嫉妬かな？かわいいけど、どうしよかな？ネギ少年の近くにいるだけで結構危険なんだよね。ん〜、面倒だな。なんとかする気がするからいいか？

『【凡百の遺志】ですか？なんか微妙ですね。幻想殺しとかのほうが悪くないですか？』

「これはこれで便利なんですよ？いつでも思い出せるから一回読むだけで十分だからね。」

わかったないな〜、幻想殺しは天才側の能力じゃないか。ボクの積み重ねがものをいうのが、凡人っぽくっていいんじゃないか？

「・・・執念とか言ってた割りに、結構どうでもよさげじゃない？」

「いやいや、最重要事項ですよ？でもなんかボクの転生人生がほぼ無限っぽいから後回しでもいいかな？って思ってるだけだよ。」

『結局どうでもいいじゃないですか』

++++

『うねー……ん！！A組み……！！ネギ先生！！』

「はい、皆さん今年もヨロシクお願いしますね。それでは出欠を取ります。」

原作どおりまき絵さんがいませんね。4月に外で寝てるとか、風邪を引かないといいですね。

「このあとは、身体測定がありますので急いで着替えて下さいね。では終わります。」

ネギが教室を出て職員室に向かおうとすると前方から保険委員である《和泉亜子》が慌ててやってきた。どうやらまき絵が見つかったようだ。

「せんせえー！ー！大変や！まき絵がー！ー！！」

「亜子さん、廊下を走ってはいけませんよ。」

『まき絵がどー！ー！したって！！！』

「皆さんはしたくないですよ。ほら、まき絵さんのことはボクに任せて教室に戻ってください。」

うーん、みんないい身体してるなあ、楓さんとか日本人のスタイルじゃないな。うん。

++++

保健室のベットで気持ち良さそうに寝ているまき絵を見て、やっぱりバカは風ひかないのかな？と失礼なことを思ったりした。

首筋から微かに感覚が鋭いものに分かる程度の僅かな魔力の残照がある。どうやら原作剥離はしていないようだ。

「それですな先生、まき絵さんの容態はどうなんですか？」

「それが特に外傷もないので、本当に外で寝てしまったのかも知

れませんね。桜通りで見つかったそうですよ。」

「そうなんですか、ありがとうございます。」

しずな先生のボクを見る目が妖しい……。この人もシヨタコンなのか？ 歓迎会のときも彼氏（タカミチは狙ってるようだ）。はいないようだったし、気をつけたほうがいいな。こっちに巻き込んだら見捨てるしかないからね。

さてエヴァンジェリンは真なる暴力の持ち主が、ただの獲物か

実は大してなネギ先生（後書き）

前世未確認＋前世確認済み（内郭海皇160年）＋主人公が何回か転生してるのでその分の経験値＋ネギの才能（－主人公が扱えない才能）＝今のネギ

なので大体ネギは戦闘力1000くらいで頭打ちですかね？まあ、強者に対抗するための武術だからラディッツくらいが丁度いいです。
ヤッテヤルデス

噂の吸血鬼は金髪幼女

最近は他の人の小説を読んで色々が無理ゲーな最初から地味に詰んでる話しが書きたくなつたんですが、見たい人がいれば考えてみたいと思います。例えば、恋姫無双で主人公献帝とか。

今回はアスナのどか??？視点です。ばればれですけどね。

[illegible]

マホラ学園、桜通り、満月の光の下、夜桜が幻想的な情景を作り出していた。神楽坂アスナ、近衛このか、綾瀬ユエ、早乙女ハルナ、宮崎のどかが桜通りの近くの道を歩いていた。

「吸血鬼なんてホントに出るのかなー？」

「あんなのデマに決まってるです。まだ春休みに流れた噂のネギ先生が何処かの王子様だったって奴のほう信じられます。」

「だよねー。」

話しは吸血鬼からネギ先生へ変わり、そして買い物をするものとそのまま帰るものとへ別れることになった。

「じゃあ先に帰っててね、のどかー。」

「はい！」

集団からのどかだけが離れたいっただけ、アスナの脳裏に身体検査をしていた時のことが甦った。

『もー、吸血鬼の噂なんてでたらめに決まってるでしょ。そんなことよりも早く並びなさいよ。』

『ズバリ！吸血鬼の正体はチュパカブラや！』

『そんなのが日本にいるわけ無いでしょ！大方、どこぞの変態でしょ。』

『その通りだな神楽坂アスナ、噂の吸血鬼はお前のような若くてイキのいい元気な女を好んでいるらしい十分気をつけることだ・・・』

いつも授業をサボったり、行事も殆ど参加しないマクダウエルさんがわざわざ警告してきたのだ。でも今までの被害者はまき絵を除いて大人しい女性を狙ったものだ。マクダウエルさんの言い様はまるで私を吸血鬼の噂から離れさせようという意図を感じる。

「このか！私、本屋ちゃんと一緒に帰るから！」

「あ、アスナー！」

思えば、ユエちゃんが図書館島で言っていたこと、ネギ先生が事件の基点になっているのでは？という話だ。まき絵はうちのクラスだった。本屋ちゃんは今までの被害者と性格が似ている。嫌な予感がする。

++++

ユエ、ハルナ、このかさんそしてアスナさんと別れた私は一人で
暗い夜道を歩いています。はあ、アスナさんと今日もあまり話せま
せんでした。話そうと思うんですけど、彼女の前に立っただけで上
がってしまったて上手く喋れないんですね。・・・あ、桜の花びら
が・・・。

「あ、ということは桜通り・・・。」

うつ、朝吸血鬼が出るらしい噂を聞いてから通らないでおこうと
思ってたのに。か、風が強いですね。急いでいきましょう。歌えば
気が紛れるかな？

「こ、こわくない・・・　こわくないです・・・絶対にこわくなん
かないかも・・・」

《ざわっ》、桜の木々が揺れる。普段は美しい桜が今日にかぎつ
て不気味に空恐ろしく感じる。《ザザザアっ》、大きくうねる音が
生き物ようにのどかの心を圧迫する。

私が桜のざわめきに驚き周りを見回していると街灯の上に黒い影
を見つけた。

「ひっ。」

「27番宮崎のどかか・・・悪いが少しだけその血を分けてもら
うよ。」

影は顔を歪めるとコウモリのようにマントがはためき、のどかに襲い掛かる。

「ちよつとあんた！何してんのよ！」

「神楽坂アスナ？」

++++

いい月だ・・・満月なら私も少しは戦える。ふふふ、今日の獲物は誰かな？

あれは同じクラスの宮崎か？まあいい、またぼーやに残す証拠になるからな！アハハハ！完璧だ！

「27番宮崎のどかか・・・悪いが少しだけその血を分けてもらうよ。」

ククク、怯えているのか？楽しいな、コレこそ私だ！コレこそダイクエヴァンジェルだ！あんな生温い地獄のような場所ではいつか狂ってしまうかも知れないからな。そのために宮崎、血を貰うぞ。何少しばかりチクツとするだけだからな。

「ちよつとあんた！何してんのよ！」

「神楽坂アスナ？」

なぜコイツが来るんだ？ぼーやなら分かるが、というか貴様は昼間脅しただろうがバカかこいつは？まあ・・・こいつの血も美味そ

うだからいいか。

「そんなテレフォンな飛び蹴りなんぞ【氷楯】」

私の氷の楯があの手を弾きかえ・・・《バギギキン》なにいい！？あぶない！」

「大丈夫！本屋ちゃん！まったくあんたあ・・・！」

なんなんだ？私の魔法の楯が破られたというのか・・・しかしさっきの魔力反応はなんだ、直接触れていないのに破壊されたのか？

「マクダウエルさん！さっきのは一体！？って変態はマクダウエルさんだったの！？」

「誰が変態だ！私は吸血鬼だ！ふんっ貴様の血も頂くぞ《魔法の射手・氷の十矢》。」

「本屋ちゃん！」

神楽坂の後ろの宮崎に当たるように調節し、打つ当たっても小石くらいなので痛いので済むだろう、アイツのバカ力は知っているからな。

《パシュ》魔法の射手はアスナに当たる前に溶けるように消えていった。

「あれ？痛くない・・・。」

「貴様はレアスキルを保有しているのか」

間の抜けた声を出しおって・・・しかしあのレアスキル、もしかして魔法を無効化しているのか？だが魔法物質まで分解するとなるとかなり強力だな。ぼーやが来たときのため、伏せていた茶々丸だが丁度いいな。神楽坂を捕獲してもらおうか。

「茶々丸、神楽坂を押さえろ。」

「分かりました、マスター。」

「絡繰さん！？くっ、離して！」

いきなり後ろから羽交い絞めにされて驚いているな。私は神楽坂に近づき、奴の首筋を出し噛み付こうとする。神楽坂も抵抗しようとするが、関節を極められているので無理に動くことが出来ない。

「さて頂こうか・・・ふう、まだ招待状は出していないぞ？ぼーや。」

「こんばんは、マクダウェルさん。いい月ですね、さぞかし血が騒ぐでしょう？どうします、私は構いませんよ。」

「ネ、ネギ先生！」

さっきまで目を瞑って僅かに震えていた神楽坂が少しだけ戦意を取り戻してまたもがき始める。茶々丸が私に判断を仰ぐように見つめてくる。

「帰るぞ、茶々丸。」

「宜しいので?」

「まだやるのは早い、焦ってもいいことはあるまい、じゃあなばーや。」

「はい、さようなら。」

ふん、精々首を洗って待っておくことだな。次の停電の日が待ち遠しいよ。

噂の吸血鬼は金髪少女（後書き）

ちなみにですが、のどかは襲われた時点で気を失ってます。ギリギリ、アスナに助けられた記憶がありますがね。

つまりのどかフラグは立ってますよ、アスナは。

それとアヤカの話と散歩部の話はうちのネギだと上手く話しが作れないんでその内気が向いたら加えますね。

次はアスナを説得して、対エヴァ用の作戦の複線を入れておきます。（話の展開を）誰か看破する人がいると思います。

「600歳!?!?!あんななのに?」

「ええ、ボクと同じくらいに見えますよね。」

正直、年のほうがびつくりしたわ。600年前ってことは室町くらい?!!普通に話されたけど、そんなにあっさりいいの?

「そんなに意外そうに見ないでくださいよ。アスナさんは魔法を無効化するんで記憶を操作できませんし、説明しないと納得しませんでしょ?他に何か質問はありますか。」

「記憶の操作って...それは後で言いとして魔法の無効化ってなんなのよ?」

「読んで字の如く魔法を無効化するんですよ。僕たち魔法使いの力をね。」

魔法使いについて聞くと私が思っていたものとはかなりズレがあるみたい。まず魔法は秘匿されるべきもので洩らしたものはオコジヨにされるらしく、そして知ってしまった人物は記憶を消されるか口止めされること。魔法を使って犯罪を犯すものがいて、それを処理するために表向きはNGO団体に所属している人がいること。

魔法は万能ではないこと、魔法には法則がありかなりややこしいこと。魔法には才能の個人差が大きく、また大体の魔法使いが凡人の域を出ず、稀に恐ろしいほどの才能の持ち主が生まれること。

「ネギはどれくらい使えるのよ?」

「イージス艦ぐらいなら何とか落とせると思います。」

私がまっさかと笑い飛ばそうとしたが表情がマジだった。魔法使ってそんなに強い存在だとは思わなかった。大体、ドラクエの魔法使いのメラ程度かと思ったら、ゾーマ様クラスだった。

「えっと、マクダウェルさんはどれくらい？」

「ボクがぶちスライムだとしたら彼女は闇の衣付きのゾーマ様ですな。」

「それって最強ってことじゃない、なんでこんな所にいるのよ。」

「それはここが世界でも有数の魔法使いの拠点だからですよ。そろそろ着きますね、ではここでさよならです。また明日会いましょう。」

「ああ、うん。それにしても本屋ちゃん起きないわね。」

「クフフ、そうですね。」

なんかスッゴイ怪しい笑みを浮かべて去っていった。絶対なんかしたわね。アイツの方がマクダウェル・・・エヴァちゃんより恐ろしく思えるわね。優しくしろか・・・エヴァちゃんの嫌そうな顔が目に見えちゃうわね。

++++

ネギ・スプリングフィールド、大戦の英雄ナギ・スプリングフィールドの息子で魔法学校を飛び級を重ねて主席卒業した天才、そして今年私たち2-Aの担任教師になり、特に問題を起こすことなく真面目に勤め非常に優秀な教師である。

チャオと比べても遜色ないほどの人物です。そんな彼と対峙した夜、いままで未知であったものを知りました。マスターはそれを恐怖であるといいました。恐怖は極めて原始的な感情であり、非常に強烈な感性らしいです。どんなに優れた存在でも命を脅かされた時に絶対感じるらしいです。

私の場合は、彼の接近をマスターに伝え、彼と目が会った時、一時的に原因不明の思考機能停止が起き、それを見たマスターが彼の戦力を見ずに撤退しました。

なぜ私がこんなことを考えてるのかというと・・・。

「ケケケ、オマエ馬鹿ダロ。」

「動けないくせに生意気だねゼロは。」

「動ケタラ今スグ微塵ニシテヤルゼ、ケケ。」

マスターの看病を頼んだはずのネギ先生が姉さんと遊んでいるからです。二人がPSPというもので和気藹々としているのも、姉さんがネギ先生の膝に乗ってるのも構いませんがマスターがどうしてるのか聞かなければなりません。

「ランゴスタハ絶対ニ許サナイゼ。」

「マヒの間に乙っちゃったね。」

「ネギ先生、マスターはどうしたんですか。」

「エヴァならソファで寝ながら黄金魚釣ってるよ。あ、それと風邪治ったばいから。」

それは私が薬を買いにいく前にいつて欲しかったんですが……。

++++

今日は日曜日、マクダウエルさんと向かい合ったのが先週の火曜日、どうやらアスナさんがマクダウエルさんに親しくしてくれて相手も戸惑っているみたいです。襲った相手から近づくなんて、ぷぷっ！あの時のマクダウエルさんの顔は見ものでしたよ。

「意味はないですけど効果はあったみたいです。」

アスナさんは2 - Aの中心人物ですから自然とクラスの面々に弄られてストレスが溜まっています。しかも昨日はマクダウエルさんのオタクにパパラッチやら早乙女さんやら多くの2 - Aメンバーが訪れたようでかなり疲れてしまったようで風邪を引いたらしいです。なんで知ってるかって？今、彼女の枕元にいるからですよ。

「………信仰、北、董色、冥王星……さて起こしますか。」

寝苦しそうにうなされてるマクダウエルさんを優しく揺り起こす。

「うっ、ネギだけは入れないでくれ……。」

「起きろ、マクダウエル」

「ぐへっ、何だ！なにが起こった！」

まったくネギの何処が駄目なんでしょうか。それよりも聞きたいことがあるんです。

「で何時やるのか、決まりましたかマクダウエルさん。」

「なんだボーヤか……クシュ！そうだな二日後に学園のメンテで停電になるから……クシュ！その時だな……クシュ、クシュ。」

「【大天使の息吹】」

「おお、長年の苦しみから解放されたぞ！」

くしゃみがウザイので治してしまいましたが、気にしないでいいでしょう。さて、マクダウエルさんの招待状の内容は、学園のメンテの時間20時〜24時、学園と外界を結ぶ橋で待つとのことでした。

「風邪も花粉症も昨日の疲れ、肩こり冷え性その他諸々全てが解消されてしまった……やっぱり治癒系の魔法も研究しておくべきだったな。」

「ではボクはこの辺で。」

ボクの目的も達したので帰ろうとした所、マクダウェルさんに服の袖を？まれる。機嫌の良さそうな彼女はとうやら暇らしい。

黄金魚釣りは運ゲーそう信じてやまない自分がいます（後書き）

うん、なんか駄目でした。何度も書き直してコレです。つ、次は大丈夫ですよ・・・多分。

次回、幼女捕獲です。

チャイルドプレイ

そうそう、原作でこのかが手すりを上るシーンがありますがあれはこのかの履いてるのがエア・トレックシューズだかららしいです。見つけて見たらいいですよ？ちなみに7話の登校の時です。

[illegible]

マホラの学校内、外部と隔絶されたコンピューターがあるところに二人の少女がいた。暗闇の中でPCに向かう機械的なフォームをみせている少女と隣りで暇そうにしている小柄な少女。

「どーだ？」

《チキツチキチキ、キュインカタカタ》

「想定通りです。サウザンドマスターのかけた【登校地獄】の他にマスターの魔力を封じている結界があります。この結界は学園全体に張られており、大気中にある魔力を消費しています。主にマスターと世界樹の魔力で賄われています。他には認識誘導の暗示も含まれています。」

「ちっ！十年以上気づかなかったとはな．．．大体魔法使いが電氣を使うなんぞ．．．いや茶々丸も魔法と科学の結晶だったか。茶々丸を創ったチャオには呆れるよ、しかしアイツがいなければこうして気づくこともなかっただろうな。」

「・・・マスター、本当に先生と戦うのですか？」

「ああ、じじいからの依頼もあるしな。それに私もボーヤに興味がある。正面から来るにしろ搦め手で来るにしろ楽しめそうだ。何をしてくれるんだろうな、トラップに誘い込んで私を無力化するか？茶々丸がいるから無意味だな。」

「（ネギ先生が来た日、マスターは楽しそうでした。ですが姉さんまで楽しそうにしていたことが気がかりです。）マスター、先日から姉さんの姿が見えないんですが・・・。」

「チャチャゼロなら別荘で戦いの準備をしているぞ。」

「姉さんも出るんですか？」

「ただの子供じゃないからな、今夜が楽しみだよ。」

++++

学園内のアパート、208号室、ネギの住んでいる部屋。学園のメンテで夜、停電が起きるので寮から出ないよう厳重注意をした後、ネギとアーニヤそしてアスナがネギの部屋にいた。ネギは魔法を知っているアスナが暴走しないように役割を与えて動きを抑制しようと、今夜の作戦を教えるために部屋に来てもらった。

「ボクがマクダウエルさんに対処するから、アーニヤは茶々丸さんをお願い、アスナさんは寮から生徒が出ないよう見張ってね。」

「うん・・・でも本当にネギはエヴァちゃんを抑えられるの？強

いんですよ。」

「ネギなら大丈夫よ。それよりウチのクラスの連中がでるかもしれないんだから、任せたわよ。」

「・・・魔法使いつてちびっ子しかいないの？」

「マクダウエルさんに聞かれたら怒られますよ。」

++++

午後八時、年二回のメンテのために停電になった。曇り空は普段より学園を暗くし、言いようもない不気味さをもたしていた。

「封印結界への電力停止、予備電力に切り替わりました。予備システムへハッキング開始・・・成功いたしました。全て順調、マスターの魔力がコレで戻ります。カウントします・・・321、気分は如何でしょうか。」

『うむ、すぶるいいぞ。MAXとはいかんがかなり戻ってきた。後はボーヤをのして吸血するだけだ。』

「普通に頼めば受けてもらえるのでは？」

『封印に関してはボーヤにもう話してるし、勝ち負け関係なく呪いの解除に手伝ってくれるそうさ。だが勝って吸ったほうが気分がいいんだ。』

「そうですか、それでは健闘をお祈りします。引き続き私は電力が戻らないように監視しております。それから姉さんも頑張ってください。」

『ケケ、ネギノ生首ヲモツテキテヤルゼ。』

「姉さん、それは事件ですよ。」

++++

マホラと外界を結ぶ境界の橋、人工の光が失われ、雲から覗く空から月が顔を出していた。弱い月明かりの下に人影が3つ。

「おまえはココロウア・・・ボーヤはどうした。」

「スグに分かるわよ。というか貴方のパートナーは茶々丸さんじゃなかったの。（大丈夫、大丈夫。マクダウエルさんはネギが何とかしてくれる、私は人形を抑えればいいだけ・・・。）」

「ケケ、ナカナカイイ目ヲシテルジャナイカ。袂り取りタイゼ。」

「それはっ！」

少しイラついたエヴァンジェリンがアーニヤに問いかけようとしたところ、突然この場から消えてしまった。残った二人は顔色を変えず、見詰め合っていた。そろそろと凶器を出す、チャチャゼ口と手にグローブを嵌めて手を握り感触を確かめるアーニヤ。

「貴方は驚かないのね【魔法の射手・光の5矢】（ほっ、マクダウエルさんが消えたわ、最初に会ってから苦手なのよね）」
《ビシュシュ！》

「ケケ、見テタカラナ。」

アーニヤが牽制の魔法を打ち込むが簡単に切り払われてしまう、チャチャゼロの手に握られている大型のナイフが鈍く輝く。

「なんでマクダウエルさんに黙ってたの【フォルテス・ラ・ティウス リリス・リリオス風花武装解除】（何を見てたのかな？動けなくなったら聞くしかないわね）」

「ケケケ、面白ソウダツタカラダゼ。」

「貴方のマスターじゃないのかしら【フォルテス・ラ・ティウス リリス・リリオス炎の鞭】（なんで広範囲の魔法を回避できるの！？）」

アーニヤの武装解除を動きの緩急で避けて、チャチャゼロが切り込む！だが飛び込んできたチャチャゼロを火の鞭で打ち払うと距離を取るアーニヤ。

「イイ動キスルナ」

「【フォルテス・ラ・ティウス リリス・リリオス火精召喚・剣を執る戦友15柱・打ち棄てよ】（予想以上に強い、あんまり貯めがいているのは打てないわね）」

「ケケケケ、ジャマダゼ！ナンデ逃ゲルンダ？」

「別に時間さえ稼げばネギが何とかするでしょ。それに貴方はマクダウエルさんからの魔力がないと動けないしね【フォルテス・ラ・ティウス リリス・リリオス 火球の連弾・9門】（動きが速過ぎ！接近戦じゃ勝ち目が無い！）」

一定の距離を保ち逃げていくアーニヤ。そのアーニヤが退きながら出した火の精霊の分身を切り伏せながら追いかけるチャチャゼロ、分身は時間を僅かに稼ぎ距離を詰まらせない。それでも変わらず追いかけるチャチャゼロに向けて放たれた9発の火の玉、大きさはチャチャゼロよりも大きい。

《キイイン！！》

《パッパパン！！》

「少しハ真面目ニナツタカ？」

チャチャゼロがナイフを一振りすると不可視の剣撃が火球を切り裂き破裂させ、咄嗟にアーニヤが張ったシールドも貫通して首のスグ真横を切り裂いた。

「・・・今のは一体何（うつそ・・・中距離、飛び道具も持つてるなんて）」

「ケケケ、剣閃ッティウンダゼ。オラ！もっと楽シマセロ！」

《キイン！！》

「タカミチの居合い拳くらいね【フォルテス・ラ・ティウス リリス・リリオス 焰爆】（ちよっ、タカミチより速い！）」

《ドオオオーーン！！》

チャチャゼロの無数の剣撃は、アーニヤの手前で爆発した衝撃波でそらされた。

「ケケ、甘エゼ！」

いつの間にかアーニヤの後ろに回りこんでいたチャチャゼロが無慈悲な一撃を下そうとしたところ《スカッ》と外してそのまま落ちていき《ポテッ》という音がした。

「・・・ゴ、御主人。ソリヤナイゼ、モウ少シ粘ッテクレヨ。」

「どうやら形勢逆転みたいね！さあ、ネギが何をしたかキリキリ白状してもらおうかしら！（ひっ——！危なかった！最後、完全に反応しきれてなかった！）」

終始、冷静に対処しているように見えたアーニヤは内心ビビッていた。

チャイルドプレイ（後書き）

ザ・難産、実はアーニヤの戦闘力は2000くらいあります。だって燃える天空をぶっ放せるし、たぶんその辺のオリ主くんくらい捻じ伏せるかも・・・このアーニヤのテーマは弾幕はパワーだぜ！ですのでいたしかたないかと。

余談ですが原作よりタカミチが強いです。活躍できるかは私の腕次第ですがね。

化けの皮が剥がれ始めた今日この頃

今年もガキつかの笑ってはいけないシリーズを見ます。その前に今は人気力士が大集合SPを見てますがシルエットでわかる里田まいはすごいな、なんでわかるんだ？

[illegible]

灯りの無い、真つ暗な部屋。静かな部屋にネギが立っていた。その手にはカードが握られ、部屋の床に捕縛用の魔方陣が描かれていた。

「召喚！エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル！」

「っ！なんだ！」

部屋に一筋の光が発生する。悲鳴と共に現れたのは扇情的な下着のような、露出の多いエロイ服装をした少女だった。

「むっ！ボーヤかって、なんで貴様が私を召喚できるんだ！」

飛び掛ってきたエヴァンジェリンを華麗に避けて、少し離れるネギ。その手にあるカードを見てエヴァンジェリンが答えに辿り着く。

「お、おい……その手にあるのは契約のカードか!というこ

は貴様、私と仮契約を結んだのか！」

明らかに動揺したエヴァンジェリンがネギを見る。

「シュブニ・グラ シュマ・ゴラス【風花・武装解除】【かの者の力を奪い捉えよ・土柱封印】【残酷なる海に囚われしものよ 忌まわしく恐ろしい旧きものよ 大いなる水の牢獄をつくれ ルルイエの館】……！」

「のは！服がつ！魔力がつ！身動きも！」

何気に魔法の服きわといデザインを着ていたため、下着をぶっ飛ばされ、光る魔方阵が動きを阻害し、首に毒々しい水の首輪をされ、捕まってしまったエヴァンジェリン、一気にピンチになり涙目であった。

++++

エヴァンジェリンはかなり焦っていた。飛行用のマントやらマントにつけていた魔法媒体や下着をぶっ飛ばされ、幾何学的な魔方阵が檻となり、極めつけは首にされた禍々しい液体は魔力が空になるまで吸い続けて、詰んでしまっていたからである。

「な、なあ、ボーヤ。どうやって仮契約をしたんだ？」

「昔にオコジョ妖精から教わったものだよ。」

「お、オコジョ妖精だと！ということとは」

オコジヨ妖精・・・それは何時の頃からか人間の傍にいて、知らぬ間に人と人との契約を取り持つようになった謎の多い妖精、オコジヨの刑と如何なる関係があるのだろうか。

オコジヨ妖精・・・最近の奴らの行動は目に余るものが多い、人の利権を狙ったり、強引なやり方で契約を勝ち取るやり方は強欲、一説によると男女の誓いのようにしたの彼らだという・・・。

「マウストゥーマウス」

「やっぱりかっー！というかつ、いつだ！答える！」

「エヴァーが風邪で寝てたとき」

「あのときか！そういえばっ、貴様がいることに疑問があつたが花粉症が治つてどうでも良くなつてたが・・・私の・・・ファーストキスが・・・。」

あまりの出来事に膝を抱えて横たわるエヴァジェリン

「じゃあ、メンテが終わるまでゲームでもどうですか？」

「やる・・・ちくせう、油断してた・・・ここまで用意周到だったとは。」

「パニボンでいいですか？」

「やだ、だつてそれ運ゲーじゃないか・・・ホントに昔から私は運が悪くて、せめてぶよぶよにしないか？」

座椅子に座ってテレビゲームにいそしむ二人《お茶 お主 茶の

湯の心 分かつとるか？ なにっ 分からぬとな これでも食らえ これでも喰らえ これでも食らえ ばたんきゅ〜》・・・一方的にやられるエヴァンジェリンとニヤニヤと笑っているネギ。

「なあ。」

「ぶぶっ、なんですか」

「ほ、他のゲームをしないか？ほらもう飽きてきただろうっ」

「しょうがないですね。」

その後のゲームもボツコボコにされてすっかり不貞腐れてしまった。エヴァンジェリンは近くにあった漫画を手取る。

・・・ここでエヴァンジェリンが違和感に気づく。

「おい、なんで電気がついてるんだ。メンテのはずだろう？」

「学園長に頼んどきました。それでエヴァーはこれからどうするんですか？ボクに負けちゃったし」

「クソっ、ジジイめ、手を出さないといっておきながらこれか・・・
・そうだなジジイの後頭部でもすつきりさせてくるかな、あと某作戦部長みたいな言い方は止める」

すっかりヤル気なくなったエヴァンジェリンの封印をとき、ある提案をするためにみをのりだすネギ

「近いぞボーヤ、オマエもジジイの頭がどうなってるのか気になるのか？」

「多分空っぽだと思いますよ。もしエヴァさんの呪いをボクが解くことが出来たら・・・何かくれますか？」

「そうだな・・・私の処女でもなんでもくれてやるわ・・・60年とかヴィンテージってレベルじゃないぞ、最早化石だろ・・・」

自分で言ってるスゴイ勢いで傷ついていったエヴァンジェリン、光の無い眼はとも背中をあわだたせるような威圧感を持っていた。そのままほっておいたら空鍋をしそうな勢いだったので、ネギはサツサと呪いを解くことにした。

洗濯物をかける棒となっていた、ナギからの形見？を取り出し、財布の中に入れていた呪符を杖の先端につけ、その先端をエヴァンジェリンに押し付けて呪文を唱える。

「【彼のものの罪を赦さん今地獄から解放たれよ】」
《パキンッ》

ガラスが罫割れた音と一緒にかつてのエヴァンジェリンの魔力が戻ってきた。

「おお、おおおお・・・あれ？おい、少ししか戻ってないぞ！」

「だって登校地獄とエヴァさんの魔力を抑えてるのは別物でしょ？今戻ってきたのは登校地獄を維持するのに使われていた分ですよ。」

「うん？・・・そうかつ、マホラから出てくるのか！」

最初はぬか喜びかと思ったエヴァンジェリンだが、ただ単にマハラから出れば魔力が戻ることに気がついてテンションがうなぎのぼりになって、結局ネギの話を聞かず茶々丸にこの喜びを伝えるために夜の学校へ飛び出していった。

「・・・クフフ、まるで子供ですね。（やはり彼女も真の敵ではなかったそうですね。彼女は一度心を許した人には例え裏切られても憎んでも復讐をしないんですね。史上最悪の吸血鬼は天性の悪ではなく、偽悪でしたか・・・。）」

にたりと不気味な笑いをした少年は静かに先をみていた。

化けの皮が剥がれ始めた今日この頃（後書き）

オコジヨ妖精ってナンなんですかね？実際、カモがナギって噂が流れた時があったんですけど、ちよっとマジか！って思いましたよ。結局、デマでしたけど。

そうそう、アンケートしていいですか。この話を何処で終わらせるかなんですけど

？本編準拠で魔法世界まで行く

？マホラから出ないでグダグダ暮らしてく

？オリジナル展開突入

が候補なんですよ。？は原作が完結するまでこの話が続きます。

？は結構早めに最終回になるんで、次回どんな原作の二次がみたいか書いて下さいね。

？はホントに自分でもどうなるか分からないんで、クソ展開になっても知りませんよ。

あと他にこんな終わりがいいんじゃないかって人がいたら？って書いてくださいね

では期待して待ってます！アンケートはこの作品が修学旅行編に入るまでです。それではさよなら。

油断していると酷い目に遭います、例えば事故とか

大晦日に発覚した（私的）大事件はウチのPS2が壊れたこと、作者です。笑点風にやりましたが・・・ええ壊れました。小説の息抜きにゲームでもといそいそと起動したらディスクを読み込んでくれなくて・・・結構ゲーム詰んでたのにふざけんな！とこの話を打ち始めましたよ。

[illegible]

1 対 4・・・おわかりいただけただろうか？この数字はこの室内の男女比である。

エヴァンジェリンの家、リビングに人が5人（＋人形）一人は天井から吊るされ顔を歪めて苦しんでいる。三人はテレビを眺め、時折吊るされている人を見て笑っている。一人は静かに三人の傍に立っているがオロオロとどうしたらいいか戸惑っている。

《うわーいつ、あーにやだ！ね、ね、あそぼうよ！》

「ネギ……あんたこんな趣味があつたなんて……。」

「んなわけあるかつ！大体なんでそんなものがあるんだよ！」

「ああ、萌えネギ研究会つてのがメルディアナにあつてそこで無料支給されてるわよ。」

「うぷぷ、ボーヤが・・・くく、腹が振れるわっ」

「なん・・・だと!？」

吊られた男はびよんびよんしていたが、衝撃の事実を聞かされ絶望的な表情をしてきた。そしてブツブツと心当たりのあることを呟いていた。見事なレイプ目であった。ネギをほおって置いて三人は雑談を始め、アーニヤは萌えネギ騒動の全容を語り、アスナが朝倉から聞いたネギについての噂を話す、それらを統合してエヴァがネギの正確を丸裸に、赤裸々に暴露していった。

「ちなみにマホラにも萌えネギ研究会の支部があるから、もう諦めたほうがいいわよ。あと女性魔法先生が中心になって所属してるし、源先生にいたってはドネットさんと親しいらしいわよ。」

「うぬぬ、しずね先生が歓迎会で俺の頭をいきなり撫でたのはそういうことなのかっ、シャークティ先生が妙に宗教について語ったのはそのせいかわ」

「あ、マホラでの活動も記録されてるのね。」

「ひーっ、買い物で材料で晩御飯の考察までされてるじゃないか、私を笑い殺しにするつもりかわ」《バンバンっ》

「いつそ殺してくれっー!!」

ネギの恥ずかしくない筈なのに、恥ずかしくなる生活はその後も長く続いた。

++++

またねー、と帰っていったアーニヤとアスナを見送って、すっかりいじけてしまったネギの前にエヴァが座り込んだ。茶々丸は夕飯の準備をしているのでリビングにいないし、チャチャゼロはさっきまでネギの活躍やら醜態やら普段の生活が流れていたテレビでゲームをしている。

・・・大丈夫か？ネギのやつ、一時期の私より虫の息だぞ。というか私でさえここまでの精神攻めは始めてみるぞ。アーニヤのやつめ、ネギが私と仮契約をしたからって、ここまでやることはないだろうに、アスナもアスナだ。鋭く尖ったナイフのような切れ味のコメントをしおって、その度にネギがびくんびくんたじやないか。

「なあ、ネギよ。そう落ち込むな、こうなってはしょうがないから開き直ったほうがいいぞ？今日はウチで晩御飯を食っていけ、茶々丸がお前を励まそうと頑張ってるからな。」

弱りきったネギを見てちょっと心配になって声をかけるエヴァ。

「そ、そうだ！ほら、昨日いったじゃないかつ、私の呪いを解いたら何でもしてやるっていうやつ、なにか言ってみる！何でもいいぞ」

「そうですね、何がいいですかね。」

ふう、なんとか持ち直したようだ。しかし勢いでいったしまっ

たものの、ホントに私の
身体を求めてきたらどうしたらよいのだっ

「じゃあ」

《ごくろ》

「チャチャゼロ下さい」

《ズシャー！！》

求められなくて助かったのか、自分の従者に負けて悔しいのか。
微妙なところだな・・・。

「なんでチャチャゼロなんだ？」

やはりネギもこんな幼児体系じゃ駄目なんだろうか。

「なんかあの無機質な目が爬虫類みたいでかわいいじゃないですか、それにあの憎まれ口も愛嬌があつていいと思いませんか？」

それはどうなんだ？なんか独身のOLみたいなんだが、大体アイツといつもいると気がめいるぞ。いつも刃物やら殺し合いの話しかしらないが・・・いや、最近はゲームの話しかして来ない気がするな。キリングドールとしてアイツはもう駄目かもしれんな。

++++

一家団欒、これはそういつていいのではないだろうか。マスターがいて、ネギ先生がいて、姉さんがいて、私がいる。私が来た当初はマスターはとも荒れていて、今とは比べ物にならないほどに家が散らかっていました。

初めて私がマスターの笑顔を見たのは、私がマスターの食事を作ったときです。私はガイノイドですので味見が出来ませんし、料理本やデータでは一人分を美味しく作るにはかなりの時間が掛かりました。

初めて上手く作れたときのマスターの微笑みは私のデスクトップになっていきます。ですので食事というのはとても大事なものだと思っています。

「茶々丸さんも食べなよ、この鍋美味しいよ。」

「ありがとうございます、しかし私はガイノイドですので食事は不要です。」

「茶々丸も食べるといい、フェイクでも雰囲気味わうのはお前の成長にいいかもしれんからな。」

今まではマスターの後ろから眺めていた食事、何気ない二人の気遣いが私の作った鍋よりもあったかいです。

「こんどチャオに茶々丸が食事できるようにしてもらおうか。」

「チャオさんってそんなことまで出来るの?」

「未来から来たのであれば、出来てもおかしくないな。ホームク

ルスの素体を使えばアイツなら創れる・・・といいな。」

ネギ先生の赤面エピソードの上映のあと、ネギ先生の謎を徹底解明されたとき出てきたネギ先生の転生者という話。興味を持ったマスターは自分達の情報と交換で教えてもらうことにしました。その際話したのがチャオの話です。ネギ先生は元々知っていたようで、わざわざ秘密にすることもないと判断したマスターが話しました。

「ケケケ、酒ガウメーゼ」

「チャチャゼロはもつと野菜を食べろ」

「そういうエヴァも白子食べてないでしょ。」

「私はいんだよ。」

「マスター、食べてくれないのですか？」

「分かったからそんな目で見るんじゃない！」

まだまだネギ先生には秘密がありますが、私の秘密は全て知られ、私たちとの距離が縮まったような気がします。できればこの時間がもつと続きますように。

油断していると酷い目に遭います、例えば事故とか（後書き）

日本はオワコン・・・そう感じました。石原爆発しろ

さてそんなことより今は大晦日です。次回の更新は年明けということですよ！・・・・・・・・あとでこの話し改定しておこ

ここまで来るのに少々予想外なことが多かったが・・・面白い、この自分の思い通りにならない感じがボクの中にある記憶を刺激する。理不尽な現実に苦しまされてきた前世のボクじゃないボクの憎しみを感じる。まだまだ執念が足りないな、この程度の理不尽を退けないと宿敵と相対した時、潰されてしまうだろう。

ボクが現在の状況を楽しんでいると胸の中にいた猫、猫にとりついたさよがボクを見つめてくる。クフフ、微笑もうにも顔が歪んでしまうね。

『先生・・・なぜ先生は私たちにそこまで話してくれるのですか？』

「そこまでって、何処までのこと？」

『先生が転生者だってことや能力のことです。』

「ボクにとってはそんなものはどうでもいいんだよ。」

このやり取りも3回目かな？どうやらさよは本当に疑問に思っているみたいだね。いいだろう納得するまで答えてあげようか、さよは絶対にボクを裏切れないからね。

『あなたは何がしたいんですか？』

「前にもいっただろう？宿敵に勝つんだよ。」

『宿敵？』

「そう誰か判らないけど、候補ならいる。創造主と呼ばれる魔法

使いに英雄ナギスプリングフィールド、そして神楽坂アスナだ。」

『神楽坂さんが？』

どうやら驚いてるみたいだね。でもボクには否定できない要素がある。今までの候補もボクと相性が悪いやつらばかりだった。アスナさんはボクの補助魔法を無効化できるし、原作でみせた動きは力ン力法と合わせればボクの脅威足りえるだろう。ナギ・スプリングフィールドはバグのような存在だ。創造主は鍵があるし、ナギを追い詰めるほどの実力者だ。

「かもしれないね。でももしかしたら今回の世界にはいないかもしれない。」

『・・・わかっていないんですか？』

「そうだね、本人にあっても殺されるまで気づかない時があったからね。」

『あつたことがあるということですか。』

「結果は惨敗続きだよ。良く引き分けさ、だからボクの情報が洩れて殺されても関係ない勝つまで続くんだよ、ボクの人生はね。」

『どうして私に教えてくれるんです・・・。』

泣いている猫、シウルだね。彼女がなぜそんなにボクに執着するのか分からない・・・しかしそれを利用して貰おうか。彼女の頭を撫でながら優しく語り掛ける。

「さよ、ボクはね。一度も【安心】したことが無いんだよ。」

『【安心】ですか？』

「そう【安心】だ、人はそれを本質的に求めるんだ、そして一度手に入れたら手放したくないんだよ。今のエヴァンジェリンを見てご覧、ボクみたいなものに不覚を取ったのは【安心】を得てしまったからだ。15年前の彼女ならボクを迂闊に近づかせなかったはずさ。」

『先生はどうやったら【安心】できるんです。』

「ボクを脅かすものを排除したときだよ、人が 歴史が ボクと同じようなことをしている。さよ、人間は何か執着していないと生きていけないんだ。そう君が60年亡霊だったのはこの世に執着していたからだよ。そして執着していたものが叶ってしまったとき、君の身体は不安定になってしまった。猫の身体に入っただのは【安心】を手放したくなかったからだ。」

『私は今【安心】している……。』

「君の首についている【ルルイエの館】はボクの我侭、【安心】したいという欲の現われだよ。ボクは君が欲しい、さよ分かったかい？もうボクは疲れたから寝ようか。」

『お休みなさい、先生。（私はこの【安心】からは逃れられない。
・先生のために何が出来るのかな？）』

どうやら今回の出来事はボクにかなりのストレスを与えたようだ。こんなに自分をさらけ出したのは、初めてかな？

++++

深夜、体は寝ていたがボクの意識は目覚めていた。いつものように、情報をまとめて考える。さよ、彼女はボクに依存している。今はこれでいい、この前みたいにボクの情報を簡単に洩らしはしないだろう、誰しも独占良くはある。それに【ルルイエの館】がある誰かに精神を見られそうになってもブロックする。

『ケケケ、ヨウ新シイ御主人元氣カイ？』

チャチャゼロから念話があった、どうやら久しぶりの外出にご満悦のようだ。

『アア、報告シテオクコトガアツタゼ。明日朝一番二学園長ノ所ニ行カナイトイケナイゼ？勿論予想済ミダロ？エヴァト一緒ニ、多分高畑ラヘンニ連行サレルゼ。』

学園長もエヴァンジェリンの呪いが解けたことに気づいたみたいだ。あとチャチャゼロがボクを御主人とよんだり、エヴァンジェリンを呼び捨てにしているのは契約を変更したからだ。

『アト聞イテタゼ？サツキノ告白ヲヨ。オレモ忘レラレタラ困ルゼ、オマエガ其処マデイウ奴ナラ楽シミダ。』

頼もしい限りだ、アーティファクトの調子はどうだい？

『ケケ、ケケケケケケ、絶好調ダゼ！アー、誰デモイイカラ斬リ

テーナ。』

待ってくれよ、スグに斬り放題になるから　そのときは思う存分振るってくれ。

『オレモ狂ッテルッテ、ヨク言ワレルガ御主人モ大概イカレテルゼ！』

ありがとうそれは褒め言葉だよ。チャチャゼロ、ボクの敵を全て切り裂いてくれよ。そのために君を得たんだからね、汚れ役を進んでやる君をね。

告白（後書き）

うーん、あとなんか足りない気がしますですが大体こんなものでしょ！この話しの受け止め方は人それぞれですが、伝えたいことは一つ主人公は逝っちゃってます。

それではさようなら

謀略フェイズ

うへへ、いやー今回も面白かったですね。百舌谷さん、ええつこ存じないのです蚊？篠房六郎さんの『百舌谷さん逆上する』ですよ、アフタヌーンでやってますから是非！・・・こんなもんですかね、誰か二次書いてくれないかな？チラッ

[illegible]

レーベンスシュルト城、壁一面に納められた本、城の内部にある書庫には多少その道に携わっているものだったら驚くほどの貴重な書物があるのに気づくだろう。この城の主に合わされて造られた机には大量の禁忌とされる魔道書が積まれていた。

「うむ、無いな。【ルルイエ】という言葉すらないか・・・あれ程の強制力を持つ術だ、何処かの神や怪物を封印しているなどの由来がある言葉だと踏んだんだがな。・・・新しく創られたものか？」

新たに机の上に本をのせ唸るエヴァンジェリン。

『ケケケ、警告しておいたぜ』

「そうかご苦労、それでボーヤはなんて言ってた？」

何にも言わなかつたぜ。

そうかそうか、なにも言わなかったか。どうやらチャチャゼロと私が繋がっていることに気づいているのか、無言これは私に対するメッセーじだな。

「他に何か言ってなかったか？」

『スグニ斬り放題になるっていつてたぜ。』

クク、斬り放題ねえ。今の自分の立場は理解しているくせに、面白いなボーヤは……。私の呪いを解いた以上、ジジイは事態を収めねばならない。私は元賞金首の吸血鬼、ボーヤは英雄の子とはいえ、そのことはごく一部しか知らないからな。ジジイが本気なら揉み消しる、手札を切るつもりか……。手札？そうかジジイはボーヤが何処まで出来るか正確に分かってないだろうな。精々近接に特化してるくらいか。

「チャチャゼロ、アーティファクトの調子はどうだ。」

『絶好調ダゼー！！今ナラ、エヴァをばこぼこに出来るぜ？』

「フツ、いいだろう試し切りが終わったら別荘に來い相手してる。」

『ケケ、妖魔ジャ物足りなかったとこダゼ。御主人には感謝するぜ、エヴァとやれるんでからナ。』

ホントに楽しそうだなチャチャゼロの奴、まあ無理も無いチャチャゼロのアーティファクト【二相の器】 液体と固体を自在に変換でき、質量や体積も込める魔力の量で調節できて、形状や色まで自由に出来る。それが百戦錬磨のチャチャゼロが持つてるんだ、並大

抵のやつじゃ相手にならんだろう。

だがこの15年で鈍ってしまった感を取り戻すには丁度いいだろう。ボーヤに教えられたからな、油断するなとな。ジジイが私を連れてくるためにタカミチを寄越すだろう、そうしたらボーヤの警戒が薄くなる。ならボーヤは私を嵌めたようにジジイを追い詰める、出来なかったら・・・ボーヤを連れてまた逃亡生活だな。

『ソウソウ【ルルイエ】何て単語は図書館島の検索にも引つ掛からなかったぜ。』

「そうか・・・。」

【ルルイエ】という言葉は、存在しない？いやそれはないな、実際に喰らった私が一番理解している。まさか・・・ここではない世界の言葉か？しかしボーヤが創れる様なそんな甘いものではない、ということは他にいるのか異世界の魔法使いが・・・フッフ、ボーヤはホントに面白いな。

『・・・エヴァ。』

「ん？なんだ、まだ何かあるのかチャチャゼロ。」

『羨ましい力？この俺が、御主人から、カードを受け取っている俺が羨ましい力！』

「ええい、何でそうなるんだ！？」

『アレ？ファーストキスが仮契約で、カードも貰えなかったのを気にしてると思ったんだがナ。』

はうつ！くつチャチャゼロめ、気にしてたのに！気にしないようにしてたのに！覚悟してろ、別荘に来たとき思い知らせてやるわ！・
・私のアーティファクトって何だろ？

++++

空が白む頃、ネギの住むアパートに近づく人達がいた。

「さよ、起きて。」

『ふええ？おふぁよーございます・・・なんですか、まだ六時前じゃないですか。』

「ボクはこの後、連れて行かれちゃうから、さよにはアーニヤにいつて欲しいんだ。ボクが学園長に首にされるってさ。」

『そうなんですか・・・ええっ！先生首になっちゃうんですか！？なんでどうして！』

「落ち着いて、さよそれはね。ボクがエヴァを助けたからだよ、いいかい？さよ、君はアーニヤの所に駆け込んでボクが首になるといつて欲しいんだ。ボクが首になるかどうかは君に懸かってる。」

『ネギ先生・・・分かりました。行ってきます！』

猫なさは、台所の窓からそろそろつと辺りを窺いながら女子寮へと向かっていった。ネギはそのまま布団に戻り、迎えが来るのを

待った。

《バギンツ！ドタドタ！》

「な、何なんですか！一体！」

「ネギ・スプリングフィールド！貴様を学園長の所まで連れて行く、抵抗するなら容赦はしない！」

「は、離してください！」

++++

学園長室、その部屋の持ち主は重い溜め息をし、暗い顔で連絡を待っていた。どうしてこうなったのか？近右衛門は考える。

ワシの立場はマホラ学園の学園長、アジアでもっとも大きな影響力を持つ、それ故に責任は重い、此度のことが本国（魔法世界の元老院）に洩れれば、一気に力をもぎにくるだろう。ワシをよく思っていない連中がここの実権を握れば、西や他の術教会との関係が壊れてしまうだろう。

それだけは避けねばならない、日本が戦火に包まれるのはもう沢山じゃ。しかしどうすればいい？エヴァやネギを処分したとしても問題は残る、処分しなければ本国が介入してくるだろう。

「学園長、ネギ・スプリングフィールドとエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルを連行しました！」

「ああ、入ってきなさい。」

「はっ！」

むむっ、空気が重いわい、ネギ君とエヴァを囲むように魔法先生が囲んでおる。特に高畑先生は二人の動きを注視しておる。ああ、来るのが早すぎるのう、結局徹夜して考えたのじゃが答えは見えん。

「よく来てくれた、二人には聞きたいことがあつての。」

「ほう、ジジイ耄碌したか？強制的に連れてきたくせによく言うわ！」

うお、これ殺気立つ出ない！全くエヴァも人がワルイわい、わざと煽るように言わんでいいじやろくに、それにしてもネギ君がまるで子供のように怯えていて気味が悪いのう、女性の先生方も気の毒に思ってみてる人もおるし、厄介じやのう。

「ふむ、ネギ・スプリングフィールド君。きみはエヴァンジェリンの封印をどうして解いたのじゃ？教えてくれるかの。」

「は、はい！ボクが4歳くらいに父さんがやって来てマクダウェルさんの呪いを解くように頼まれました。解く方法も父さんが教えてくれました。」

破れたパジャマに乱れた頭髪と相まって涙目のネギ君が可哀相な子供に見えるが、わざとらしいわい高畑先生やエヴァなんぞ、俯いて肩を震わしているわ。あー、明らかに同情する目が増えてきた・・
・こら！連れてきたお前までそんな顔をするでない！

《バタバタバタ！！》

「学園長！ネギ先生がクビってどうゆうことですか！」

「お爺ちゃん、ちよつと話があるんやけど。」

「ネギをクビってどういうことですか！」

《ギヤーギヤー！！》

「み、みなさん！？」

「「「ぶはっ！」「」「」

あーどうしたもんかの、ネギ君のくさい演技で吹いておるものもあるし、とりあえず出て行ってもらおうか。正直、本人達とだけで話したほうがよさそうじゃの。

「静まれー！ー！！高畑先生以外の先生は生徒達を外に出してくれるかの、ネギ君、エヴァンジェリンはここに残るように」

ふう、やっと騒がしくなくなったわい。ふおおおお、ネギ君そんなにいい笑顔でなにかいいことでもあったかの。

「学園長、どうやら僕らの処分が決まったようなのでちょっと相談したいことがあるんだけどいいかな？」

やれやれじゃのう、元老院の工作員からですら同情をかつたり、一部の魔法先生からも人気も高くて、生徒からも好かれておる。困ったのう、彼らを処分したら暴動が起きかねん。

「ジジイ、貴様もまんまとやられたな。」

「エヴァには言われたくないのう、ネギ君相談事とはなにかね？」

「クフフ、面白いことですよ。貴方も厄介事もボクの目的も簡単ではないのですから、それではですね。相談事とは――」

++++

クツクツク、ボーヤの仕組んだ茶番も終わり、ボーヤの本来の狙い？の学園長の引き込みを始めたか。やはり恐ろしいのはボーヤの駆け引きの上手さだな、あの立ち振る舞いはよく目立ち、人の記憶に残る。そこで印象を良くする行動をとれば自然と好意的にみられる。

ジジイや私のように最初から疑ってきけるものには、本性を晒し「カリスマ」でもって人心を掌握するか。ナギのように無意識で人を惹き付けるのではなく、意識的に話しや動きの主導権を握って自分を大きく見せる。ハッタリともいうが非常に効果的な、実際ジジイも私もボーヤ魅せられてしまった。

「ふむ、なるほどのう。つまりお主はワシの人脈や地位を利用するわけか……。」

「ええ、まずボクを囚として邪魔者を排除しましょうか。今回の修学旅行は京都でしょう？」

「未来の知識……やっぱりバレちよる？」

「クフ、ボクは気にしてませんよ。それより関西呪術協会の蛆の掃除はボクに任せてもらいましょう、貴方と西には他にして貰いたいことがありますのでサポート程度で十分ですよ。」

どうやらボーヤの案に乗ることにしたようだ。元々ジジイと詠春のは少し強引だったからな、ボーヤと近衛を餌に呪術協会ないの反乱分子を一掃するか・・・本部が手薄になるし、近衛を守り切れねば大きな問題になるな。

近衛の魔力量は異常なほど大きいから魔力タンクとして使えるだろうし、詠春やジジイへの牽制になる。それにだ、もし外部からの介入があればこの目論みは水泡のように脆く崩れ去るだろう。

謀略フェイズ（後書き）

気がついたら五日になっていた、何をいつてるかわから（ry
ボーっとしていたら更新が遅れてしまいました。すみません。

さて今回は学園長との密談やらエヴァの心の変化を書きましたが、フラグです。なにフラグかというと秘密です。とりあえずチャチャゼロのセリフが面倒すぎて結局語尾をカタカナにすることに、読みズラいんですよ。自分で見返してて、？って思いました。それではさようなら。

早起きは三文の得 現在の貨幣価値にして100円！！

今日のチャチャゼロ！！

ヨウ、みんな元氣にしてる力？作者のアイドル、チャチャゼロダ
ゼ。今回からオレがここで作者が氣になったことを垂れ流してく力
ラ、氣をつけて見てつてくれヨ。あと興味の無いやつは飛ばしてい
いんダゼ、無理をしちゃ駄目なんダゼ。

ジャアまず最初は妖怪についてダ、まず自然に生まれた妖怪からイクゼ。コイツラは人々の噂話や神様への信仰が変化して生まれた連中ダ。山への畏敬やら夜道が怖いとかから生まれるんだぜ、つまり【恐怖の具現化】ということだ。山犬とか見越し入道とかダナ。

ちなみに作者的には人間の念オトとかと自然にあるエネルギー（マナとか）が負の感情で混ざった・・・まあナンダ酢と水と卵黄で出来たマヨネーズみたいなもんだと思ってるぜ。

まあ今回はこんなもんだ、次回は作られた妖怪ダゼ。

[illegible]

京都、何処かの武家屋敷、夜の帳が下りて誰もが寝静まっていた。

「だ、誰ムグツ《プシュツ》」

「ケケケ、これで終わりだナ。」

この夜に複数の人物がこの世を去った。このことは関西呪術協会の反近衛派に緊張を走らせ彼らの過激派の動きを活発化させた。

++++

朝のチャイムと共に騒がしい教室が段々と静かになっていく、教室の引き戸の音が響く、去年までの彼らとは比べ物にならないほど良くなっていた。

「おはようございます、皆さんいよいよ私たち3-Aが修学旅行に行きますけど準備は宜しいですか？来週に迫った修学旅行を有意義に過ごすため、現地の情報は集めたほうがいいですよ。私たちが行く京都・奈良は非常に見るべきところが多いですからね。」

「ネギは準備できてるの？」

「アスナさん、先生を付けて下さいね。そうですね、特別なことを用意するってことはありませんね。」

「じゃあうちの買い物に付き合いなさいよ。」

「な、アスナさん！ずるいですわっ、ネギ先生こんな乱暴な言葉遣いの方よりも私と行きませんか？」

「なんですってっ！」

「なにかっ！」

「やれやれー!」「やつちゃえつ、アスナーー!!」

皆さん元気ですね、でもまだホームルーム中なので静かにしないといけませんね。やれやれ、修学旅行はこんなで大丈夫なんですよか？

+++++

原宿、それは若者の集まる町で流行の発祥地とも言える場所。つまりだ、何回も転生しているボクは、見た目はともかく中身はおじいちゃんだからすごい場違いな印象を覚える。

「はっはっは、ボーヤ！次はあそこの店にいくぞっ!」

「お待ち下さい、マスターまだお昼前です。是非アルタ前に行きましょう。」

「茶々丸、お前もすっかりハシャいでるじゃないか。アルタ前は新宿だぞ?」

「そう・・・なのですか。」

ボクの前を歩いてるのはエヴァと茶々丸さん、朝ボクが二度寝しようとして布団に飛び込んだらドアを吹き飛ばして茶々丸に連行されたのがついさっきだ。エヴァたちの買い物につき合わされるのはいんだけど、先にいつて欲しかったよ。ボクの休日が・・・。

「アスナー、これはどーや?」

「ダンベル・・・しかも15キロまでの奴じゃないっ。このか、あんたは私をどうしたいのよ?」

「じゃあこっちはどう?」

「ペアルックの服?」

「ほら、高畑さんと着ればいいじゃない。」

「た、高畑先生と・・・ってできるわけないじゃない!」

後ろは後ろで盛り上がっています。たしか4月21日がアスナさんの誕生日で今日、アスナさん、このかさん、アーニヤで買いに来ているようです。なんかエヴァさんの吸血鬼騒動で仲良くなったらいいですよ。

「ネギ先生、これはどうですか?それともこれ?」

『なるほどそうきましたか・・・私的にはフード付きカットソーがいいと思いますよネギ先生!』

「なんであやかさんの選ぶものには、猫耳やら尻尾がついてるんですか?」

「『かわいいからですよ!』!」

「・・・そうですか。」

何でしょう?このシンクロは・・・ほんとにアヤカさんはさよの

ことが見えていないんでしょうかね。あれっ、他の人達もなんで近づいてくるんですか？いいからこれに着替えろって、これスカートじゃないですかっ！ちょ、やめっ。

++++

いやー、一昨日は嫌な目に遭いましたね。偶然、あの時僕たちをストーキングしていた美沙さんたちがだしに逃げる事が出来ましたけど。それにしても教員よりも早く来る生徒たちってどれだけ楽しみにしてたんだって話ですよ。

「みなさん、おはようございます。本当に早いですね、何時くらいに着たんですか？」

「始発アルヨッ！」

「落ち着かなくて早く来ちゃった！」

「クーさんも裕奈さんも元気でいいですね、全員そろってますか？」

『は~~~~い！』

うんうん、皆元気が宜しいですね。でも新田先生がこっちを見てるので声のトーンを下げましょうね。それでは出席を取ってと・・ちゃんと班に分かれて並んでますね。1班が柿崎、椎名、釘宮、鳴滝姉妹ですね。2班はクーフェイ、超、葉加瀬、四葉、春日、長瀬ですね。3班は雪広、那波、村上、朝倉、レイニーデイですね。

4班は佐々木、明石、大河内、龍宮、和泉ですね。5班は宮崎、綾瀬、早乙女、エヴァンジェリン、絡繰ですね。6班が神楽坂、近衛桜咲、アーニヤ、長谷川とさよですか。

「長谷川さん。」

「え、ネギ先生なんですか？」

「アーニヤから聞いてますよ、頑張ってくださいね。」

「・・・どこまで？」

「長谷川さんがネット「ストップ！言うなよ！誰にも言うなよ！特に朝倉の奴にだけは絶対に言うなよ！」ふりですね、分かりますよ。」

「そういうのいらねえから！！」

素直じゃありませんね。ああ、いつちゃったか・・・まあ、アスナさんとかコノカさんなら彼女と上手くやれると思いますし大丈夫でしょう。それよりもこっちの方が気にしないといけませんね。

「刹那さん。」

「ネギ先生ですか・・・。」

「そんな顔をしているとコノカさんが心配しますよ、ボディガードなら護衛対象を不安にさせてはいけません。この旅行中彼女から決して離れてはいけませんよ、何かがあつてからじゃ遅いですからね。」

「それは分かっていますけど。」

「いいえ、貴方は分かっています。刹那さん、貴方の役割は彼女の護衛です。さつき貴方はコノカさんに話しかけられた後、彼女から離れてしまいました。それはいけないことです、いいですか？貴方がすべきことはコノカさんの隣りに立って彼女の身に降りかかる危険を全て排除もしくは避けることです・・・説教臭くていいかもしれませんね。」

「先生・・・。」

「刹那さん、ボクと話してる余裕があったらコノカさんと話して下さい。それとマイ・ボディガードとか見ることを推奨します。」

まだ辛気くさい顔をしています。が前よりも良くなったんじゃないでしょうか？あとは・・・皆うるさいぐらい楽しそうですから大丈夫ですかね。

それにしてもエヴァさんが子供のようにキラキラした瞳で流れる景色を眺めてるのはいいんですが、茶々丸さん・・・そんな食い入るようには見なくてもいいんじゃないですか？えっ、記録中なんですか。

早起きは三文の得 現在の貨幣価値にして100円!! (後書き)

はい修学旅行篇はいりました。

今回からはじまったチャチャゼロ枠はまさに俺得コーナーなので私が飽きるまで続けて生きたいと思います。

四日から自動車学校が始まりましたので年末のような怒涛の連続投稿はできません楽しみにしている方たちすみません。

それと三日に一度はうpしたいと思いますでも来週から午前も午後も自学が入ってるんで遅くなりそうです。

それではさようなら

赴任から2ヶ月余りではさすがに厳しいものがあります

『今日のチャチャゼロ！！』

ヨウ、全国のチャチャゼロファンの皆待たせたナ、チャチャゼロダゼ。

今日のテーマは作られた妖怪ダゼ、大きく分けて3パターンあるゼ。

その1、事実を都合よくするために創られたものダ。これは当時の日本が貴族制だったことや宗教や迷信で支配されていたことも理由ダゼ。権力者たちが自分の悪事を隠すためだったり、自分を偉大に見せようとするためだったり、侵攻後の後付の話だったりとかナ。その代表的なのが鬼や土蜘蛛、天狗ダナ。

その2、絵や物語、作り話のために創作されたものダ。生活に密接したものや単なる噂話をもとに創られた妖怪ダゼ。有名な妖怪画家といえば鳥山石燕ダ、彼が描いた妖怪にはオリジナルの妖怪が多く描かれてるんだゼ。後は水木シゲルダゼ、彼のことを描くにはスペースが足りないゼ。マ、ゲゲゲの鬼太郎や畏悦録が代表作ダナ。

その3、閉鎖された空間を円滑に保つ為に創られたものダ。これはその1と似てるゼ、だがな権力者じゃなくて当時、人口の割りを占めていた農民（一般市民）が作り出したところが違うんだゼ。先に言っとくけどナ、追放された人や旅人、獵師などは民俗学の用語で異人って云ったんだゼ。妖怪が創られた理由としては村の口減らし（異人）、殺人（死んだのは異人）、（異人との子の）出生の隠蔽、村の近くに住むもの（異人）への差別ダゼ。

「じいさん・・・あんたって人は・・・。」

「うむ、ネギと契約してる力モなら彼を探せるだろうしな。あと秋葉原にも行きたいからな。」

「欲望が駄々漏れだぜ、じいさん。ま、渡りに船って奴だな！」

この後、クリスとカモが日本に行くのだが（クリスが）秋葉原に嵌ってしまいネギのところに行くのが遅れてしまったのは全くの余談である。

++++

京都、清水寺本堂『清水の舞台』。ふう、いい景色ですね。でもどうせなら冬に来て、雪景色のお寺が見たかったですね。なんでウチの学校はこんな季節に修学旅行に行くんでしょうかね？

「ザ・京都っ！茶々丸！ちゃんと撮ったか！」

「抜かりありませんよ、マスター。」

「これが噂の飛び降りるアレか！」

「誰かッ、飛び降りれ！」

「私が行くアル！」

「いやいや、拙者が飛ぶでござるよ。」

「おやめなさいっ！！」

ホントにいい景色ですね・・・新田先生分かってますよ。注意してきますからそんなに見ないで下さい。エヴァさん！他の人の迷

惑になりますから騒がないで！クーさんに楓さんも危険なことはいないで下さい！

「ここが清水寺の本堂ですね、いわゆる『清水の舞台』です。本来はくくく略くくく生存率は85、4パーセントと高くくくく略くくくなぜ飛び降りるかというと自殺ではなく願行つまり飛び降りて無事なら観音さまが願いを叶えてくれて死んでも成仏できるというくくく略くくく飛び下りは明治5（1872）年明治政府によって禁止され下火になったそうです。」

「うおっ変な人がいる！」

「ユエは神社仏閣仏像マニアだから」

「マスター、駄目ですよ。」

「べ、別に飛び降りる気は無いぞ！」

あんなにそわそわしだしたら誰でも感づくと思いますけどね。それにしてもユエさんの眼があれほど開かれてるのははじめてみますよ。

「そうそうここから先に行くと恋占いで女性に人気のある地主神社があるです。」

「えっ、恋占い」

「ちなみにその石段を降りるとあそこに見える『音羽の滝』に出ます、あの三節の滝の水を飲むと右から健康・学業・縁結びが成就するとか……。」

『縁結び！それだ！』

ちよ、ユエさん！皆を煽らないで！駄目ですよ、走っては他の人達に迷惑ですから！

「……ま、これは観光客用の宣伝文句で、本当は『仏・法・僧

への帰依』とか『行動・言葉・心の三業の清浄』を表わしてるんですが……誰も聞いてませんね。」

++++

なんていうことでしょ……地主神社の落とし穴や音羽の滝のワナ（滝の水にお酒混ぜてある）を未然に防いだのに係わらずこの疲労感は……というかお酒に酔わせたほうが楽だったかもしれないですね。

「うーん、さすが京都ね。寺にある店でもうどんがおいしいわ。」

「……コクツ……。」

「ここで食べるからっていうのもあるんじゃないかな？」

ああ、もう疲れましたよ。3・Aの皆さんのパワーは物凄いですね。ほう、千鶴さんに夏美さんそれにザジさんはお昼ですか、いいですね。えっ、ボクの方もあるって……あ、おいしいじゃなくて！「……？。」そんな顔をされても勝手に行動されるのは困りますから！ちよつと、皆さんと呼んできます。

++++

嵐山、今日からはこの旅館でお世話になるそうで、色々ご迷惑をかけそうで今から先が思いやられますね。

「ネギ先生、教員は生徒よりも早い入浴時間ですから気をつけてくださいね。私たち女性教員の入浴時間がそろそろで終わりますのでちゃんと入ってくださいね。」

「はい、わかりました。あとしずね先生、お風呂入るのを嫌がるほど子供ではありませんよ。」

「うふふ、それでは失礼します。」

すっごい微笑ましいものを見るかのように颯爽と去っていったしずな先生、いやいいんだけどね、別に子供扱いされてもね。・・・お風呂入ろつと。

はい、入ってきましたよ。念を押しておいた御蔭で刹那さんが来ることもありませんでした。おやつ、これは・・・式神返しの札が貼られてますね。刹那さんでしょうね、さてボクが外に出ない今天ヶ崎さんらはどう動きますかね。正面から強引に？それはないでしょう。なら何とかして結界を誤魔化す？・・・クフフ、ボクはノコノコやってきた所を潰させて貰いましょうか。先に認識障害を使つてと。

「【シュブ・ニグラ シュマ・ゴラス 永劫を経るものよ 墳墓の怪を統べし旧きものよ 生きとし生けるもの全てを映し出せ ナグの鏡】」

範囲を刹那さんの結界内に絞つてと・・・居ませんね。刹那さんはコノカさんと話せてるようですし、適度に緊張感を持ってこの分なら不覚は取らないでしょう。ふんふん？龍宮さんがこつちに手を振ってきた、流石に鋭いですね。

ちよつと範囲を広げましょうか、旅館の周囲には・・・あ、いた。

天ヶ崎さんが露天風呂に待機してますね、ほって置いても刹那さんが対処するでしょうからスルーですね。・・・多分天ヶ崎さんの様子を見てる人が居るはずなんですけど・・・かなり離れたところにいますね。

「泳がせますか、でも【シユブ・ニグラ シユマ・ゴラス 彼方の闇より出でし暗きものども 旧き盟約に従い 仇なすものを我が使徒と為せ 黒き夢】先手は打たせて貰いますよ」

ボクが反近衛派の工作員と思われる人物達（3人）の精神を操ることで相手の状況が筒抜けになり、不意を突かれる事は少なくなつた。この魔法は此方が命令するまで普段通りに動くので気づかれることは無いはず、気づかれたら他に手を打とう。

赴任から2ヶ月余りではさすがに厳しいものがあります（後書き）

自動車の運転は楽しいけど疲れる、作者です。私も修学旅行で清水寺に行きましたよ、地主神社は見ただけですが、音羽の滝は飲みました。健康の奴です。あと今回出てきたうどんですが、作者が食べて普通に美味しかったので書きちゃいました。清水の舞台を見上げながら食べるのはいいですよ。それではさようなら

Easy work only of seeing

『今日のチャチャゼロ!!』

オハコンバンチワ〜ダゼ。ミンナ元気力？オレは本編で出番が無いから暇ダゼ。

サテ今日の話題は『妖怪になった神様』だったナ。

昔、柳田國男って人がいたんだぜ。この人は明治時代の学者で「日本人とはなにか」をテーマに、日本の民衆文化を研究する「民俗学」を確立した（一部で）結構有名な人ダゼ。柳田は妖怪をこう定義したんだ「かつて神だった存在（地方神）が信仰されなくなり、低級（妖怪）になったもの」

この説は間違っていないんだが、これじゃ説明できない妖怪が前に紹介した連中ダゼ。ソレト变化した例を挙げるなら、山姥（山の神またはそれに仕える巫女）とか海坊主（海の神や竜神伝承）ダナ。あいつらが幻想郷に来たのもこれが理由かもナ。

・・・チョット短い気がするから日本画の話をスルゼ。昔の日本画の女性って基本的に「超長髪、麻呂眉、ふとましい」ダ。ナンカ美人？って感じたが、色々という意味があるんだぜ。ふとましいのは、当時それが富の象徴でふくよかなほうがいい子供を産むらしいという理由ガナ。

そんなことより作者がテレビを見ていたことダ。あるテレビ番組で「この絵は現在の漫画のようにデフォルトして描かれたも

「なんだネギの奴、楽しくやってるみたいじゃないか、それよりうちのアーニヤはどうですか？」

「アーニヤくんは……」

学園長の話を聞いたカモはこう考えた。

兄貴は生徒と上手くやってる 教師なので生徒を守る 生徒が大
事 関東魔法協会と関西呪術協会の不和 生徒を守るため兄貴が危
険 味方が必要！

「兄貴……！！」

「……どうしたんじゃ、これは？」

「ふむ、ほおって措こうじゃないか。それよりもだが、本気なのか？ネギはウチのアーニヤの婿だぞ。」

「ふおおおお、まだ決まってるじゃないんじゃろ？ならウチのコノ力が付け入る隙は十分にあるわい、それにウチのコノ力は器量よし、奥ゆかしくて気配りもきくい子じゃ。」

二人の会話を聞いたカモはこう考えた。

自分だけでは力不足 兄貴には味方が必要 兄貴に相応しい嫁なら助けられる！？ アーニヤは○、コノ力は良く知らない 兄貴に相応しいか自分が見極めるべき 今すぐ行きますぜ、兄貴！！

カモの小さな脳は空回り気味だった。

++++

・・・なにか嫌な予感がしましたね。それよりコノカさん達ですね、ナグの鏡で見ていた所、式神のサルが攫いに来ましたが刹那さんが難なく撃退し、一緒に居たアスナさんやアーニヤに事情を話したようです。

「つまりコノカは、その立場と生まれ持った魔力量故に狙われるわけね。（極東一の魔力って言われてもピンとこないわね。）」

「そうです、そのためにコノカお嬢様の護衛として私がマホラに来たのですが・・・学園長も何故わざわざお嬢様を危険な目に遭わせるのかわかりません。」

「桜咲さんを信頼してというわけでは無さそうね・・・面倒だし、コノカさんに魔法のこと言っただろうが安全じゃない？（ネギなら事態を全部把握してそうね、後で聞きにいこつと。）」

「なっ！」

どうやら、学園長は刹那さんにそれほど事情を話していないようです。それにしてもアーニヤはスッパリと切りますね。狙われている本人に事情を話して危機感を持って貰い、危険な行動を抑制できて護衛もしやすい、その判断は間違いじゃないですよ。

「長はお嬢様に魔法に係わらせたくない・・・。」

「魔法に係わらせたくないってのは親の我がままでしょ？子供のために思うならきちんと話して身を守る方法とかせめて護衛されて

るという意識を持ったほうが断然いいわよ。第一に係わる係わらないはコノカさんが決めることよ。」

「そうですね・・・明日お嬢様に話したいと思います。」

およ？なんだか素直に受け入れましたね、刹那さんも話したほうがいいと思ってたんですね。そんなことより結界に侵入されましたよ。そろそろ、刹那さん達も気づきますかね？まったく新田先生もタバコ吸うためにわざわざ外に行かなくてもいいと思うんですが・・・刹那さんのお手並み拝見といきますか。

「そういえばコノカは？」

「お嬢様ならトイレに・・・この気配はっ！」

「まさかっ！コノカさん、開けてください！」

『入つとりますえ〜。』

「お札が喋ってる！」

「やられたっ！私は追います。神楽坂さんはネギ先生に連絡して下さい！」

「私も行くわ！アスナはネギを探して置いてね！」

「ええー！！ちよつと待ってよ！」

おや、アスナさんが出遅れましたね。ほっとくのもなんですし、持って行きますか。サツサと二人を追わないといいところが見れな

いかな？クフフ、昔を思い出しますよ。

「アスナさん、どうしたんですか？」

「あつ、いいところに！それがコノカが誘拐されて大変なのよ。」

「そうですか。」

「そうですかって、あんだねっ、キャ！なにすんのよ！（どうせされるんだったら、高畑先生が良かった！）」

みんな大好きお姫様抱っこですけど、ボクの身長じゃ不恰好ですね。ま、いいです。それじゃ、窓から出て、空を走って急ぎましょうか。

「急ぎますから放さないでくださいね。それともここに残ります？」

「それこそ冗談じゃないわ！・・・そこ窓なんだけど！」

アスナさんを抱えたまま、虚空瞬動で空を駆けます。いやー、夜風が気持ちいいですね。下のほうで刹那さんとアーニヤが走ってますね、その先には駅に駆け込んだおサルのキグルミの姿が見えます。

よっと発進した電車の上に乗ってと、中の様子を窺うと《ゴパー》冷たい！顔に水が・・・くっ、電車のドアの隙間から洩れ出た水が勢いよくボクの顔にかかってきました。

ん？中から音が・・・うわぁ、いいのかな。どうやら刹那さんがおサルに水攻めをされたところ、斬空閃で巻き添えにしたようです。

ね。電車のドアから水がどんどん出てくるな。降りますよ、アスナさんって気絶してる？・・・ちよっと生身には虚空瞬動の動きは無理があつたようですね。

「ハアハア、み、見たかそのデカ猿女。ケホッ、お嬢様を返せ！」

「なかなか、やりますなあ。しかしコノカお嬢様は返しませへんえ！」

「待てっ！」「アーニヤアブウストオオナツコオオオウ！！」つてえっ！」

「速いっ！善鬼！護鬼！（やばいやばい、間にあえー！！）」

アーニヤの瞬動からの炎を纏った重いのを二人がかりで受け止めましたね。アーニヤの瞬動はタカミチの居合い拳を潜るくらい早いんですがね、あの人相当な実力を持っていますね。

「ふう、三枚目いきますえ？お札さん、お札さんウチを逃がしておくれやす。」

「させるか！斬鉄閃！」

「無駄です！【三枚符術京都大文字焼き】！」

刹那さんの螺旋をえがく気の斬撃は強大な火の壁に遮られてしまった。逃げながら足止めに符術を敷き、二対一でも有利に戦況を運ぶか。いい動きをしますね、でもアーニヤに炎を使うのは悪手ですよ。

「あんたら邪魔よ！【フォルテス・ラ・ティウス リリス・リリオス 火精よ 集まり弾ける プラストボム】！！」

天ヶ崎さんの火炎がアーニヤの頭上に集まり、幾つもの火球になり、善鬼護鬼そして天ヶ崎に向かって打ち込まれた。アーニヤの足止めをしていた善鬼護鬼はどちらもぶつとばされる。

「えい、百花繚乱！！」

しかし天ヶ崎に放たれた火球は突然乱入してきた少女に全て打ち落とされてしまった。身のこなし、技のキレ、刹那さんに劣らない腕の持ち主、確か彼女は月詠だったかな。あ、こつちを見た、手を振っておこつ。

「どうもー神鳴流ですー、おはつにー。 (えーと、こつちを睨んでる人に、なんかきよろきよろしてる人、隠れて見てる人、全部敵ですかー?)」

「貴様が神鳴流だと・・・ (見かけはこんなのだが、動きは本物だ、それに持つてる武器は小回りの効く二刀か、厄介だな。)」

「見たとこあなたは神鳴流の先輩さんみたいですわー、でも護衛に雇われたからには本気でいかせてもらいますわー。」

「しっ！斬岩剣！」

「斬ー岩ー剣ー、あーびっくりしたわー。(久々に強い人ですわー、でもこつちを見てる人の方が数段上ですー。)」

刹那さんの恐ろしく速い踏み込みからの斬岩剣は月詠の斬岩剣で相殺された。明らかに月詠は人とやり慣れた動きをしている。言葉では驚いたといっているけど、眼は冷たく見据えている。

「（あつちの魔法を使う子や見てる人がきたら押さえ切れませんね。）千草さん、その子おいて引きますよ。」

「・・・なんでや？ここままだら逃げきれんやろ。」

「こつちを見てる人がおるんです。」

「ちつ！ほんまやな？（見てる奴？敵か、それとも・・・。）」

「死にたいなら付き合いますえ。（やったら楽しそうです。）」

「（月詠はんがそこまでいうなら引くしかあらへん！）しゃあない！お嬢さん方、ここは引かせて貰うわ！ほな、さいなら。」

「待て！・・・クソ逃げられたか。」

月詠が乱入してから沈黙状態だった、アーニヤがこつちを見た。多分、月詠がこつちを見たから気づいたのだろっね。とりあえずアスナさんを起こしてコノカさんの様子を見に行こうかな。

Easy work only of seeing (後書き)

ニユースにて「TPP加入のデメリット、（北海道の）農家の7割（三万戸）に影響します」

吹きました 幾らマイルドに言っても（嘘でも本当でも）デメリットがやばすぎでしょう。しかも北海道の話しかしてなかったんで日本全体でどれだけなんだよ、農業以外は？とか考えてたら眠たくなりました。

小休止

『今日のチャチャゼロ!』

みんなオレダゼ！テンション高けーナツテ？詳しくは本編デナ。
サテ今日は「前鬼と後鬼」ダゼ、やっと本編に関係ある話題にナ
ツテ良かったぜ。マズ最初に陰陽術者が従えテタ「前鬼」と「後鬼」
ダガ、えんのおつぬ実は、修験道の開祖とされている役小角の護法童子ダゼ。

護法童子ツテノハ、主人に仕えて身の回りの世話をする陰陽道の式神のような存在デ、密教や修験道では、陰陽道の式神が生まれる以前から活用されテタツテ話しダ。ちなみに、前鬼と後鬼は夫婦という設定で、前鬼が夫で、後鬼が妻ナンダゼ。この護法童子、元々は小角と同じ山岳修験者ダツタらしいゼ。

とまあコンナ感じダナ、役小角が修行してい夕所は葛城山は朝廷に敵対した土着民（土蜘蛛と呼ばれる）の本拠地として有名な場所だったんだぜ。だから役小角を朝廷に敗れた土着民の象徴として自分達の開祖に持ち上げた結果、彼と共にいた仲間が鬼として扱われたようダゼ。

マ、うちの小説だと普通に妖怪又はモンスターだから気にしなくて大丈夫だぜ。ジャアアリーデヴェルチ！本編とコーナーに出ないといけないのがオレの辛いところだぜ。

[illegible]

現在、ボクはアスナさん達とロビーにいます。何故いるのかというところ、コノカさんに魔法バレをするのと、ボクに事態の全容を聞くためです。っと今、刹那さんが話し終わったみたいですね。

「魔法・・・先生も使えるん？」

「まだまだ未熟ですけどね。」

「あんたが未熟なら私はひよこね。」

いやいや、そんなことないと思いますよ。実際、基礎や応用こそ勝ってますけど、瞬間火力は遥かに負けていますし、ボクは強力な攻撃魔法を殆ど習得していませんからね。

「あれでひよっこ・・・世界は広いですね。私も頑張らねばなりませんね。」

「それでどうなってるのよ。」

さてさて、どこまで話せばいいですかね。やっぱり大人の暗い話しより、ボクが密書を関西の長に渡しに行くでいいですよ。ボクとコノカさんが困でその隙に組織の清浄化を図るのは言わないでいいとして、少し相手の情報はいつておきましようか。

「それはですね、実はボク、学園長から関西呪術協会に密書を届ける任を与えられたんですよ。つまり相手はボクの密書とコノカさんの身柄を確保しようと動いてるんです。」

「密書ですか？」

「密書には関西と関東の仲を改善しようという公式な意味があります。しかし和解を良しとしない関西の過激派が妨害してきます、つまり敵は関西の過激派ですね。ボクが知ってるのは異常です。それでは明日も早いですから寝坊しないよう気をつけてくださいね。」

「あ、うん お休み ネギ。」

「先生も寝坊したらあかんで！」

「・・・お休みなさい、ネギ先生。」

「アーニヤちゃんどしたん？」

「なんでもないわ、お休み ネギ。」

アーニヤが少し怪しんでますけど、彼女は思慮深いですから迂闊に不安を煽る真似はしないでしよう。でも刹那さんには相談するかな？刹那さんも何か考えてるみたいでしたし、自分の考えをまとめるために相談するのもいいでしょうね。うん、アーニヤに刹那さんそれとアスナさんがいれば、コノカさんの守りは大体大丈夫ですね。

さてと明日は動きを見せますかね。

++++

修学旅行二日目

クフフ、朝風呂はいいですね。露天でみる朝陽は格別、あゝこの

体が子供のものではなかったらと思うと悔しくてしょうがないです。残念ですが風呂上りの牛乳で勘弁してあげましょう。

さっさと着替えてと・・・さあ、朝ごはんですね。うんうん、皆さん揃ってますね。でも学年で集まるとウチのクラスは私語が多いですね。罰ゲームがまだぬるかかったみたいです、この修学旅行が終わったら楽しみです。・・・なんか一気に静かになりましたね。

「それでは麻帆良中のみなさん！いただきます！」

『いただきます！！！』

うん、美味しい。しかし一体どうやってこのカツオのタタキはこんなにあっさりとさせてるんでしょう？このアサリとワカメの味噌汁もいい塩梅で、煮物もお出汁がきいててたけのこの旨みが生きてますね。

「せつちゃん！一緒に食べよう！」

「お、お嬢様 そんなにくつつかなくても！」

「あ、あの アスナさん！隣りいいですか？」

「えっ、いいけど。」

さすが京都、漬物が美味しいです。ただ残念なのはボクは京壬生菜の浅漬けよりしば漬けの方が好きなんですよね。でも止められない美味しさです。

「さすがに女子中だね、百合の香りが・・・。」

「のどか・・・（応援するですけど同性はどうかと思うです。）」

「バカばっかだ。」

+++++

二日目の自由時間、ウチのクラスの生徒（まき絵さんやアヤカさん、エヴァ）と一緒に回らないかと声を掛けられましたが、一つのグループだけじゃなくて他も見回らないといけないといい華麗に口撃をスルーした後、チャチャゼ口からの定時連絡を待つ。

『ケケケ、御主人 昨日の連中の親玉が分かったぜ。ドウスルやっちまう力？』

「いやいい、それは関西に任せることにする。さよの方はどうなつた？」

『つまんねえナ、さよナラヨ 人ひとり呪い殺せるくらいにはなつたぜ。御主人も大概ヒドイ奴ダぜ、自分を慕ってる奴を怨霊化させるなんてヨ。』

「クフ、ボクを慕ってるからこそだよ。ま、そう仕向けたのもボクだけだね。じゃあ、また次の報告まで待ってるよ。」

『チョット待った、酒買っていい力？』

「・・・好きにしなよ。」

『ケケケ、マッテロヨ地酒!』

全く自分の欲望に忠実な奴だよ、さよも順調に育ってきてるみたいだね。やっぱりチャチャゼロに憑かせて正解だったね、人の最後と強烈な負の感情がダイレクトで受けるからかな？

あとは学園長を経由して関西に情報を流したら観光でしよう、勿論周りを警戒しながらだけだね。

++++

おかしい！この写真もつ、この写真もあれもこれも、全部おかしい！なんで気づかなかったんだろ？絡繰さんは明らかにロボットだし、この中等部の後輩の子は空を飛んでる！麻帆良にいたときは全然これが変だと感じなかったけど・・・絶対変！

「朝倉さん、行きますわよ？」

「分かってるって！」

「・・・。」

メモメモっと、異常に気づかない異常っと、さてといいんちようにこれ以上どやされる前に行かないとね。いいんちよに近づくと奈良公園で村上が鹿に追いかけられていた。なにやってんだか・・・とりあえずいい顔してるから撮ろう。

「うわあー！！鹿怖えー！！」

「あらあら、夏美ちゃんはしたないわよ。」

「うう、鹿せんべいを奪いにくるとか……。」

「あはは、災難だったね。レイニーデイさんは普通に手渡しで餌を渡してるけどね。」

「なんで……。グスン」

村上の時のように周囲を取り囲んで追い回さないで順番に並んで鹿せんべいを貰ってる。絵になるからいいけど、これも少し変な光景だよね？周りの観光客も奪われてるのに、レイニーデイさんにだけ大人しくなる鹿か……。他にもなんかないか探そうっと。

なんだアレ？なんか落ち込んでる本屋ちゃんを慰めてる集団？なにかあったのかな。

「のどか元気です。」

「そうそう、アスナが高畑先生が好きってのは公然の秘密だからさ。断られてもしようがないって！それよりネギ先生とかどう？結構、のどか話せてるじゃん。」

「……うん。」

なにやら面白そうな雰囲気だね。那波さんもニコニコしてるし、多少焚きつけても大丈夫だね。よしそうなら、引っ掻き回そう！大体、怪しいのよね。高畑先生ってよく出張するし、去年と

かなにもしてないのに吹っ飛んでる人みたしね。

「そんな本屋ちゃんに朗報だよ、この前、源先生と食事してる高畑先生をみたよ。どうもアスナの恋は実りそうじゃないね。」

「（余計なことをするなですっ！）」

「（くっ、いちいち本のネタになる話はやめて欲しい！描きたくないじゃない！でも友達の恋路を描くなんてこと・・・そんな最低なこと・・・外見変えれば大丈夫？）」

「・・・私、もう一度アスナさんの所にいつてくる。」

おー、走ってったね。頑張れ恋する乙女、そして何か面白そうな展開にならないかな？さてと・・・うわお、那波さんが怖い。その笑顔が怖い。

「和美ちゃん、駄目よそんなことしちゃ。」

えっ、ま、待って いやっ放して下さいっちょっあー！

++++

ふう、チャチャゼロに食べさせたい鹿せんべい買ったら鹿が襲い掛かってきましたよ。奈良ってすごい所なんですね、おや？のどかさんが・・・横を走り去っていききましたね。どうしたんでしょう？次は千鶴にひきづられてる和美さんが居ますね。相変わらず3-Aの生徒は力オスです。

小休止（後書き）

さよ怨霊化！でも無差別に攻撃しないので祟り神？とかそんなかんじです。

ラブコメ(ラブクラフト・コメディ)

『今日のチャチャゼロ!!』

ミンナ久しぶりダナ!いつもの二倍遅れたケド、二倍書いたからユルセ。

ジャア、今回の話は「クトゥール神話」ダゼ

クトゥール神話の始まりは、20世紀初頭の、米国、プロヴィデンス出身の怪奇小説作家、ハワード・フィリップス・ラヴクラフトダゼ。彼は自分の一連の作品(短編集になってるぜ)中で、極めて独創的で魅力的な設定、背景を使用する事により、宇宙全体に於ける、人類の儚さを示す一つの世界を創り出したこれが全ての元凶ダゼ。

彼とその友人、彼に影響された作家達により、悠久の太古より存在する禁断の存在、外宇宙や地底、深海に蠢く奇怪な種族、復活を待ち望む異質で強大な邪神達やその崇拜者等を擁する背景世界が出来ていったぜ。

デモナ ラヴクラフトの死後、これらの作品は急速に衰退していったぜ。忘れ去られようとしていた神話に救ったのがラヴクラフトの弟子であったオーガスト・ダーレスダゼ。ダーレスは出版社「アーカム・ハウス」を設立し、生前はほとんど出版されなかったラヴクラフトの作品の単行本を出版すると共に、新しい作品を書いていった。新たな神話創造の際に、彼は神話体系の変革を行ったんだぜ。

ラヴクラフトの創った神話は非常に謎めいた部分、不明瞭な部分

が多く、登場する神格についても明確な位置づけがなされていないものが多くテナ。ダールスは、登場する邪神を「旧支配者（Gre at Old Ones）」として、人類や現在の宇宙に敵対する存在とし、原初の宇宙の創造者であり、人類に友好的な立場にある神々を「旧神（Elder Gods）」として、「旧支配者」の創造者であり敵対者であると位置づけた。

要するに、ラヴクラフトの神話を、人間の観点から善悪二元論で捉え直した訳だ。他にも属性ごとに旧支配者たちを体系化したりしたんだぜ。

ラヴクラフトの神話を書き換えたということで、一部のクトウル
ー・ファンの間ではダーレスは受けが悪いが、デモ、クトウルー神
話をここまで広めたのは彼の功績ダシヨ、この「クトウルー神話」
の形態も既に多くの作品に持ち込まれてカラ、一方的に悪いとは言
えないぜ。

現在はこのクトウルの設定を使ったりしたゲーム、漫画、小説が出てるぜ、少し疑問があるんだが、イカ娘は見ようによつてはクトウルー系に分類できそうじゃないか？

ソレジャ、またナ。

[illegible]

クツクツク、見つけた。これが大仏が金ぴかだったときの名残か、前にテレビで見てから気になっていたんだ。本来の色は全身金色で

髪が青か・・・派手だな、仏の癖に。全くワビサビというのが分かってないな、やっぱり東山文化からだな。

『ゼー』

「なんだチャチャゼロか、今忙しいから手短にな。」

『ドウヤラ、ご主人は関西には興味ないらしいぜ。あとサヨに気をつけた方がイイぜ。』

「前は分かるが後ろはどういうことだ？所詮ただの浮幽霊じゃないか。」

『ケケケ、これが傑作デヨ。御主人はサヨを祟り神にでもするつもりダゼ、しかもだサヨが貰った契約カードは【憑キ御霊ノ石】っていうぜ。』

「能力は分かるか？」

『アア、効果能力は魂の操作ダツテ言ってたぜ』

「そうか・・・ふむ、他になにかあるか？」

『ゼー！』

無いのか、それにしても魂の操作か・・・偶然にしても出来すぎているな、幽霊にその能力 誰かに成り代わってもおかしくはあるまい、チャチャゼロにこの情報を与えたということは私を敵に回す気は毛ほどもないわけか。しかしな祟り神は貴様に御しきれるかな？

++++

三日目の朝、昨日の夜は皆さんが枕投げやら猥談をしていた所、騒ぎを聞きつけた新田先生に怒られていました。ボクはもつときちんと指導するよう言われてしまいました。それ以外はたいして問題はありませんでした。和美さんはサイフが寒くなったとか嘆いていましたけど、無駄遣いは感心しませんね。

「ネギ先生、おはようございます。」

「おはようございます、刹那さん昨日は大変そうでしたね。」

「ええ、このちゃ・・・お嬢様に強引に連れまわされてしまいました」

口では困った感じですけど、頬が緩んでいますよ。

「それで何か御用ですか？」

「オン！」

「じゃん！ちびせつなです！」

これは式神ですね。いやはや、こんなにミニマムな刹那さんですか。

「……………もしもの時の連絡用に渡そうと思ひまして」

「ええ、わかりました。では問題が起きましたら連絡してくださいね。」

「なんですか？本体のその眼は！」

「コノカさんの護衛気をつけてくださいね。アーニヤがついて行くと思うので多分大丈夫でしょうけど。」

「ネギ先生も油断なさないよう」

「無視ですか！」

さつさと西の長のところに行つて、刹那さんたちが来るのを待ちましょうか。

++++

わたし、ちびせつなは　ねぎ先生と関西呪術協会の本拠地に向かっているのですが、どうも先生は寄り道をしながら行くみたいです。速く向かわなくていいのでしょうか？

「はい、これどうぞ。」

「あ、ありがとうございますって！これ鹿せんべいじゃないですか！」

「クフフ、ごめんごめん。はい、こつちをあげるよ。」

これはみたらし団子！・・・もっちもっち、美味しいです。それにしても本体の方はこのちゃんに迫られて？あたふたしてますね。だからわたしの操作をしていないためにわたしは自律状態で活動してます。

「刹那さんたちの様子はどうですか？」

「うーん、楽しそうですね。今、ゲームセンターでアスナさんについてきた宮崎さんたちとカードゲームをしています・・・このちゃんとプリクラですか、羨ましいです。」

「そうですか、それは良かった。でも周りに敵影はありませんか？視線を感じたり、不審な人物を見かけたり。」

「うーん、今のところは無いですね。」

はう、ねぎ先生の顔があの時（春休み中にネギにボコられた）の顔になってます。怖いです ガタガタ

・・・はっ！わたしは何を・・・あれ？もうここまで来たんですか、じゃあ千本鳥居までスグですね。ムニツ

「はひゃう！」

「へえー、「やめっ！」人と同じで柔らかいんですね。なるほどなるほど、「くださっ！」ここの術式はこうなって、ほうほう・・・」「はふう・・・。」いやーご協力ありがとうございました、ちびせつなさん。」

「何をするんですか！！！」

「クフツ、まあいいじゃないですか。もう着いたみたいですよ。」

むむむ、まあ、みたらしに免じて見逃してあげます。・・・懐かしいですね、この千本鳥居。あれ？なんか変ですね。こんなに道が長かったですかね・・・もしやワナ！？

「その人出てきなさい、さもないと制圧しますよ。」

「ど、どこですか！？」

「ひゅー、こっちに気づくとは流石やな。でもここは通さへんで、ネギ・スプリングフィールド。」

「御託はいいので掛かってきて下さい。」

ねぎ先生を知ってる？ということは一単に西の過激派だけが敵じゃないようですね。この小学生くらいの少年が刺客ですか、足止めといったところでしょうが、姿を現すのは如何なものでしょう。

「じゃあ、いつくでっ！！」

速いっ！動きもそうですが手数も多いです。爪で引っ掻くように手を振るってきますね。あの年でこれほどの身のこなしですか、間違いなく才能は一流です。

「当たらへん！（クソツ、何でや！狙ったところに腕がうごかへん！）」

どうやらあの少年は誰かに師事したことは無いみたいですね。ね

ぎ先生の構え、あの左手を突き出す格好が彼の攻めを受け流しています。あの少年同様に気を腕に籠める 少しでも相手の攻撃を弾くくらいの気・・・それと後は純粋な技術で無力化しています。

「これならどやっ！斬狼拳！」

「へえ」

なんとかねぎ先生の後ろを取った少年が闘気を纏った腕を振ると、その腕から黒い影のような狼が先生に襲いかかりました。確かに近距離で人よりも大きく速い気での攻撃なら並みの人なら避けきれず、その一撃で勝ったかもしれません。

「虚空閃」

しかし気の練りが足りず、粗が目立ちます。ねぎ先生の余っていた方の手から出てきた鋭い気弾が狼の構成の薄い箇所にあたり、霧散させてしまいました。

「GYAAAA!!」

「千草の姉ちゃんの式神!？」

「おや？硬いですね。」

少年に当たるかと思った気弾は上から降ってきた大きな蜘蛛の式神が身代わりとなり、少年に当たることはありませんでした。ねぎ先生が驚いている隙に少年が距離を取りました。

「そや、オレは足止めや。遊んでる場合ちゃう、全力で行くでっ

！狗族獣化、疾空黒狼牙！」

「狗族！？先生、気をつけてください！彼は人狼の血を引くものです！」

不味い狼、いや狗神の群れに混じり獣化した少年が姿を消す、ねぎ先生を取り囲んだ狗神はほぼ同時に四方八方から襲い掛かる。ねぎ先生は絶妙な身のこなしで狗神たちの中を動き、一匹一匹仕留めていきます。

「群狼旋空拳！」

狗神の群れに紛れ、低い体勢から群れと一緒に少年が突撃してきました。ですがねぎ先生には・・・分身！？狗神たちの影から五人の少年が飛び掛かる！

しかしねぎ先生は全く動じず、次々に沈めていきます。三、四・・・五体目！これも分身、本物は何処に！？

「（静かに影を使ってネギの背後に転移して・・・貰ろうたでっ！狼牙双掌牙！）」

「ねぎ先生！！！」

ねぎ先生の背後の影からスツと出てきた少年が両手に狗神を宿して、両手からの気弾を放ってきました。危な・・・い？攻撃したはずの少年が宙に浮いて、ねぎ先生の頭上に

「クフフ、君は中々優秀な戦士でしたよ。君に敬意を払ってボクのオリジナルで倒してあげましょう。」

「か、体がうごか・・・へんっ。」

「【シュブニ・グラ シュマ・ゴラス 吹き荒ぶ風 闇に吼える
獣 天を裂き地を削りし颪風 666の牙で食い破れ 闇の慟哭】」

これはっ！？冥い竜巻が少年を飲み込んで・・・いや弾かれた！
結界の術式が軋む音がする、先生の狙いは結界か！？あわわ！吸い
込まれるう。

《ガキーン》

甲高い金属音のようなものが響くと同時に、結界が破壊され元の
場所に戻る。

「・・・うん！我ながら絶妙な手加減でしたね。」

「何処がですかっ！わたしは死にかけたんですよ！」

「大丈夫ですよ、ほらモロに喰らったこの人も多少裂傷はありま
すけど死んでないでしょ？それに結界も一緒に壊せたしね。」

そういう問題じゃっ！っう 本体からの気が途絶える！？このま
まじゃ、先生に文句が言えない！

「おやおや、勝手に消えちゃいけませんよ。えい！」

「ええ！何をしたんですかっ？」

「ちびせつなさんが存在するための気をボクが賄っただけですよ。」

さつき式神の術式は見させて貰いましたから、このくらいなら即興でできます。」

「はあ、普通は他人の式の術式を固定するのは難しいというか、そんな発想はありませんでしたよ。やっぱり、すごい人なんですね。」

「それじゃ、サッサといって密書を渡してきましようか。」

「はい！行きましよう。」

「あ、ちよつとその前に・・・オン！」

先生は髪を数本抜くと呪文を唱え、ポンツという軽い音と一緒にちつちやいねぎ先生が現れました。これは式神、しかもですよ。札を用いずに造るなんて、羨ましいです。わたしはそんなに陰陽術は得意ではないので札を補助に使わないとできませんからね。でも髪を取られて呪われても知りませんよ？

「じゃ、君は刹那さんたちの様子を見てきてね。」

「了解。」

「口調が全然違います！」

わたしの言葉は二人に無視されて、ちびねぎ先生はかなりの速さで飛んでいきました。

「それでは関西の長のところに行きましようか。」

「は、はい行きましよう！」

久方ぶりの協会の総本山はときがとまったように変わりないようであったが、いつもなら詰めているはずの人が出払っているみたいでした。

巫女服の女性に連れられて着いた先は、広い座敷でどうやら少し長を待たねばいけないようです。

「お待たせいたしました、関東魔法協会からの使者殿、私が関西呪術協会の長を勤めています。近衛詠瞬です。」

「これはご丁寧に麻帆良学園教師をしています。ネギ・スプリングフィールドです。早速ですが、これをどうぞ。」

「東からの親書ですね、わかりました。では私は仕事を立て込んでおりますので、案内には、その刹那くんの式神をつけますのでゆっくりしてってください。」

「わたしがですか、分かりました。ねぎ先生こっちです。」

長と先生の用は数分で終わってしまい、わたしはねぎ先生をこの総本山を案内するように命じられてしまいました。どこに案内すればいいのでしょうか？

「あのねぎ先生、どこにいつて見たいですか？あ、でも書庫は無理ですし、長の執務室や術師の部屋も立ち入りはできませんよ。」

「そうですね、お風呂でも入りましょうか。」

「へえ？」

++++

ミッション開始、任務内容はターゲット桜咲刹那及びその他の人物のところに行くこと。現在、時速60キロのペースで移動中、ターゲットがいると思われるシネマ村までおよそ35分。

見えました、ターゲット桜咲刹那、神楽坂アスナ、近衛コノカ、アンナ・コロウア他数名を確認。現在戦闘中の模様・・・ミッションの更新を確認しました。ミッション・ターゲットの安全確保。

桜咲刹那と月詠の戦闘は拮抗、アンナ、アスナの両名は敵の式神の排除をしている模様。近衛コノカは式神を排除している二人に挟まれるように守られている。この状況から見て起こるえる事象は
1、ここの従業員の介入による決着 2、敵増援の参入 3、第三者の介入の三種に設定、現状維持を選択。

魔力反応を感知、位置は近衛コノカの半径1M、予測番号2番に絞りこみターゲットの安全確保を行います。

「さて一緒に来てもらうよ。」

「ほえ？」

「手伝ってあげましょうか？ただし真っ二つです。」

近衛コノカに接触しようとした白髪の少年、フェイト・アーウェルリンクスと目される人物を排除します。本体からの魔力供給を増加戦闘モードに移行します。なお一般人の目がある為視認し難い魔法を選択、風属性魔法【碧き疾風】を無詠唱で発動、本来の出力の40パーセントを確認、敵対象が回避に移行しました。上空に上がった敵を追撃します。

魔力の物質化により近接戦闘を可能にし、白兵戦に持ち込みます。数え抜き手4321、敵対象に無力化されました。対象の動きの癖から八卦掌の使い手と予想し、攻撃に対応します。

「っ！？ボクの技が効かないっ、ヴィシュ・タル リ・シユタル
ヴァンゲイト 【石の息吹】！」

石の息吹の発動の確認、式神であるため効果無しと判断します。さらに魔法供給の増加、風精召喚及び精霊の取り込みによる一時的速度の上昇を確認、下腿部に魔力を集中し、虚空瞬動の使用を準備します。

「君は式かつ！？」

敵対象の防御体勢への移行を確認、敵対象の障壁の出力が140パーセント上昇、上級魔法以下の出力では突破不可能と判断します。羅刹拳を選択、虚空瞬動を発動、障壁をブチ破ります。

「不味いつ！？【石の楯】！」

敵対象の障壁、魔法作用による魔物質の盾を貫通、対象にダメージを与えました。しかし致命傷では無かったらしく撤退していきま

戦闘モードを終了します。ミッションコンプリート、帰還します。

「ちよっとそのちっさいネギ！降りてきなさい！」

「了解、何か御用ですか。」

ミッションを更新します。

ターゲットアスナはなにやら言葉に詰まった様子、此方に近づいてきた刹那に視点を変えます。

「現在、この身には認識障害が掛かっていますので、人影の無い所を進めます。」

「え、ああ、そうですね。アスナさん、お嬢様、アーニヤさん行きましょう。」

人気のないところへ誘導します。ターゲットコノカの興味の視線を認識、無視します。ターゲットたちの様子から現在の状況、本体の居場所、これからの活動を提案させていただきます。

「現在敵勢力を4人確認しました（他の西の過激派は関西が相手をするようなので除外）陰陽術師、神鳴流剣士、狗族戦士、八卦掌の術者です。次に本体の現在地を報告します。現在、関西呪術協会総本山にあります。次に貴方達のこれからの行動についてですが、本体との合流、麻帆良への帰還をお勧めします。」

「あんたはネギのえつと・・・式神なのよね？」

「その通りです、アスナ。」

「刹那さん、ネギと合流しましょう。」

「そうですね、先生も目的を果たして狙われないでしょうし、これ以上は対処しきれません。一旦合流した方がいいですね、関西との協力も期待出来そうです。」

ミッションを更新します。ターゲットの護衛、目的地は本体の場所まで。

「それではネギ先生に連絡を・・・あうあうあう」

「どうしたの刹那さん！」

「せつちゃん、どしたん？」

どうやら式神とリンクしたようですが、なにか問題があったんでしょうか？

ひたすら旗が立つ話

『今日のチャチャゼロ!!!』

ミンナ、オレダゼ。今回は前回に引き続きクトウルフ系で行くぜ。今回は「ツアトウグア」ダゼ！エツ、ソコハ「クトウル」だろ」Kって？一番好きな旧神だからショウガナイゼ。

クトウルー神話中で一定の地位を占めるこの神ハナ、クラーク・アーシュトン・スミスによって創作された奴ダゼ。スミスはツアトウグアの生い立ち等の細かい設定作りや肉付けまで行ってるぜ。

アザトース（創造神）の子であるクグサクスクルス（アザトースの分裂繁殖体 両性具有）より生み出されたギズグス（クトウルー、フジウルクオイグムズハーと兄弟）と、分裂繁殖する生物イクナグンニススズより生まれたズストウルゼームグニ（女性格）の間に生まれた子がツアトウグアである。つまりクトウルーの甥でアザトースの曾孫ダナ、スゲエゼ。

彼らは一族で遙かな宇宙の彼方から太陽系に飛来してユゴス（冥王星）に移り住んだぜ。しかし、クグサクスクルスは人肉嗜食（多分、自分と同じ神性をもつ者ダロウナ）の性質を持っていたため、フジウルクオイグムズハー（叔父）は惑星ヤクシュ（海王星）、次いでサイクラノーシュ（土星）に移り住み、ツアトウグアは両親と共に、クグサクスクルスの破壊を免れた洞窟に長きに渡って潜んだぜ。つまりだ、祖父に喰われないように逃げたってことナンダゼ。

クグサクスクルスはユゴスに住み続けたが、やがてツアトウグア

はフジウルクオイグムンズハーのずっと後にサイクラノーシュ（土星）に渡り、地球が出来た頃に別次元を経由して暗黒の地下世界、ンカイに現れた（別次元を通るには闇が必要らしいぜ、エヴァの影を媒体とする転移魔法みたいな感じダナ）。

地球に居を移したツアトウグアは、ンカイの上にある赤く輝く地下世界ヨトの『ヨト写本』に言及され、青く輝く地下世界クン・ヤンで崇拜されタゼ。

北極に古代文明ヒューペルボリアが栄えていた頃は地表近くまで移動し、首都コモリオムに程近いエイグロフ山脈、ヴァミタドレス山の地下の洞窟に棲んで、ヴァミ族や一部の人間に崇拜されていたヒューペルボリアに於いては邪教として禁止されていたにも関わらず、末期にはツアトウグア崇拜が大流行する。

ツアトウグアの崇拜者であった魔導師エイボンの遺した『エイボンの書』はもちろん、ロマルルの『ナコト写本』などでもツアトウグアのことを語られてルゼ。

やがて氷河期が訪れ、ヒューペルボリアは滅亡し、ツアトウグアは再びンカイに戻った。

シャタク（妻）という来歴不明の神性との間にズグウィルポググーアという子を設けており、その子スファティクルプがヴァミとの間に産み落としたのがクニガティン・ザウムだともいわれている。見事にリア充ダゼ。

ツアトウグアは不定形で可塑性の体を持つと言われてルゼ。人間には全身を覆う柔毛に、蝙蝠に似た顔、ナマケモノを思わせる胴体、細い目を持つ太鼓腹の蝦蟇に似た姿をしてるらしいぜ。

人間には怠惰とも思える行動原理に従ってイテ、空腹の時でもじっと動かずに獲物、あるいは生贄を待ち続けルゼ。満腹の時は人間

と出会っても穏やかで中立的な態度を取るから話せば、分かるぜ。

クハーー！！イイゼ！カワイイゼ！なんというか、オレの萌えポイントのど真ん中ダゼ！ジャア、また今度ナ！

[illegible]

兄貴を探して京都にやって来たのはいいんだが、クリスの爺さんが京土産を買いたいつつて一日がおわつちまった。んでだ、兄貴の宿泊先に着いたんだが、もう出ちまつててよ。クリスの爺さんはまた夜にでも行こうつつうんだがよ。

「（やっぱり兄貴の嫁候補は見ておかないとなっ！）」

「なーにを言ってるんだか……。」

「（クリスの爺さんもお孫さんに会いたいだろ？そしたらやっぱ兄貴と一緒にいるに決まってるぜ！）」

「・・・ま、好きにしたらいいだろう、それでカモよ。ネギたちの居場所は分かっているんだろ？」

うっ、二箇所兄貴の魔力反応があるんだが・・・あつ、この魔力に敏感なのはオコジヨ妖精特有のスキルだからその辺の魔法使いじゃ真似できねえぜ。こっちの近い方から行くとするか。えっと、太秦だったかな？

++++

シネマ村、さっきまでの喧騒が嘘のようにいつもの穏やかな空気に満たされていた。

「カモよ、どうじゃ？」

「（うん、近いぜ！兄貴は目立つからその辺の人に聞いたら誰か知ってると思うぜ。）」

「しょうがない・・・どれ、その綺麗なお嬢さん方、ちょっと人を探しているんだが・・・」

「（ゴクリッ、一切の躊躇無く話しかけにいったな、流石はクリスの爺さんだ、伊達にウェールズの怪人呼ばわりされてねえや。）」

なにやら相談している修学旅行生らしき女の子達に話しかけるクリスの爺さん、どうやらこの女の子達は兄貴の知り合いらしく、ネギ先生と呼んでいた。

「ふっふっふ、実はアスナの鞆のポケットにGPS付きの携帯を仕込んでおいたのさっ。」

「流石だっ、朝倉最低だっ！」

「そんなに褒めないでくれよ。」

うっむ、この朝倉とかいう女は人としては間違ってるがこつとしては助かるな、ある程度近づけば、詳細な場所が分かるからそれまで、一緒に向かうほうがいいな。それにしてもこの朝倉って奴は

常に周りを意識して、人の様子を窺ってるな。だから咄嗟に判断できると見た。

「なかなかいい根性をしているな、君の友達は。」

「恥ずかしいです。それで朝倉は私に何を見てもらいたいんですか？」

「あつそうそう、これだよ、前にゆえつちがなにやら私に噂とか聞いてきたじゃない？あの時は大したことは分らなかったんだけど、この写真・・・この隅のほうで人が飛んでるように見えないかな。」

「あちゃー、ドジな奴もいたもんだな。一般人にバツチり撮られるじゃねえか、マホラって所は結構そういうところ緩いな。」「このオコジョ、冬毛なんですね。」「ウェールズはまだ結構寒かったからね。」「うう、そんなにつかないでくれ、意外と痛いんだからな。」

「・・・・・・確かに人が杖に乗って飛んでいますね。」

「うわっ、ホントだ！でも朝倉ならこれくらい合成できそうだけだね。」

「失敬な！でも不思議なことにこれに気づいたのは修学旅行に来てからなんだよね。昨日の気分転換に新聞のネタをまとめてたから見つけてさ。」

「（よく撮れてるじゃないか、ちょっとピンボケしてるが、個人の特定は可能だな。こういう場合はどうしたものか、カモはどう思う??）」

「（うゝん、兄貴の生徒だから危ない目に遭わせるわけにはいかねえ、でもこれはマホラの落ち度だからこっちで判断するもの不味いし、やっぱ関係者の兄貴に相談したほうがいいと思うぜ。）」

クリスの爺さん、オレっちに聞いといて無視すんなよ。駄目だ、あの顔はなにか企んでる時の顔だ。すまねえ、兄貴なにも出来ないオレっちを許してくれ。

「あれ？アスナの動きが止まったみたい。」

「気づかれたかもしれないな。（カモ位置は大体把握できる位置まで近づけたか？）」

「（バッチリだ！兄貴の近くに馬鹿でかい魔力があつていい目印になってるぜ。）」

「うつそ！？アスナのくせに気づいたのっ！」

「ぬっふっふ、大丈夫だ、私の孫センサーがビンビンに感じるかなー！ついて来い！（カモ、道案内は任せたぞ。）」

++++

うー、まだ頭がごっちゃになってん。えーっとな？うちの実家の近衛家は代々陰陽師の家系で、何度も呪術協会の長になるくらいの名家だったみたいや。そんでな、ウチのお祖父ちゃんは関東魔法協

会の理事でかなり偉いねんで、お父様も関西呪術協会の長や、しかもウチは極東一、下手したら世界で一番の魔力量持ってん、だから誘拐されかけたらしいで。

しかも誘拐しはった人は呪術協会の幹部らしくてな、色々複雑なんやて。

「ミッション更新しました、神楽坂アスナの所持品の中の追跡媒体をココに置いていきます。」

「えっ？なにこの携帯……。」

このちいさいネギ先生は陰陽道の式神なんやけど、なんで西洋魔法使いのネギ先生がつかえるのん？それにしてもさっきの動きはすごかったなー、いきなり後ろから出てきた白髪の少年を撃退してな、よう分からんうちに終わってしもたけど、カッコよかったえ？本人じゃないけどな。

「そういえばネギ先生少し聞きたいんやけどな。」

「何でしょうか。」

「なんでせつちゃんとかネギ先生が居るのに、今すぐ合流せえへんとあかんの？」

「それは次は守り切れないからです。さっき凌げたのも此方に地の利があつたのと、この僕が相手の不意をついたからです。一般観衆の目があることにより相手は派手な立ち回りが出来ませんでした。次は人払いもしてくるでしょうし、このボディは本体の40%ほどの出力しか出せません、もし本体でしたらあそこでアイツを仕留め

ていたでしょうが、僕では手傷を与えることしかできませんでした。
」

「それに次やったら確実に封殺されるでしょう、それほどの力をアイツは持っています。だから・・・戦闘モードに移行します。」

小さいネギ先生がまた大きくなった、あれ？せつちゃんとかアーニヤちゃんも構えたってことはまたさっきの人達？先生が消え「セルフバーニング」わわっ、すごい速さでこっちに来た人にブツかって弾かれてもーたけど、一緒に火が纏わりついてるな。

「これはマズッ」又ハハッ遅いぞ！【フレア】」

ボン！って爆発して・・・ネギ先生！ネギ先生がつ・・・って式神やったつけ、見事に灰だけになってん、これってピンチ？
せつちゃんが背後から切りかかるけど、デジャブ？

「貴様ッ！斬がつ」

「なんだ偽者だったのか、詰まらん【セルフバーニング】」

あかん！？せつちゃんが灰だけになってまう！あっあー、火が纏わりついて！

「【アーニヤ・タイラントエッジ】！！」

「【セルフバーニング】」

ふう、アーニヤちゃんが白髪のお爺さんに攻撃してくれて助かったわ、でもそれって火が無くなったらただの飛び蹴りとちゃうん？

さつきから見えて思ったけど、肉弾戦が多すぎひんか？魔法使いって格闘家なん？

「助かりました。」

「別にいいわよ、あとなんかうちのお祖父ちゃんがすみませんでした。ほらお祖父ちゃんも言い訳してよ！」

「ぬふ、いや久しぶりにネギと遊ぼうと思ったら、前より全然弱くて、ぬはははっ！」

なんか個性的なお爺さんやね、みんなボカンとしとる。ん？あつちから走ってくるのは、ユエ達や。なんや和美が家政婦は見た！ばりの表情してるで、もしかしてさつきの見えてたん？アーニヤちゃんのお爺さん、魔法使いは魔法を隠さないとあかんとちゃう？

「ぬっはっは！どうやら見られてしまったようだね。しょうがないから魔法使いである君たちの担任のネギ先生に相談しないといけないね！」

「えっ！ネギ先生って魔法使いなの！？」

「はあ、このクソ祖父は何考えてるんだか・・・。」

せつちゃーん！そんなに落ち込まんといてっ！きっと先生がなんとかしてくれるって、えと先生に迷惑をかけちゃうことに落ち込んでるって？そ、それはフォローできひんわ。

「何も出来なかった、オレっちを許してくれ兄貴・・・。」

オコジヨが喋ってるのにみんなスルーするほど、混乱した空気や。
あかで私もどうかしそーや。

ひたすら旗が立つ話（後書き）

お久しぶりです、前회가22日ですので八日ぶりですね。

やっとテストが終わったので更新しましたよ。久々だと中々上手く進みませんね、でも修学旅行篇もあと3話くらいで終わりの予定ですので、期待しないで待っててください。

深淵を覗きこむとき

『今日のチャチャゼロ!!!』

「ミンナ！待たせたナ！……待っていないなんてつれないこと言わないでクレヨナ。」

サテ、こんな遅れた理由ダガ、大したことはないぜ。自動車の仮免許とって、漢検受けて、3rdプレイしたり、チャチャゼ口のMUGEN入りを目指してたりしてたダケダゼ。

アゝ、オレもモンスター狩りテーナ。マツ、作者も一ヶ月で20時間以上もやれば、気が済んでこれから更新していくけど期待スンナヨ。

[illegible]

関西呪術協会、本拠地（コノ力さんの実家で、今絶賛関西からの覗きにあつてます。）のお風呂に入らせていただいています。何故、こんな昼間頃から湯に使つてゐるかというと、原作でもこのお風呂場でコノ力さんが誘拐されたんで、あらかじめ術式を張っておこうと思ひましてね。勿論、発動までばれないように隠蔽を重ねてます。

「ねぎ先生何してるんですか？」

「んー、式神と視覚を共有してるんだよ。」

「へー、今おじょう様たちはどうなってるんですか。」

「戦ってる。」

「へ、だ、大丈夫なんですか！？誰か怪我とかしてませんか！？」

「大丈夫みたいですよ。」

あつちは大変そうですね。お、どうやらフェイト君も出張ってるみたいで・・・このチリチリとした感覚、もしかして彼が宿敵？・・・違いますね。今までの彼らより薄いです、ということはフェイト君の親玉さんですかね。

とりあえずコノカさんを守りつつ、フェイト君の力を計ってください。

「ねぎ先生の笑顔が怖いです・・・。」

「何かいいましたか？」

「いえ！なんでもありませんっ！」

あら？思ったより反応が鈍いですね。街中というのも考慮しても・・・このフェイト君は戦闘経験が少ないみたいですね。この性格からみても騙まし討ちに弱そうですね。うーん、計画変更ですね。本当は月詠さんを捕まえて獅子身中の蛆にするつもりでしたけど・・・。

「それじゃ、上がりましょうか？」

「はい……。」

「……？ 上がらないのですか？」

「はうつ……。」

なんか寝てしまいましたね。のぼせましたか？……ん、あれですね。9歳なのにこの筋肉だと身長が成長が阻害されそうですが、これくらい無いと普段の鍛錬すらまなりませんから170cmまで伸びればいいほうです。いやでも……いま150近くありますし、きつといけます。

「はっ！ 私は何をつて、これ最近多いです。」

「気にしたら駄目ですよ。あつ……ちつ、クソジジイがつ」

「ひい、ねぎ先生どうしたんですか……？」

クリスさん、やってくれましたね。あの人式神だつてわかつて攻撃しましたね。はあ、しょうがないですね。彼は昔から自分が良ければ全てよし、且つ他人の不幸は蜜の味を地でいつてましたから。

「ちょっと長に客が増えることを伝えないといけませんね。」

「えっ？」

「さあ、行きますよ ちびせつなさん。」

「ちょっと待ってくださいよー！色々と何が起こってるんですか
」

計画変更、さよとチャチャゼロを呼ばないといけません、今夜は
忙しくなりそうです。

++++

ネギ・スプリングフィールド・・・か、式神でアレくらい本体は
どれくらい？

どうやら嘗めてかかったらこっちがやられてしまうね。

「新入り、傷の具合はどうや？」

「別に問題ないよ。」

そう問題はない、確かに人間ならアバラが折れて肺に突き刺さる
ような強烈な一打だったけど、僕は人形だからね。【再生】を使え
ば殆ど直るし、最悪部品を換えればそれで済むから何も問題は無い。

「そういえば、小太郎君はどうしたんですか？」

「小太郎はさっき上から連絡があつてな、捕まったらしいで」

「ふーん。」

天ヶ崎さんは頭を抱えているけど、月詠はたいして気にしてない

みたいだね。僕としては、天ヶ崎さんには悪いけど、極東の覇権争いや彼女の復讐には興味ないんだよね。目的の月詠の勧誘にネギ・スプリングフィールドの観察も大体済んだし、そろそろサヨナラかな。きつとスクナは関西かネギに漬されると思うしね。

「どおするんですかー？」

「・・・予定通りに今夜も仕掛けます。新入り、いけるんやな？」

「問題ないよ、昼間は手加減をしてたし、人の前だったからね。」

手加減していたのは事実、でも予想よりネギが強いのも事実、ふう、さつさと終わらせてコーヒーが飲みたいね。

++++

修学旅行初日、ネギ先生の挨拶や学年主任に新田先生の注意が終わり、新幹線に乗った私たちに妙な事が起こりました。

添乗員から買ったお菓子（正確にはそのものではなく箱から出てきたが適切です。）がカエルに変わってしまった。多少の混乱（源先生や長瀬さんが気絶していました。）があつたものの収まりました。このへんから嫌な予感はしていたんです。

その切っ掛けはのどかでした。のどかが神楽坂さんに告白して玉砕それまではよかったんですが、朝倉が余計なことをして（多分）かなわぬ恋が再燃、お友達から宣言をして、翌日神楽坂さん達を追

って自然な感じを装いつつ、接近することになりました。

「ユエ、私諦めない！まずはお友達からっ。」

いえ、諦めて欲しいです。神楽坂さんは好きな人（公然の秘密って奴で高畑先生です。）がいますので厳しいです。ちなみに朝倉の所持金の半分は私たちの食費に消えていきました。

『ユエってさ、オカルトとか詳しかったよね？』

「まあ、そういうものも読めますので。」

『じゃあ、見て欲しいものがあるから、明日合流出来ない？』

二日目の深夜、突然朝倉から掛かってきた電話は、どうやら私に見せたい物があり、それに対する意見を貰いたいというものでした。朝倉の声のトーンは彼女らしくない自身のないもので、確証のないもしくは信じたくないものを見つけたような様子を窺わせました。

三日目、班で自由行動の私たちは適当なところで神楽坂さんたち6班と合流（あの時の神楽坂さんの引きつった顔には同情してしまいました。）し、朝倉たちの目的地であるシネマ村に向かうことにしました。

シネマ村で待っていたのは、コノカを狙った騒動でした。貸衣装に着替えた私たちの前に現れたのは、ドレスを着た女性で桜咲さんに決闘を挑み、去っていきました。ここまでは良いのですが、問題はその女性と桜咲さんが真剣だったことです。

彼女達の戦いは非現実的なもので、周りの人は見世物だと思っただけですが、明らかに常軌を逸脱したものでした。自らを神鳴流と語った女性、月詠の呼び出した【百鬼夜行】というものは、更に私を混乱させるものでした。小さく可愛らしいおびただしい量の又イグルミのようなものが群れてやってくるのを見て、怯えてしまいました。

それと同時に理解してしまいました。これを見世物として面白がっている大衆、真剣な姿で茶番を繰り広げ非常識的な動きの出来る桜咲さんたち、との温度差、隔たりを感じました。

「お嬢様はっ！私が守るっ！」

「せんぱい、もっと楽しみましょう！」

この唐突な事態に冷静に対処できる彼女たちは、私の知らない世界を知っている。私の知識欲が首をもたげましたが、思い留める。戦っている桜咲さんの叫びは私を平静にし、あまりのショックに思考が暴走していた私に強い衝撃を与えました。

桜咲さんの強い意志と思いは、私に現実感を持たせ、私にすべきことを認識させました。事態の收拾やコノ力については彼女達に任せて、周りの人をどうにかして避難させようと思いました。

「さて一緒に来てもらおうよ。」

「ほえ？」

「手伝ってあげましょうか？ただし真っ二つです。」

しかし私が行動を起こす前に事態は急展開を迎えました。突如、

コノカの背後に現れた少年を空から降ってきたネギ先生が強襲し、激しい接近戦になり、深手を負った誘拐犯は退いていきました。

騒ぎが収まると急速にいつもの喧騒に戻りました。不気味なほど、異常なまでにです。

私が先ほどの戦いに気を取られていると見知らぬお爺さんが話しかけてきました。どうやらネギ先生を探しているようで、私たちがネギ先生のクラスの生徒と知ると、含み笑いをしました。

私はこの顔を知っています。私のお祖父さんも私に問題を出してよくこの表情をしたです。・・・でも何故でしょうか？流れる汗が冷たいです。

私はこの人から離れようと朝倉に話しかけました。朝倉が取り出したのは数枚の写真、少しピンボケしていましたが、被写体の後ろに写っている空にいる人、連続して撮られた写真には空を飛ぶかのように移動している人が克明に写り込んでいました。

「・・・確かに人が杖に乗って飛んでいますね。」

この杖に乗っている少女は確か・・・図書館島でよく見る人です。しかしこのような杖を持つてるのは見たことないです。隠しているのでしょうか？でも朝倉の写真に写っている。そういえば学園の噂にも『空飛ぶ人』というものがあつたです。やはり魔法使いは実

「本当に人が飛んでるみたいだね。」

「ですよね！」

私の後ろからお爺さんが話しに入ってきました。その際、小さく折られた紙が手渡されたです。心臓が痛いほど鼓動しています。

渡された紙に書かれていた言葉は私を掻き乱してすっかり冷静さを奪い去っていったです。

深淵を覗きこむとき（後書き）

お久しぶりです。およそ一ヶ月ぶりの更新です。

筆不精にも程度がありますね、申し訳ない、頭の中で話しは出来て
いるんですが、文にならなくて困りました。
それではさようなら

子供の頃から本を読むことが好きだった私はいつしか知識を求める探求者となった。

肉親を失くした私は魔道士に引き取られ、そこで魔術や学問を学んだ。

悲劇的な事件の後、私は放浪の旅に出た。

旅の果てに辿り着いたのは、深淵、地底の奥底、ンㇿカイ。私はそこで大いなるモノにであつた。私は大いなるツァトゥグアに真の叡智を授けられ、崇拜するようになった。

『世界を知るものは世界の所有者である』

私は知の信望者であり、学者であり、魔道士だった。

『無知であることは罪である』

深淵の知識を使い宇宙を彷徨い、新たな知識を蒐集する。無知な私はひたすら貪欲に求めた。幾多の生を貪り、時には愚かしいことをした。

『しかし知を持つことも罪である』

私には唯一の友がいた。互いを憎み、羨み、ときとして互いに刃を突きたてた。私は彼の精神の高貴さに、彼は私の才を羨んで。

『知識を求めるものよ、心するがいい、その先に果ては無い』

友よ、願わくば幼き幻影に導きの手を。

友よ、貴様の苦勞する姿が何よりの愉しみさ。

++++

お爺さんに渡された紙にはこう書かれていたです。

『世界を知るものは世界の所有者である

無知であることは罪である

しかし知を持つことも罪である

知識を求めるものよ、心するがいい、その先に果ては無い』

世界・・・状況から見て魔法又はそれに準ずるもののことでしょ
うか？なら所有者とは、魔法使いのこと。

無知は罪・・・知らないことが何故悪いことなんでしょう？それ
に知っているということが罪なんでしょう？わかりません・・・。

知識を求める人、これは私？終わりが無い、どういうことでしょ
うか？

「ユエ、どうしたのー！」

「ユエっ！早く来ないと置いてくよ！」

私がお爺さんの意図を読み取ってる内に置いてかれそうになって
ました。急いでのか達に追いつかないと！

「今いくですー！」

追いついてみるとお爺さんがいませんでした。どうやら先にいったようなんですが・・・速すぎですね。やはり・・・魔法・・・？

《・・・ズズズ・・・》

「っ！こっちみたい！」

い、石畳がつ！じゃなくてっ！いきなり何が起こってるんです！
先ほどの人たちが来たにしては、和やかですが・・・燃えた紙に・・・。

「ぬふ、いや久しぶりにネギと遊ぼうと思ったら、前より全然弱くて、ぬはははっ！」

此方を見て愉快そうなお爺さん、魔法って隠さないといけないんじゃないのですか？

「い、今のって魔法なの！？」

「お爺さん！どうなの！？」

いや、朝倉にパルもそんな直球に聞いても・・・。

「ぬっはっは！どうやら見られてしまったようだね。しょうがないから魔法使いである君たちの担任のネギ先生に相談しないといけないね！」

バラしたーーっ！！！！

「えっ！ネギ先生って魔法使いなの！？」

「はあ、このクソ祖父は何考えてるんだか……。」

しかもネギ先生のこと……あれ？ネギ先生が居ませんね。

「……はあ、みなさん落ち着いて下さい。私が説明いたしますので、アーニヤさんそちらのご老人は任せましたよ。」

「わかった！二度とこんなこと出来ないようにしてやるわ！」

説明してくれるのはいいのですが、桜咲さん頬が引きつってますよ。ココロウアさんは、物騒すぎませんか？

++++

「ということで私達はネギ先生に合流するためにお嬢様のご実家に向かっているところです。」

「話して大丈夫なの？」

アスナさんの言うとおりですが、お爺さんのせいで手遅れかと。ココロウアさんとお爺さんの鬼ごっこもまだ続いてますしね（魔法を使いまくってるです）。

「ええ……ネギ先生に何とかしてもらいましょう。クリスさんは、ネギ先生と知り合いみたいですし……。」

いわゆる丸投げというやつです。

「はあはあっ」

「ぬっはっはー！アーニヤもいい動きするようになったな！」

「クリスの爺さん・・・あんだすげータフだな。」

終わったみたいです。・・・これはすごいっ、千本鳥居というやつですか・・・・・・・・？・・・・このかが俯いてますがどうしたんでしょう。

「このか、どうしたです？体調でも悪いですか？」

「ん・・・・・・・・あんなあ私の家みても引かんといてな・・・・」

「

・・・何がです？・・・・なるほど大きい屋敷ですね。でもこのメンバーで引くような人はいませんね、純粹に驚いてたり、感動してます。このかの心配は無用だったです。

「ぬっはっは！絶景かなっ！」

「あのうちのクソジジイが色々とすみません、ちよつと旅行で浮かれてるみたいで、いつもはもつと落ち着きがあるんです・・・・」

このおじいさんは全く自重しませんね。あつ、いいんですよ。コロナウアさんが謝ることは無いです。それにのどかが迷惑を掛けてないですか？神楽坂さん関係で。

「・・・・・・・・」

「おかえり、コノカ。」

「お父様っ！」

「ひさしぶりだね、大きくなつて・・・・」

「お父様・・・少し痩せたん？」

親子で感動的な再開を邪魔しないように大きいものから出てきた

巫女さん達に連れられて広間にやってきましたです。

広間でこのかのお父さんから挨拶やらがありましたけど、割愛するです。それよりもひっそりとどこかに行ってしまったお爺さんとココにいるはずのネギ先生を探していると二人は何かを話しているようでした。

「どうやら随分と使ったようだな、ネギよ。」

「五回・・・いや六回かな、あと何回くらい使える？」

・・・？何の話でしょうか、文脈からいって身体に負荷の掛かることをしているようですが・・・やはり魔法ことですかね、それも禁忌と呼ばれる。

「時間を空ければ・・・そうだな十回はいけるか？しかしなネギ、短時間で連続で使うとすぐに進行するぞ。第一媒体も無しに生身の貴様が扱うこと事態が間違ってるからな。」

「クフフ、前世ではこの力で好き放題してたじゃないですか。ねえ、エイボン？」

エイボン？お爺さんの名前はクリスのはずでは、それに前世ってなんの話ですか？

「モルギ、懐かしいな。二人で旅した時が・・・。」

「クフツ、あの時邪魔が入らなければ、君を殺せたのにね・・・。
・・・まっ、悪く無かったよ。」

「・・・見つけたのか？アーニヤや貴様の教え子はどうするつもりだ。」

「置いて行か、それが僕の存在意義だからね。」
「そうか・・・」

置いていく？単にマホラから出て行くなどの話ではなさそうですね。が、それにまた新しい名前が出てきました。・・・前世？ネギ先生達は生まれる前の記憶があるのですか？

「タイムリミットは2012年だったな、あらかた準備は出来ているぞ。いつ使うかは貴様が決めろ、マホラの長には計画の詳細を話したのだろう？ばやいていたぞ、露骨に脅されたとな。」

「いやはや喰えない爺さんだね、どうせ笑いながら言ってたんでしょう？まあ、あの人の人脈があれば問題なく進みそうですよ。それじゃあ、西の長によりしくお願いしますね。」

「・・・ああ、貴様の教え子達は任せておけ。」

まずいつ！急いで離れないと！

このことは桜咲さんたちに相談するべきですかね？

ジョインジョインユエー（後書き）

クソッ！おわんねえ！・・・こほん、失礼。

でも長いです。これ以上飛び飛びにすると自分でさえ、理解できなくなるので我慢です。

次からは戦闘パートなのでサクサク？行きたいところですが、前作同様長くなる気がしないでもない。

今更ですが、感想をみてもらうと表現しようとしていたものが、分かって分かりやすくなるかも？

それではさようなら

がら、次の場面に行くために下に下りていく

「綾瀬ユエに話を傍聴させたのは何故だ」

「クリスお爺さんが原因なんだけどね・・・聞きたい？」

「言う気が無いくせに訊くな、お前の秘密主義は今にはじまったことでもないからな」

まずそのニヤついた顔をぶん殴りたくなったが、それよりも優先しなければならぬことがある。ぼくは浴場に急ぐことにした

行く先々でここの人達が石化している、フェイトがやったようだ。浴場からはこのかさん達のはしゃぎ声が聞こえる、さてどっちに引つかかるかな？

「シュブニ・グラ シュマ・ゴラス 劫初に語られし蛇の神よ
狡猾で赦し難い咎人に黒き蛇の牙を イグの呪い」

この小さな黒い蛇に噛まれた人は寝てしまっ、ただそれだけの良心的な呪法だ。中にいる生徒達には眠ってもらって、フェイトを待つとしようかな

++++

まいったね、呪術協会の人間を一気に制圧してターゲットを誘拐するつもりだったんだけど、罠にかかってしまっとはね。近衛このかのある所に行くと浴場で数人寝ているのを見て
しまった！と思ったときにはもう遅かった

「どうですか？ルルイエの館の効力は、人形・・・魔力が主な抗生物質の人工生命体には効果抜群でしょう」

「小太郎は僕が襲撃するとは聞いていないはずなんですけど、どうして的確に罠を設置できたんだい？」

「気にしないで、僕は気にしないから。さよ、やっていいよ」

『来たれ 憑き御霊ノ石 魂換え 対象は私と彼』

「なに！？これは・・・猫と体が入れ替わった？」

「首輪しないとね」

これはどういうことなんだろう、ぼくが猫になった？ネギに抱きかかえられた僕は、自分がどれほど危険な状況か、理解できないほど混乱のきわみにある。

「記憶の伝達は成功したか？フェイト君あなたのお名前は？」

「テルティウムだよ、完全なる世界のね、もっともこの名前は嫌いだけどね」

『成り代わりか・・・』

「ご明察、さ僕達の出番はまだ先だからまってようか、さよ頼んだよ」

「おまかせあれ」

彼女？は僕を殺意たつぷり目で殺すといわんばかりに睨んできた。身体は猫、魔力は使えないし、喋れもしない、そしてこの首輪はきっと僕の邪魔をするだろうから、詰んだ状態だ・・・すまない僕はここで退場のような

++++

「さよは上手くやってるみたいですね、アーニヤ達がコノカさん

を助けるために追いかけてます。」

今回は今までと少し違う、自分が強い影響を持っているのもあるがやはり思惑が成功したようだ。

僕達が苦勞してきた歴史の修正力というのは歪みを戻そうとする力だ、例えば予知能力を持った人が事故を未然に防いだとする、すると他の事故が防いだ事故の分だけ修正されることがある。つまり歴史は歪んだまま修正される、悪い方向に

「エヴァンジェリンさん、頼みますよ」

『ふん、これで借りはチャラだからな』

「別に貸しとは思ってないんですが・・・」

『私が気にしてるだけだ』

「じゃあ、お氣をつけて」

そこでこう考えた、その力を誘導できないか？と・・・そのためにアーニヤを育て、アスナさんを弱体化、保険として桜咲さんを用意する。

これで上手くいったら確証が持てる

「さてアーニヤを助けに行きましょうか」

アーニヤは割りと広域魔法が得意なので、足止め用の鬼を相手にしてるでしょう。ですが流石にアーニヤといえど、そこに月詠が加勢するとなると厳しいかな、だから僕の代わりにスクナと遊んでもらいますよ。

いました、アーニヤの魔法は派手なのですぐに何処にいるかわか

りますね。どうやら月詠が出てきて少し膠着してるようです。

「ここですか」【よのかぜ】

風精を召喚して小規模な竜巻を発生させる

「ネギ！？遅いわよー！」

「アーニヤ、先に行つて！ここは僕が引き受けるから」

「わかったわ！あんたもサッサと来なさい！」

結構あっさり行きましたね、よのかぜで進行方向に穴ができたし、問題ありませんね。それで当面の問題はこの無駄にうじゃうじゃいる鬼どもですね。

「来ると思つてましたよー、それではーやりましょうかー（おねえさんともやりたかったですけどねー）」

「来なよ、神鳴流」

「あれれー？口調がちがいますよー（気配がおかしい？）」

この子はばやばやしてるけど、太刀筋は一流だ。動きのキレ、気の使い方も天性の物をもってる

「ざーんがーんけーん（半歩動くだけで避けられました）」

「いいセンスだ」

「ざんくーせーん・・・あたりませんねー（こつちを予測したみたいなの足捌きですねー、昔みた青山の人みたいです）」

こちらの動き初めをけん制して動き終わりを狙う、この年でよくここまで練り上げてあります

「ふふっ、当たらなさすぎて楽しくなってきましたよー（届かな

い！わたしよりも段違いに強い、でも」

「戦うことが楽しい？」

「楽しいですよー（あの綺麗な肌を切り裂きたい！）」

闘気が膨らんできた、戦いの中に生を見いだす動の気を持つもの、戦闘狂だね。より苛烈に激しい剣舞、見てみたかったな、君の完成、でも

「考え事してる場合ですかー、斬魔剣（変ですねー、彼のいないほうへ剣先がいきますよ）」

「おっと」

「二の太刀（死角からの攻撃を避けられた、もう笑うしかないですよ）」

必要無いんだよ、君は。だから最後に見せてあげよう一つの武の極み

「・・・どういうことなんですかそれ（気が高まり続けてる）」

「六面八臂、内側から開放する動の気と外側から押さえつける静の気を扱うことによって生まれる波動だよ」

「あははー本当に人間ですかー 雷鳴けーん」

少しも動揺をみせないその揺ぎ無い精神に敬意を表して、せめて奥義で葬ろう。彼女の心臓にミリ単位の誤差なく、打ち込む・・・角度よし

「菩薩拳」

「！?・・・」

「さようなら・・・気がついたら鬼も皆消えちゃったな、僕達の戦いの余波かな」

月詠は心臓が止まってもうすぐ立ったまま死ぬ、まあチャチャゼ口がいるからいらないからね。あとはスクナでも見に行くかな

++++

オイオイ、ご主人はあんな化け物だったのカヨ。タカミチのカン
カ法涙目ナ純度の気ダゼ、まさに歩く気脈ダナ。

いいもんが見れたぜ、さよのお守りが終わって暇してたら

「ケケケ、立ちながら死んでるアホがイルゼ。アア、まだ生きて
るんだッケナ？元氣力？」

「……」

「オイオイ、聞かれたら答えるもんだぜ」
《ドカッ》ン、いい音がシタナ、いい蹴り具合ダゼ

「ゴホッ、ひゅーうひゅーう……あ……」

「見てたぜ？同類、ケケッ！ドウダ？」

「……はっ……ははっ……」

「ケケケッ、ウレシソウダナ、解るぜ。オレタチは戦うことでし
か生きてることを感じれない、ソウダロ？」

「……うふふ……まだ足りませんよ……お兄様……」

丁度いい玩具が転がってんだからヨ、暇つぶしには持って来いダ
ゼ。ご主人、オレタチはまだまだやり足りネーヨ、命令が無くても
やっちまうぜ？

++++

ああ、羨ましいなー、ネギ先生にだっこして貰ってさ。私はこれから先生と離れ離れになっちゃうのに・・・なのに私はこの人達と遊んでないといけないのかあ

「もう終わりかい？」

「冗談にしては笑えないわよっ！タイラントフレーム！」

「やれやれ」

ココロウアさんの業炎を石柱で遮る、私では目で追えないけどこの体が迎撃する。女に近衛さんが捕まっついていて、桜咲さんが助けようとしている。そのためにココロウアさんが私をスクナから引き離そうとしていることは分かってるし、邪魔するつもりは全く無い。だって私が頼まれたのは、ココロウアさんと桜咲さんに戦闘経験を積ませることと神楽坂さんに決断させるために材料を与えること

「アンタ、手加減してるわね！」

「・・・彼女のは翼は綺麗だね」

「こっちを見なさいよ！」

神楽坂さんが何処に首を突っ込もうが構わないけど、彼女が説得しなくても桜咲さんは空を飛んだだろうし、身を守れない彼女が何でここにいるのかな？まあ、頼まれごとの中には彼女たちのサポートが含まれてるからそれとなく守ってるけれどね

「おい、クラスメイトが世話になったな・・・返すぞ」

わー、すごい飛んだ。先生からマクダウェルさんが乱入してくる

ことは聞いてたけど、簡単に殴られちゃった。最後に先生からの命令はアデアット」

「契約に従い 我に従え 氷の女王 来たれ とこしえのやみ えいえんのひょうが 全ての命ある者に等しき死を 其れは安らぎ也」おわるせ「魂吸い 対象はリヨウメンスクナノカミ」っな！」

「じゃあね」

「貴様あ！私の見せ場を返せ！」

祟り神となつたスクナの魂を奪うこと、つまりマクダウエルさんがスクナを捕らえた時、身動きの取れない哀れな荒御霊を私のアイティファクトで横取りして離脱、そのまま私は完全なる世界に怪しまれないように潜入する……のかあ、いやだなー先生と離れるの

全てを置き去りにして（後書き）

ギャグ系は結構楽なんですけど、シリアスにいくと唸ってしまします

あとお久しぶりの更新です

同じ日本人なのに話しに通じない人達がいるんですが、彼らがこの先生きてけるか心配です、まあ捕まったら「いつかやるんじゃないかな」っていいですけどね

おわりに向けて

『今日のチャチャゼロ!!!』

ケケケッ前は月詠とかいうガキをボコボコニシテ楽しかったぜ。今回は『崇り神』についてダゼ、もっと早くこれについてヤルつもりだったんだが、タイミングがナ。

御霊信仰ごりょうしんじょうにオケル荒御霊あらみたまデ、畏怖・忌避される奴らダガ、手厚く祀りあげること強力な守護神となると信仰される神々らしいぜ。それに、恩恵を受けるも災厄が降りかかるも信仰次第とされ、すなわち御霊信仰である。その性質から総じて信仰は手厚く大きなものとなる傾向があつてダナ、創建された分社も数多いんだぜ。

ソレデダ御霊信仰というのは人々を脅かすような天災や疫病の発生を、人間の”怨霊”のしわざと見なして、これを鎮めて”御霊”とすることによりたたりを免れ、平穏と繁栄を実現しようとする日本の信仰ダゼ

有名どこをあげてみると日本三大怨霊の菅原道真すがわらのみちざね（平将門（たいら）のまさかど）、崇徳天皇すとくてんのうや崇道天皇（早良親王）、伊予親王、藤原吉子、橘逸勢、文室宮田麻呂、菅原道真、吉備真備、井上皇后（井上内親王）の、御霊を総して八は所御霊つしよみたまといった人達ダナ、各所でたたり神として祀られてるぜ。いづれも政争の果て非業の死を遂げてるみたいダゼ。

一部重複しているのは気にしなくてもイインダゼ、じゃあ、さよなライオン！

さよです・・・ここで私から見た前回までのあらすじにいきます。

「崇り神になっていましたですね」

で喜んで戻ってきたわけなんですが・・・なぜ私の体に捕縛魔法がされてるんでしょうか。それに学園長や見知らぬ偉そうな人（黒服に囲まれた）に角の生えた女性などなど、私をまじまじと見つめられる。い、今から何が起こるんですか？ドキドキ

「あらずじ終わり」

「おやおや、フェイト君いきなりどうしました？（さよ静かにしてなさい）」

だってこの会議室空気が重すぎますよ

+

+

+

+

+

修学旅行が終わり、旅行の振り替え休日明け、学園最強頭脳こと私、超鈴音はネギ先生に呼び出された。休み中ネギ先生の戦力分析をしたり、あれ？ネギ先生ってこんな強いのか？や普通に人を殺した・・とか驚いていたところだったから冷や汗が止まらなかった

「チャオさん、おはようございます。朝早くから呼び出してしまいすみません、放課後に会議室まで来てくださいね」

「・・・わかったヨ」

話しは放課後にあるみたい・・無駄にドキドキして授業なんて聞いている暇ないヨ！

で放課後、会議室に入ると結界が張ってあったようでパリッとした間隔の後、見たことのある人達が座っていた。

「あつ、チャオさんこつちですよ、僕の隣です」

「ええ、わ、わかったヨ」

会議室にいるメンバーは私、ネギ先生、フェイト？に学園長、フーリートを被った男、ヘラス帝国第3皇女テオドラ、元老院主席外交官リカード、アリアドネー魔法騎士団総長セラス、オステイア総督クルト・ゲーデルが円卓を囲んでいる

「みなさんに集まってもらったのには大きな理由があります、それは来るべき魔法世界の崩壊についてです。」

どうやらネギ先生が話しを進めるみたいネ

「2012年・・・これがタイムリミットです。魔法世界の崩壊の原因とは魔力の枯渇であり、遙か昔に創造主といわれる魔法使いが繋いだ、地球と火星間に繋がれた魔力の管から流れてくる魔力の減退にあります」

「みなさんはご存知でしょう、魔法世界の住人の体は魔力から出来ており、崩壊が始まるころには殆どの人達が行動不能でしょう。仮にこちらの世界の魔法使いがいたとしても魔力がない場所には精霊はいませんので、魔法は殆ど使えないでしょう。」

「混血のものがいたら体を維持するために多くの魔力を使い、使える魔力が全く無いもしくは使うと命に係わる、そのような世界になると予想されます。」

そして崩壊した世界で生き抜くため旧世界との生存競争が始まる。

「僕の隣のフェイトから聞きだしたところ、完全なる世界の目的は魔法世界の救済らしいです。その計画の内容とは、完全なる世界「スモ・エンテレケイア」という【各人にとって最良の可能世界へ各人を移行させる】魔法を使用するらしいです」

「一見凄くいい魔法にも思えます、しかし不審な点が見られます。各人つまり魔法世界の住人、確認されているだけでも6700万人、これだけの数の人に使用できるのか？という点」

「各人にとっての最良、ここも不審なところです。なにを基準に

最良と判断するのか、最良とは何か、という点」

「可能世界への移行、現在の世界からありえたであろう世界へ、過去から未来、全宇宙を包括するすべての時間空間における世界すべてを対象とするようですが、そもそも可能なのか？という点」

「そして魔力の枯渇した世界でそのような大掛かりな魔法が使えるのかという点です」

うーん、聞いた限りだと限りなく不可能に近いヨ、大体それができるなら私はここにいないネ。まったく最良の世界なんて夢のような話ネ・・・ああ、なるほどネ

「実際はそんなたいそうなものじゃないよ、滅び行く人々に安らかな夢をあげるだけさ・・・」

みんな呆れたような顔をしているネ、だって今まで悩まされた最大の敵の目的がこんなものなんて考えもしなかったんじゃない力？私もずつと謎だったことが解消されてスッキリしたヨ

「なんとも、まあ」

「はあ・・・そんなことでアリカ様が・・・」

「フッフ、アッハッハッハッゲホゲホッ・・・馬鹿かつ」

一斉に愚痴り始めたけど、何も言わない学園長が気になるネ。私がかここにいる理由はきつと私の目的とその計画のことなんだろうけど、どこで流れたんだろう力？

「次はチャオさんの計画ですが、それにはまず彼女の紹介をしないといけないですね。彼女は100年後の魔法世界からやってきた未来人で僕の子孫です（はい、チャオさん自己紹介よろしく）」

「お目にかかれて光栄です。紹介にあがりました、超鈴音といいます（あの、なんで知ってるか後で聞かせてもらえるかな）」

「彼女は実際に崩壊した魔法世界からやってきた、生き証人です（別にかまいませんよ）」

++++

「・・・なるほど方法はともかくいい考えだな」

「いまのうちに動き始めればなんとかなりそうね」

「問題は完全なる世界だが、拠点の情報はあから一気に潰すこともできるな。まずは牽制して時間を稼ぐか」

「そうですね、完全なる世界の目的はともかく彼らの情報を正確に得られたのは大きいですね」

洗いざらい吐いたわけだけど、ネギ先生が計画やら私の身の上を話し始めたときの周りの顔が子供をみる親のようになってきてスゴク恥ずかしかったヨ

「チャオさん、みなさんの邪魔しちゃ悪いですし、出ましようか」

さてネギ先生は何を語ってくれるのかな

おわりに向けて（後書き）

作者は原作を27巻までしか読んでないので
今回の話は友達から聞いた内容（あいつの妄想を含む）を参考に
しているのでオリ設定です、ええ確実に

この先はオリ展開しかありませんよ たぶん

思考する似非思索家（前書き）

お久しぶりです。シュマです、やっとネット環境が整いました。
じゃ、どぞ

思考する似非思索家

『今日のチャチャゼロ!!!』

ヨウ！オレダ、チャチャゼロダゼ。なんか最終回が近くなってきたくさいので、チヨットダケ多めダゼ。題は『英雄』ダゼ

英雄、勇者、救世主、英傑、ヒーローやらと云われる存在。神話・民話・歴史において、すぐれた知恵、武力などで魔物を退治したり、困難な課題を解決したり、人びとのために行動する人物に付随していく記号。

英語のHEROの語には「神人」という意味も含まれてるらしいぜ。マア、神話でよくある神の血を引く英雄ということダナ。多少の失敗をしたり、父子の対決、超人的な身体能力、強靱な精神なんてのは共通してるナ。どこの場所でも人間は変わらネーナ

地位の格差の理由付けや災害の苦しみ、生への苦痛、そうしたあらゆる種の望みから造られる理想像それが英雄ダ。決してなろうと思つてなれるもんじゃない、なろうと足掻けば足掻くほど、人の目には滑稽に見えるだろうナ。

それで世界中には様々な英雄譚があるわけだが、それとセットで歴史に残る言葉なんかもあるナ。偉人の名言だけじゃなく、こうであって欲しいという民衆の願いも残るぜ。その例が【英雄色を好む】ダナ

別にオレはホルモンがどーたらとかの講釈は垂れねーぜ、男なら誰でもそういうモンだからナ。おっと、話しがズレたな、続キダ。英雄つてのは望まれて造られるわけだからそこに個人なんざイラネー、お偉いさんはいふことのきく駒、民衆は自分たちにお優しい都合のいい人物であればいいわけダ。

【英雄色を好む】のは、別に性欲が強いとかじゃなくて、自分の特別だからこそ、英雄が勝手に特別な人物をつくってしまふと、もしかして自分たちが裏切られるんじゃないかっていう自己保身がそこにあるとオレは思うぜ

結論をいうと博愛精神（上っ面でも）がないと英雄にはなれない
ということダナ

南瓜鍬は面白いぜ、ジャアナ。マタ逢う日までダゼ

[illegible]

魔法世界のお偉いさんとの会談が終わり、僕はチャオさん連れ
て生活指導室に向かった。まだ部活の勧誘ポスターが貼られてい
る廊下を二人で歩く、廊下にはまだ下校していない生徒たちがまばら
にいた。

挨拶してきた生徒たちに手をふり、進路指導室に入る。そこにいたのは魔法を知っている生徒。つまり神楽坂、近衛、朝倉、宮崎、早乙女、綾瀬、桜咲そしてなぜかいるマクダウェル、部屋を見渡し全員に話しかける。

「皆さん、おそろいのようで、では始めましょうか」

「あの先生、なんでチャオさんもいるのですか？」

「ああ、この子は関係者ですが、別件です。では質問がありましたらどうぞ」

皆の質問に答えていく、魔法とは何か、その危険性について、各国に置かれている魔法組織、魔法を使った犯罪者とそれを取り締まる組織、魔法使いを育成する機関、魔法世界とその情勢に魔法に対する見識の違いや身分や制度、事細かに答える。

魔法とは願いを叶える都合のいいものではなく、法則や原理に縛られる技術であり本来誰にでも使える汎用性の高い事象であること、基本的に精霊と呼ばれる魔法原理生命体（元は意思を持たぬ自然そのもの）を回路として魔力と引き換えに起される現象であること

「でも本当にそこまで考えて魔法というのは使っているのですか？」

綾瀬の指摘したことは、自転車に乗ってる人に自転車に乗るとき、

自転車にどのように力が働いているかを聞くようなことである。実際、この魔法の原理について研究されたのは近年に入ってからだ、それまではそれが当然であつたために研究されることはなかった。

そして魔法の危険性について、魔法は環境や術者の状態に左右されやすく、精霊の多寡や術者の精神状態や肉体状態に大きく影響を受ける。その影響が魔法の想定以上の威力がであり、暴発を招く恐れがあること。自分のような若い術者でも人を殺傷できる魔法を使うことができること

各国に置かれた魔法機関は具体的に述べるとここ麻帆良学園や関西呪術協会、ウェールズの魔法学校、アメリカのジョンソン魔法学校などの表には出ないもしくは隠されていて、多くは教育機関であったり、研究機関である。また魔法のその性質から軍事利用の難しさから国家機関であることが少ないことが多いこと

その後も質問に答えていたのですが、魔法世界の情勢を語っていきうちにみんながだれてきたのでこの辺でお開きにまだ聞きたい人はここに残るよう告げました。

「残ったのはユエさんにチャオさんですか」

「おい」

「では質問をどうぞ」

+ + + + +

ネギ先生の会話を盗み聞きした後、私はこのことを伝えるべく皆のところに向かいました。別に先生が魔法を使いすぎて死のうと何を企もうと知ったこつちゃありませんが、会話の内容はかなり重要な情報なので、一考に価すると思うです。

「これは・・・！？」

石像が置いてありました。非常に精巧にできた、まるで生きていくかのような。注意深く見ていくうちに気づきました。この石像は私たちを広間に案内してくれた女性だと、思わず悲鳴が漏れてしまふところでした。近くにまだこれを作った人がいるかもしれない、そう頭によぎることです。声を殺すことが出来ました。

実際は近くに私以外の人はいなかったのですが、そんなことを知らない私は音を立てないように皆と合流するため、そろりと歩いていきました。

不気味な静かき、音のない廊下は生き物を感じさせず息が詰まりそうなほど空気が重く感じられました。確かに感じる生活観が逆に私に恐怖を植え付けました。まるで私だけが置いていかれたように

「あつ・・・のどかあ」

なんとかたどり着いた部屋にあったのは、かつての親友たちの置物、石像の近くに置かれたタオルなどは私が戻るのを待っていたのでしょうか？

呆然と立ち尽くす私、どれほどの時間がたったのでしょうか。震える手でどこかに触れようとしたとき、静止の声が私に掛かりました

「触らないほうがいいぞ、壊れたら元に戻れなくなる」

背後から現れたのはクリスお爺さん、飄々としたようすで私を眺めていました。私は彼に対面し、両手を広げました。彼に泣いてすがりつくでもなく、理不尽に対して怒りをぶつけるでもなく、のどか達を守るために威嚇するように手を広げました。このときの私は誰が敵で味方なのか判断できませんでした。

この石化している人の中でいつもどおりの彼が疑わしかったから、でも唯一ここで話せる人物だから、頭と心の矛盾が生じる。目の前にいる彼に怯えている私と彼の言葉に反応した私。

「戻れなくなるとは、つまり元に戻すことができるんですね」

「可能だ」

「なら今すぐ元に戻してください！」

「駄目だ」

情報を引き出すための会話は相手のペースに乗せられ、のまれた。せめて治すという言葉を取りたかったができなかった。なぜならお爺さんの背後の窓から目に入った光景、光る巨人を目にしてみたらから

「あ、あれは」

「あれはスクナ、リヨウメンスクナノカミ。そんなことより落ちてきたまえ、こんなときだからこそ冷静にならなくてはいけない。」

「宿讎？・・・ってそれよりも早くのどかを元に戻してください

！」

「それ呼ばわりとはスクナも憐れなものだな、元に戻してやってもいいがネギが戻ってくるまで待て、それまではそいつらが倒れないように気を付けるんだな。」

言われなくても気を付けてるです。なんとか言質はとったです。でももともと元に戻すつもりのもりでしたし、心配しなくてもよかったですかもしれないね。

窓の向こうの巨人が暴れている、どうやら巨人は自分の足元に攻撃を加えているようだ。戦いの音がぼやけて響いてくる、窓越しに感じるそれは、私たちと彼らを分ける決定的な違いに感じた。

私がぼんやりしているとお爺さんが突拍子もないことを言ってきた。

「ユエ、君は魔法を知りたくないかな？」

驚きと困惑に包まれた私を愉快そうにみながら、語り続ける。

「君は今なぜ自分なのか不思議に思っている。」

「なぜネギやアーニヤ、他の魔法使いじゃなく一般人の自分なのか困惑している。」

「でも魔法というものにとっても興味のある君は驚きと喜びを感じている。」

「しかし魔法というものに触れてしまえば、日常が壊れてしまう」と理性が押し留めている。君の後ろにいる子達との日常を」

「だが君は気づいているはずだ。その子達はもう魔法から離れることはないことを。恋に、好奇心に、欲求に任せ彼女たちは非日常へ踏み込むことを。仮に今、彼女たちを説得できたとしても学園に戻れば魔法にかかわる可能性が高いことにも君は理解している。」

分かっていて。もう避けえない事実、一度接点ができてしまえばまた顔を見せることに。自分はそれを望んでいた、自分は仕方がないと、魔法にかかわってしまうのが仕方がないことだと、逃げ道を作るために。

でもこのおじいさんは自分に選ばせようとする。自分で魔法を得るように仕向けている。わたしは

「私は「おつとどうやらネギが戻ってきたようだ、続きはまた今度聞かせてくれ。」……のどかを元に戻してください」

「いいだろう」

++++

ネギ先生に聞きたいことは一つだけ

「ネギ先生はこれからどうするですか？」

ネギ先生以外の人たちは意味が分からない顔をしている。当たり前です、きつとわたしの意図がわかるのはネギ先生とおじいさんだけでしょう。

ネギ先生はわたしをまじまじと見た後、微笑んで一言だけ言った。

「クリスなら世界樹を調査しているよ、ぼくはいつも通りに」

ただ前を向く

僕の返答を聞いた彼女はスッキリした表情で部屋から出て行った。きつとクリス爺さんのところに向かうのだろう、答えを出しに

「ネギ先生？今は一体なにカナ」

「さあね」

「・・・おい、ネギこれはどういうことだ」

疑惑の目を向けるチャオと睨みつけてくるエヴァンジェリン、どうやらエヴァは念話であることを聞いたようだ。僕がわざわざこのような場を設けた理由を

「エヴァンジェリン？」

「あの人形が逃げたそうだが、貴様が逃がしたのか！」

「なっ!？」

僕をはかりかねているチャオは驚き、ある程度僕を知るエヴァは僕が手引きしたと断定した。その考えはあたっている、でもなぜそんなことをしたかわからず問いだたしてきた。

「フェイトが逃げた？ いったいどうやって？ フェイトに掛けられた術は僕のだけでなく麻帆良の術者のものも掛けられているの？ 誰がそんなことを？ 彼の仲間が潜入しているのか？ ……わからないことばかりだね。」

「ふん！ ……じじいが連れてこいといってるぞ」

「じゃあ行きましようか、それじゃチャオさん。話はまた今度」

もう会うこともないけどね。

++++

エヴァとは特に会話もなく、学園長室に着いた。

向かう途中、僕と直接の面識のない魔法先生たちが慌ただしく動いているのが手に取るように分かり、思惑通りにいったようだ。

僕の目的は造物主 ライフメーカー ただ一人、今は彼を倒すこととそれだけを考えている。彼の情報は少ない、とおい昔に見た漫画の内容、フェイトから得た記憶、そして自分の推測だけだ。

彼は隠れているが、僕は隠れていない。彼は僕を知っているが、

僕は彼を知らない。彼は強者で、僕は弱者。彼らはそう思っている。僕を取るに足らない虫けらのように、見下している。

僕を地べたに這いずり回る蟻のように全く意識していない、そう嘗められているのだ僕たちは。僕たちは彼らを本当の意味で敗北させなければならぬ、もはや自分が誰なのかわからないほど、僕たちはまじりあっている。

だから余計な邪魔が入らないように、細工をした。今、旧世界は団結し始めている、敵の完全なる世界がいるから。完全なる世界は復活まじか、でも完全じゃない。完全なる世界は9年かけて計画を進めている、多少の邪魔が入っても旧世界なら問題なく計画は遂行される。

旧世界の好物に完全なる世界の所在や情報を与えたのは、身内から膿を出し、完全なる世界と向き合ってもらったため。フェイトを逃がしたのはどちらも情報を持つことで、膠着状態にするため。つまり僕にかまってる暇はないということだ。

正直なところ穴だらけだが、僕は気にしないもう我慢できないからだ。フェイトを見たあの時から、誰が彼らかに気づいた時から、殺せと僕たちが囁いてくる。フェイトから造物主の場所は分かっている、そして造物主はそれを気にしないことを僕は知っている。

学園長と話したらすぐに向かおう彼のもとに

++++

「ご苦労じゃったエヴァンジェリン、ネギ先生に話があるから下がってくれんかのう。」

「なっ！じじい、貴様！」

「頼むエヴァンジェリン、後でわけを話そう」

来て早々、儂はエヴァを下がらせた。儂を忌々しげに睨んだ後、ネギ君を見つめ部屋から出て行った。すまんのう、じゃが聞かせるわけにはいかん、ネギ君は間違いなく壊れているからのう。

「さてネギ先生、大体の事情はクリスから聞いておるから今からするのは確認だけじゃ。」

「助かります。」

クリスとは昔からの知人で彼の変化には驚いたもんじゃない。他の誰も気づかないだろうが、儂は気づいた。彼は昔から嘘をつくと左手の小指がピンと伸びる、しかし今の彼は伸びていなかった。偽者かと思いましたが、全く変わりはないようじゃった。

だからクリスからの便りがきてその中にネギ君の名前がちらつと出てきたとき、彼が係わっている気がしてならなかった。そして先日その疑問をぶつけたところ、ネギ君の素性や目的をまるで物語をつづるように聞かせてもらった。

「ネギ先生はこれから死地に赴くらしいが生きて帰る算段はあるのかのう？」

「さあ？やってみなければ、わかりませんよ。」

ここでネギ君の代わりはいないと説教してもいいんじゃないが、あいにく彼には代わりがいる。彼の近くにいたアンナ君はネギ君が殺されたら、造物主を恨むじやろう。クリスのもとに綾瀬君が弟子入りした、彼女なら旧世界の根本的問題を解決する知恵をクリスから授かるじやろう。今日はチャオ君のように非常に稀有な存在を巻き込んだし、先日の修学旅行で魔法に係わった生徒にも種を蒔いたようじゃ。

つまり自分の代わりにことを成す人物を見つけてから、ネギ君は行動に出るらしい。それは、前からのことらしいの。

ならば僕の感知することではない、木乃香の婿にできないのは残念じゃが他にも候補はいくらでもいる。代わりはいるのじゃ。

「ふむ、あいわかった。すまなかったのう」

「いえ、後これをお願いしますね。」

ネギ君から渡されたのは、退職願。

これから彼はおそらくあらわれることはないのか、万が一帰ってくればただの病気で終わることができるの。

ネギ君は二度と儂のことを思い出すことはないじゃろ。

++++

修学旅行から帰って二日間で描き上げた転移魔方陣、試運転を終えたチャチャゼロとスクナを食らい切ったさよを抱いて転移する準備をする。誰かに別れをいうなんてことはない、僕は僕しかみていないから。

「チャチャゼロ、準備はいいかい？」

「マカセロ！邪魔するヤツはぶった切ればいいんだろ！得意ダゼ、ケケケ。」

「さよ、僕のために死んでくれるかい？」

「はい！一度死んだ身ですから、でもすぐにこっちに来てくださ
いね？来ないと祟り殺しますよ。」

頼もしい限りだ。

転移先は彼らの本拠地の奥深く、旧世界の霊脈の一つで造物主が
潜む、歴史の空白地点。

ただ前を向く（後書き）

別に飽きたわけじゃないですよ。ただシナリオの進行上、ネギくんは誰かとなれ合ってはいけないんです。

極悪は孤独でないといけない

相手に勝つということ（前書き）

どもシユマです。昨日は自分がTSする夢を見ました。

みなさん二つ名メーカーってご存知ですか？

実はうちの主人公のもとの名前をそれでやった時に『希死神経』という二つ名を貰いました。希死とは無意識に死を望むことです。

ちなみに自分の本名でやったら『脳髓計画』という悪役っぽいのが出ました。

あと身内ですごいのは、兄が『三番目の少年』フェイト？みたいなものや、祖父の『逢魔刻』が非常にラスボスっぽかったです。

相手に勝つということ

仄暗い大きな部屋、部屋の中央には石のようなものがありそこを中心として魔力が放出されている。

唯一の光源は足元から放出されている魔力の光のみ、僕らの前に佇むのは

「あなたが造物主ですね」

『・・・ネギ・スプリングフィールドか』

「チャチャゼロおお！【青く輝く世界にて崇められし悍ましき神よ】」

「アイサ　ゴ主人、アデアット」

これ以上の会話は必要なかった、僕はチャチャゼロに合図をし、術の準備をする。チャチャゼロはアーティファクト【二相の器】を呼び出し、液状になった物体で僕たちを守るように展開する。

同時に造物主の【造物主の掟】が発動し、絶大な威力の衝撃波が僕らを襲うもなんとか防ぎきる。液状化した【二相の器】は衝撃を吸収し、僕の魔力を引き出して大きさを増す。

「【赤く輝く世界にて畏れられし偉大なる神よ】」

「最初カラ、クライマックスダゼ。モード：ゴリアテ！」

【二相の器】は次々とチャチャゼロに纏わりつき姿を変える、チャチャゼロを核とした大きな器 うつわ はチャチャゼロをそのまま大きくし、その両手には大きくなったチャチャゼロを超える長大な剣を携えていた。

「イツチマイナ！」

ゴリアテモードから繰り出される一の太刀は、轟音を響かせながら造物主を押しつぶさんと振り下ろされる。

だが造物主の前面に複数の魔法陣が展開され、【造物主の掟】が発動し、一瞬の拮抗のあと、ゴリアテモードのチャチャゼロをブツ飛ばした。

「【暗澹たる暗黒の世界に在られます大いなる叡智の神よ】」

さっきの液状化した盾のときとは違い、明瞭な形を持つゴリアテモードは硬質化おり、【造物主の掟】の衝撃波を吸収することができずに飛ばされてしまった。しかしである、歴戦の猛者であるチャチャゼロは咄嗟に自分の周りの【二相の器】を液状化させることでダメージを受けることを回避していた。

「【その御力を御貸し下さい】」

【造物主の掟】は精霊の力を借りない魔法である、簡単に言うと普通の魔法は自分が行いたいことを呪文によって精霊に伝え、その対価として自らの持つ魔力と交換して魔法という現象を起こしてもらっている、つまりほとんど自動、オートだ。

交渉する精霊の量、その場の環境、消費する魔力の調整など魔法使いが行う作業もあるにはあるが、そんなもの言い訳に過ぎない、ただ魔法を使えるだけだ。

でも造物主は違う、現在の魔法の根幹を成す、精霊に命ずる呪文を編み出し、数々の基礎となる魔法を生み出し、この魔法世界を創り上げた。始祖の魔法使いの名に相応しい人物だろう、彼にとってみれば2600年の間の魔法の成長・研究など蟻の行軍とかわりないだろう。

話は逸れてしまったが、精霊の力を借りないということは、すべての工程を自らだけで行うのだ。一体僕がどれほど研究すれば実現できるのか？1000年？10000年？それほどのことをいとも簡単に行っている。

「いあ いあ つあとうぐあ ぞたくあ そだぐるい しゃたくう

なぐる ふぐたん」

【造物主の掟】は単なる魔力の塊の衝撃波に過ぎないがその威力は破格だ。そして【造物主の掟】のもっとも恐ろしいのは

「御主人、ナンデオレ八腕ガナインダ？」

完全にマニュアルだからこそ非常に応用が利くということだ。

「知るか。だが時間稼ぎご苦労、作戦通りにな【暗黒世界ン・カイ】」

僕の足元から一切の明かりのない黒が広がる。造物主が【造物主の掟】で打ち破ろうとするも全て飲み込んでいく、見えるか造物主、僕たちの墓場が。

『我とは違う魔法体系……ネギ・スプリングフィールド、貴様はいったい何者だ。』

「六面八臂。いまさらそんなこと聞いてどうする、造物主お前は僕と心中するんだよ。」

『断る、貴様を殺して戻らせてもらおう』

なにも起こらない、このなにも見えない空間では相手の位置を知るには声を辿るしかない。造物主がいるであろう場所は一切の光が起こらず、沈黙したままだ。

「無駄だよ、ここでは一切の魔力行使ができない。どんどん力が

奪われていくだろ？怖いか造物主、始まりの魔法使いが魔法を取り上げられてさ。」

『2600年・・・2600年だ、我は世界を救うことを考えていた。』

「・・・・・・・・。」

『なのに貴様はっ！このまま我になにもできぬまま終われというのか！』

いきなり子供のように癡癡を起し始めた造物主、やっぱりそういうことなのか。

「ねえ、オリジナルはいつ死んだの？2600年前？」

『貴様なにを言って・・・』

「フェイト・アーウェルンクス、運命に災いを幸いに変える神の名前。つまりオリジナルは知っていたんだね、魔法世界がやがて崩壊してしまうことを。だから魔法世界という災いを防いで欲しいという願いを込めて君にその名前を付けたんだろ。フェイト？」

無言か。まあ、どうせ僕が解除の呪文を言わなければ二人ともやがてお陀仏だ。彼が僕を殺しても引き分け、負けはあり得ない。チャチャゼロが仕事をし終えるまで、暇つぶしに話してみようかな。

「異端は嫌われる、だから造物主は魔法世界を創った。自分に優しい世界を」

「最初は良かった世界の崩壊なんて知らなかったから、でもなにかの切っ掛けで気づいてしまった、魔法世界の欠陥に。造物主は焦ったんじゃないかな、老いと崩壊に」

「いくら造物主とはいえ不死は叶わなかった。いやもしかしたら完成させていたのかもしれない、でも不死にはならなかった。自分が魔法世界を構成する鍵だったから、彼自身が地球と火星を結ぶ重要なパイプだから」

「君を創ったのは自分が亡き後、魔法世界を管理してもらったため。そして造物主は自らを霊脈に作り替えた、そしてあの部屋の魔法陣になった。」

『いつ気が付いたんだい？』

フェイトが造物主を型どった姿を脱ぎ、彼の姿が露わとなった。他のフェイトと同じように銀髪に淡い青の目をしていた。違うのは長い髪が長いことかな、地面に髪がついて引きずってる。

なんでわかるかって？来てるからさっきまで存在しなかった光源が。

「君はゼロ番のフェイトだろ？つまりオリジナルのフェイトだ、

三番目 テイルティウム は自分の三番って名前が嫌っていったよ。人間臭いよね、親から貰った名前が嫌いだなんてさ、だから思っただよ彼を作ったのは造物主じゃないってさ。」

『惜しいね、ゼロ番じゃなくてフィリウス 息子 さ。たぶん三番って名前が嫌いなのは、自分が量産されたのを意識させられるからじゃないかな。……それであればなんなんだい？』

「偉大なるツアトウグアだよ、気にしなくても何もしてこないさ。今機嫌がいいからね。」

生贄を三人ほどね。ほんとは月詠も生贄にしようと思ったのに、チャチャゼロのヤツがどこかにやってしまったからね。全くあの任せたは助けるじゃなくて始末しとけだったのにな。

「話を続けよう、君の役目は魔法世界を存続させること。それは今も変わらない？」

『変わらない、例えば魔法世界を一回壊してでも存続させてみせる。だから元に戻してくれないかな？』

「もう君の体を持ちそうにないから手短にしよう。実はいまの姿のまま魔法世界を存続させる愚かな方法があるんだが、乗るかい？」

『……聞かせてくれ』

++++

御主人と造物主は黒い物体のなかに飲み込まれてしまった。残されたオレの役目はこの部屋に近づくものの排除とさよの護衛だ。厄介なことを頼まれたもんだ、さっきの戦闘の続きと今の状況はどっちがやべーのかわからないな。

「タマラネエナ。ドンドン獲物が増エテルジャーナ、皆殺シ確定ダゼ！」

「造物主はどこだ！答えろ！」

ひい、ふう、みい・・・おっと、数えてる暇はねえな。ゴリアテモードのオレを押しつぶさんとする水の奔流を持ってる獲物でぶつた切る。

ふるうだけで巻き起こる斬撃が水を割る。さながらモーゼの奇跡か？

割れた水の間から炎の渦がオレ焼き尽くさんと迫りくる。結構な熱だが周りの水を蒸発しながら来ているせいかこっちに来るまでに少し弱くなってしまっている。こいつらはチームプレーってのを知らねーらしいな。

「ケケケ、ソノ程度カヨ。ソナンジャ、肉モ焼ケネエーゾ！」

「防がれた！？」

「退け私がヤル」

大規模な稲妻が四方八方から襲いくる。

が、オレは動かずに避雷針のように地面に電気を受け流した。当然まだ地面は濡れており、電気は拡散する。

オレの【二相の器】は液体の金属だ、沸点・融点は2000 近くある。だから簡単には溶けないんだが、さっきの炎でちよつと蒸発しちゃったな。まあ、オレが有利になるだけなんだがな。

『はっ・・・ぐっ』

次々に巻き添えになった雑魚どもが消えていく、水に巻き込まれ、炎に焼かれて、感電死ってな。憐れなもんだな、同士討ちってのはよ。

「ザマアネーナ、モウ三人シカ残ッテナイノカヨ。正直期待外れダゼ。」

「『貴様あ！』」

スタンドプレーってのは一種のチームプレーなんだが、こいつらのはただの足の引っ張りあいだ。三人いっぺんに攻撃したらいいってもんじゃないぜ？そんなの小学生でもわかることだぜ

稲妻が大量の水を分解し、酸素と水素に、それに火がつけば

「大爆発ダゼ」

屋内での爆発は想像を絶するものがあつたな、ゴリアテモードのオレと黒いなんか以外全部ぶっ飛んじまった。

造物主の根城は現在進行形で崩落中だ、オレは黒い物体を包むように【二相の器】をドーム状に展開させた。

「コノ黒イノ・・・確力、他ノ世界ノゲートダッタヨナ。オレモ入ッチャダメカ？」

十分ほど黒い物体を眺めていると変化があつた。黒いなか揺らめいて小さくなって、人の形が浮かび上がってきた。

「チャチャゼロ、ここどこ？」

「ケケケケケケケケ」

「いや答えるよ。じゃ早速、えい。」

「ケツ？」

隣にいた男とさよを重力魔法で赤い液体に変えてしまった、見事に液状になっている。その男とさよを使って御主人は地面に描かれ

た魔法陣を上書きするように新しく魔法陣を描きはじめた。

「　　」

鼻歌交じりで魔法陣を構築していく、御主人……。やっぱりあんたはイカレテル。最高に狂っちまってるぜ、人間の絵の具で魔法陣を描くなんて、人間には到底できない。殺す段階で、ぐちゃぐちゃにするときに、人間の絵の具の色や臭いに発狂するはずだ。

でもともと狂ってんなら問題ねえ、しかもいままで見た狂人のなかでもピカイチだ。まえの御主人……。エヴァなんて比じゃないぜ。

「ここをこうしてと……」

大体御主人の使う怪しい魔法もそうだ、人間じゃ正気でいられないほどの狂気が使ったびに溢れてるんだぜ？御主人気づいてるか、造物主よりよっぽどあんたのほうがバケモンだぜ？

++++

僕の考えた方法は簡単だ、魔法世界を旧世界のようにしてしまえばいい、自分で魔力を供給できるように活性化させるというものだ。

活性化させるのにはそれこそ膨大な量のエネルギーが必要だ、今の地球以上の力が……。そんなのどこにあるかというと、今はない。

だから作り出すしかない、僕の手で。

活性化させるための魔法陣を描くにはフェイトの血だけでは足りない、さよの仮の体も借りる。なぜ血かというと血・体液というのは魔力を通す上でもっとも伝導がいいからだ、人道的に問題はあるかもしれないが誰でもやることだ。

魔法陣を描いたらさよに魂の操作をして貰って、フェイトの魔力とさよのスクナの力と自分の気のエネルギーを混ぜ合わせていく。

つまり感卦法や六面八臂と同じやり方だ。

魔法陣の真ん中で力を制御するために集中する。

いつも道理に力を練り合わせていく、体から破裂しそうなほどに張りつめた純粋なエネルギーが溢れてくる。一瞬でも集中をとぎらせたら、爆死死体ができあがるだろう。

っ危ないこんなこと考えるな、ただ力を制御するだけでいい、安定するまで集中……。

来たっ！体を包む全能感！漏れ出る力だけで体が浮き上がる！

「クフフ、【シュブニ・グラ シュマ・ゴラス 全てに繋がりし力の根源よ】」

僕が詠唱を始めると魔法陣が僕の力を根こそぎ奪ってくる、本来の僕ならものの数秒で死に至る量を吸われても全然減った気がしない！いいぞっ！すごくいい！最高にハイってやつだ！

「【闇よりもなお深きものよ 光よりもなお目映きものよ】」

魔法陣から周りを判別できないほどの魔力光がはじける。

「【原初の海にたゆたわん わが魂に眠りしその力】」

魔法陣が地面を這ってこの星を覆い尽くさんとするのが手に取るようにわかる。

「【母成りしものへと 姿を変えよ】」

火星全体が魔法陣に覆われる、枯れ果てた霊脈に僕の力が流し込まれる。

「【古き星の系譜に従い 我が身に集いて形をなさん】」

留まることをしない極大のエネルギーは、大地に生命の息吹を

吹き込む。

「【滅びた姿を呼び戻し今帰らん 正しき流れ あるべき姿に】」

魔法世界中に光が溢れ、人々はその光景に目を奪われる。

「【生命回帰】」

最後の一小節を詠み終わると魔法が完成し、星は鼓動を開始する。

そして僕はこの奇跡ともいえる魔法の余韻に浸って

弾けた。

相手に勝つということ（後書き）

主人公、爆殺！

超展開故に致し方なし

やっぱうちの子は運がドジッロですねぇ

あつ、次回最終話です

無名の救世主

「ケケ――ケケケケ？――ケケケケケ！」

イキナリ目の前で起こったことに思わず嗤ってしまった。さっきの馬鹿な連中の爆発とは全然違う種類の爆発、まるで内側から壊れるように、小さな光点が御主人……。

いやネギの体中を包み、刹那の時に、消えて無くなってしまった。

「オイオイ！ソリヤナーゼ！テメーハ水ノ泡力ヨ！」

そこまで言っていることに気づいた。ネギが死んだということは、契約が途切れたということだ。つまり【二相の器】は消え去り、支えるものがなくなった。この地下組織は崩壊するということだ。

崩壊する地下遺跡の中をひた走る。ゴロゴロと転がる巨石を乗り越え、墜ちてくる瓦礫に飛び乗り上を目指す。

ネギが何をしたかったのか、何を成したのか、何も感慨も興味も一片も湧かないがこれだけはわかる。この世界に溢れる魔力は、ネギの仕業だと。

まるでエヴァの別荘のように、魔力に溢れた世界が、チャチャゼ

口のことを歓迎するかのように、ただの人形であるこの身に魔力が注ぎこまれる。

「ナンドガワカラネーガ、ネギ八死ンジマツタゼ」

『そうか……。それでチャチャゼロはこっちに戻ってくるのか？』

「イヤ、ココニイルゼ。折角自由ナンドガラナ。」

エヴァはそうかといって念話を切った。どうせ戻ってもあの動けない日々に戻りなだけだ。それに今のエヴァには茶々丸もいるし、友？もできた。

殺すことしかできないオレじゃ、ただ迷惑を掛けるだけだ。それだったらこっちで悠々自適の殺戮の旅に出るのも悪くない。あとのことはネギの関係者がなんとかするだろう。

今、オレがすべきことは、ネギの墓場に近づくゴミの処理だ。

「片腕ダト、不便ダナー。」

この身が尽きるまで、御主人の命令は遵守する。それがオレの存在意義だぜ。

+++++

あれから一月ばかり経った、完全なる世界は少しの残党を残して滅びた。しょーがねーよな、中心人物がほとんど死んだんだからな。

ネギの仕出かしたことは『世界新生』とかいわれてるも、大体の一般人にとってはちよつと呼吸が楽かな程度にしか感じられないらしい。

それにあれを仕出かしたのをネギだとは分からず、一部では神が降臨したとかいつてるみたいだな。実際、魔法世界中に魔法陣が敷かれたときの混乱は凄かつたらしいしな。

「『プラクテ・ビギナル アールデスカット』オオー、ツイタツイタ。」

まあ、終わったことだしな。どうでもいいか、それよりオレモ魔法が使えたことのほうがすごくね？

そういえばエヴァのヤツ『チャチャゼロ、その・・・なんだ・・・私のネギとの仮契約カードを知らないか？』とか、いつてたな。ネギの葬式の日。

「ケケケ」

ああ、なにやらネギのファンクラブでも葬式してたっけな。麻帆

良学園では一部の生徒（ファンクラブや魔法関係者）を除いてほとんど忘れてるってのにな、どうやってあの結界の呪いに抵抗してんだか。

「誰も知ラネエ」

これもいらねえから燃やすか

++++

突如、魔法世界に起こった。惑星大活性、世界の新生と呼ばれた謎の現象は、魔法世界中に波紋を生じさせた。

世界中の学者や魔法使い、果ては旧世界の魔法関係者にもこの現象が研究され、そしてありえない現象であると結論付けられた。

なぜならあの魔法陣に注ぎ込まれた魔力の量が多すぎたからだ。明らかに人が御しきれぬ力ではない、もしあの力を使えるものがいたらそれは神と呼ばれる。

人に使えないなら星自らが行ったのではないか、という意見も出たが、それもありえないとされた。

英雄と災厄の間に生まれた、救世主は誰にも知られず忘れられていった。

}}
END
}}

無名の救世主（後書き）

しゃ！ありがとうございました。

ということでヒロインはチャチャゼロでした！アーニヤは身代わりです。

エヴァの仮契約カードは闇に包まれました。こんな駄文でしたが、きつと誰かが三次創作でアレンジしてくれるでしょう。

それではまた逢う日まで！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2055p/>

転生人生 【極悪の葱】

2011年5月4日21時05分発行